

菅江真澄資料センター

真 澄 研 究

26号

菅江真澄の和歌と地名——信濃の旅から——……石 井 正 己 1

現代語訳《ふでのまにまに》第二巻……………嵯 峨 彩 子 15

真崎文庫内叢書における

真澄遺墨及び関係資料写文の翻刻……………松 山 修 59

令和4年3月

秋田県立博物館

菅江真澄の和歌と地名——信濃の旅から——

東京学芸大学教授 石井正己

一 二一世紀に始まった菅江真澄の和歌研究

広く知られるように、柳田国男は一九二八年の講演「秋田県と菅江真澄」(『秋田考古会々誌』第二卷第三号、一九三〇年。後に柳田国男『菅江真澄』(創元社、一九四二年)に収録)で、「真澄翁の歌には殆ど一首として名歌がありません。単に凡庸だといふのみで無く、其吟詠の態度にも、文章の方に現はれて居るやうな真率味がありませぬ」と批判した。この発言は後世に強い影響を残し、民俗学の先人としては評価されたが、歌人としてはまったく評価されなかった。

それでも、柳田は、「今の人を感動せしめるやうな歌を、抜き出さうとすればそれは不可能なのです」と言いながらも、「強ひて感心するならば即興の軽捷、千首万句口を突いて出るといふ点で、之を要するに唱和の雄でありました」と評価した。そして、「殊に我々の間には伝統がありまして、雅語を五七五に排列するの技能を重要視して居りました故に、それが到る処万人の尊信を博し、従つて遊歴の資となつて居たことには少しの不思議も無いのであります」と加えたのであ

る。

柳田は真澄の和歌を「凡庸だ」と批判したが、実は「遊歴の資」として和歌があつたことを認めていることに気がつく。すでに明治の近代短歌として、正岡子規の写生歌ばかりでなく、与謝野晶子の恋愛歌や石川啄木の生活歌が生まれていたので、そうしたところから見れば、「今の人を感動せしめるやうな歌」はないということになってしまふにちがいない。だが、こうした価値観で真澄の和歌を見ていいのかは、根本から問い直されなければならない。

柳田は、「今日遊覧記の巻々を通読して見ますと、どこでも同じやうな風月の興、人の情のうれしさと旅人の愁ひを、定まつた様式格調を以て五十年間繰返さなければならなかつたことが、如何にもこの孤独の人の気の毒さを思はせるばかりであります」とした。しかし、遊覧記のどこを見ても、真澄が「孤独の人」であつたとはとても考えることはできない。柳田は「気の毒さ」と情緒的に見たが、それは偏つた見方であり、それでは膨大な真澄の和歌を捉えることはできないだ

ろう。

こうした柳田の評価に対する批判は、二一世紀に始まる真澄研究の大きな動きになった。秋田県立博物館菅江真澄資料センター編『菅江真澄和歌 全歌編（第一版）／総句索引編（第一版）』（秋田県立博物館菅江真澄資料センター、二〇〇四年）は、真澄の全歌を抽出して、総句索引を用意した。将来はさらに精度を上げ、引歌索引などとともにデジタルデータとして再編集する必要がある。

研究としては、細川純子『菅江真澄のいる風景』（みちのく書房、二〇〇八年）、佐伯和歌子『菅江真澄の旅と和歌伝承』（岩田書院、二〇〇九年）、錦仁『なぜ和歌を詠むのか―菅江真澄の旅と地誌―』（笠間書院、二〇一一年）、細川純子『菅江真澄の文芸生活』（おうふう、二〇一四年）、石井正己『旅する菅江真澄―和歌・図絵・地名でたどる―』（三弥井書店、二〇二一年）が続いた。

私自身は、先般、石井正己『菅江真澄『わがこころ』再考』（『真澄研究』第二五号、二〇二二年三月）を著した。これは、歌枕として有名な姨捨山に真澄が中秋の名月を見に行った日記を分析したものである。しかし、和歌に比べてほとんど研究が進んでいない地名については、十分に論じることができなかった。そこで本稿では、出発点にあたる信濃の旅におい

て、真澄がどのようにして地名を和歌に詠み込んだのか、その表現方法について述べてみることにした。

二 「歌枕」「物名」「隠題」「折句」「雀冠」の技巧

今、和歌について手短かに知ろうとするならば、『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）が役に立つ。いわゆる歌学用語として、増田繁夫の「歌枕」があり、和歌に詠まれた地名について簡略に説明している。歌枕について言えば、すでにひめまつ会の編『平安和歌歌枕地名索引』（大学堂書店、一九七二年）があり、片桐洋一「歌枕歌ことば辞典」（角川書店、一九八三年）、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）も出ている。

だが、真澄遊覧記を見てゆくと、当然のことながら、歌枕には該当しない地名がおびただしく出てくる。従って、そうした地名は従来の和歌研究では対応できないことになる。しかし、実際には、真澄は現在ではすでに失われたような小地名を書き残し、そこを通り過ぎる際にしばしば和歌を詠んでいる。こうして旅の先々で地名を和歌に詠み込むことは、平安時代以来の物語や日記・紀行の伝統である。しかし、真澄の場合、その地名は王朝和歌の歌枕の範囲外に属しているこ

とが多い。

やや先回りして述べてしまうならば、真澄が蝦夷地だけでなく、歌枕以外の地名を和歌に詠み込むときに使ったのは、伝統的な和歌の物名・隠題、さらには折句・杵冠と呼ばれる技法であったことに気がつく。先の『和歌文学大辞典』には、小池博明の「物名」、岡崎真紀子の「隠題」、久富木原玲の「折句」、小池博明の「杵冠」が立項されていて、参考になる。だが、勅撰集の物名歌を説明した小町谷照彦の解説が短く的確なので、それを引いておきたい。小町谷は『古今集』巻第一〇に四七首ある物名歌について、次のように述べている。

「物名歌」は、事物の名を隠して歌に詠みこむという特殊な技巧の歌で、発生的には言霊信仰による呪術的な要素もあつたと思われるが、言語遊戯性の色濃いものである。歌の意味性にかかわりなくかなり無理をして事物の名を取り入れているので、発想や表現に特異な面も見られ、動植物・地名・食物など題となる事物にも正統な歌には詠まれない卑俗なものも日常的なものも含まれ、独自性を持った部立として注目される。折句や杵冠くかむりの歌も収められている。(小町谷照彦訳注『古今和歌集』旺文社、一九八二年)

物名は事物の名を歌の表には出さずに隠して詠む。『奥義抄』で物名を「近代の是を称隠題也」とするのは、そうしたことによる。それは、『古今集』で「ほととぎす」を詠んだ⁴²³ 来べきほど時すぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をとよむる」のような例でも明らかである。事物の代表は動植物だが、地名もある。地名を詠み込んだ歌は八首見られ、その中に「からこと」という地名を詠み込んだ一首がある。

からことといふ所にて春の立ちける日よめる
安倍清行朝臣

456 波の音の今朝からことに聞ゆるは春の調べやあらた
まるらむ

「からこと(唐琴)」は岡山県倉敷市の地名とされ、そこで立春になった日に詠んだ歌である。歌意は、小町谷訳によれば、「波の音が今朝から変わったように聞えるのは、春の調べに改まったからだろうか」となる。補注で「今朝からことに」に地名の「唐琴」を隠し、楽器の「唐琴」を連想。季節によって、音楽の調子が異なる」と述べるように、表現はやや複雑である。楽器の「唐琴」と「音」「聞ゆる」「調べ」は縁語になる。

物名のうち、さらに技巧を凝らしたのが、各句の最初に五音からなる語句の一音ずつを置いて詠む折句であり、それをさらに複雑にして、一首の最初と最後に二音からなる語句を置いたり、各句の最初と最後に一〇音からなる語句をそれぞれ一音ずつ置いたりして詠む杵冠である。こうした物名歌は『拾遺集』巻第七でも部立になっていて七八首を収めるが、その中に地名を詠み込んだ歌は一四首ある。小町谷照彦は校注『拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）の解説で、「事物名は、歌語でないものが多く、日常生活に身近なものが見られ、風俗史的な資料にもなる」と補足している。

三 風越山を詠んだ和歌と古歌の引用―『伊那の中路』①

一七八三年（天明三年）、真澄は三〇歳で三河を旅立ち、信濃に入った。そのときの日記が『伊那の中路』である。三月一五日、飯田に着いた真澄は、旅籠の前を中根某という者が通るのを見つけた。中根某は、手習いの最初に学ぶ「難波津に」「浅香山」の二歌を書きはじめたときから慣れ親しんだ友人であった。歳月を隔てて久方ぶりに会ったが、それでも顔を忘れることはなかった。

真澄が「某ではないか」と呼ぶと、中根某は手を打って、「これは思いがけず、どうしたのか。まあずいぶん経って会っ

たことだ」と言つて、先立つ涙を隠した。「こうしたことなのでしようか、まさしく昨夜は夢でお会いしたのは」などと互いの無事を喜び、これまでの話をさまざまにして、「あつと言う間に老いてゆくつらさを忘れるために酒を飲みに行こう。さあいらつしやい、近い辺りに案内しよう」と言つた。

飯田で暮らす中根某が真澄を誘つて、歌枕で有名な風越山に向かったのは、幼いときに和歌や書道を学んだ親友であれば、ごく自然なことであつた。真澄は桜の花盛りの風越山への行き来を次のように書いている。やや長くなるが、引用してみる。

こゝをしばし行て風越山（飯田市）の麓なる、くくりひめをまつり奉る、ちいさきほくらのありけるみまへより、峰の雲、尾上の雪とまばゆきまで、こゝらの桜いま盛なるに、こゝろうかれて、芝生のうへに居て、夕日うらうらとかげろふまで見つゝありて、

風越の山は名のみぞをさまれる御代の春とて花の静さ

つれなう、たかねおろしさとふき来て、雪をこぼすがごとくちる桜あり。うべ西行上人の、「①風越のみねのつづきに咲花はいつ盛ともなくて散らん」とながめられた

る、いにしへの春のあはれもしられたり。②遠の麓の梅は、いつちり過にけん、③麓の雲のそこに鳴也と時鳥をきき、④雲井に見ゆると望月の駒をおもひ、⑤裾野の薄ほにいづるを手酬にと聞え、⑥しろたへの雪ふきおろす峰の月かげの、など残りたるふるごとを、ずしてかへり見がちに、

心して峰吹かよへ風越のふもとのさくらちりなんも
うし

此ふもとをさきていでくれば、前にさか壺すへて、ものあきなふやの、かやふける軒に、大なる桜の今まさかりなるを、行かふ人々とどまりて、又たくふかたのあらじ。此花のもとにとて、あくらによりのぼりて酒のみあぶぐは、心なきにしもあらじかし。

人ごとにながるゝ霞たちさらで花のかげくむ春の盞

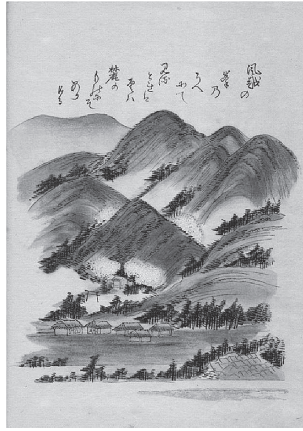
風越山は飯田の北西に位置する標高一五三五メートルの山で、白山権現を祀る。真澄は「風越の」の歌も「心して」の歌も、この山をその名のとおり「風越し」というイメージで桜とともに詠む。王朝和歌以来の伝統的な詠みぶりと言つていい。

内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記 1』（平凡社、

一九六五年）の注では、傍線部①～⑥の引歌を指摘している。それを踏まえて補うと、①は『山家集』の歌で、詞書は「花の歌あまたよみけるに」という題詠。②は『万葉集』巻第一〇の歌で、題詞は「花を詠む」。③は『千載集』巻第三の夏歌で、詞書は「時鳥の歌とてよめる」という題詠。④は『新葉集』巻第一六の雑歌上の歌で、詞書は「信濃国に住み侍し比、駒迎の心を」とあり、宗良親王が信濃にいて詠んだ題詠。⑤は『後拾遺集』巻第五の秋下の歌で、詞書は「題不知」。⑥は『続後撰集』巻第八の冬歌で、詞書は「久安の百首の歌に」という百首歌。④は信濃に住んでいての題詠だが、それも含めて四季それぞれに題詠で風越山を詠んだ歌を真澄が口ずさんだことが確かめられる。

だが、柳田国男校訂『伊那の中路』（三三元社、一九一九年）の頭注では、「こゝにある古歌の断片は、信州の旧地誌類に必ず引用されて居るものゝ句である。筆者は歌よみとして多くの歌集を読んで居たであらうが、信州の古跡や神社を巡り古歌を引用して居る跡を尋ねて見れば、其十年ばかり前に板になつて居た信濃地名考などを、道のしるべにして居たことが想像される」としていた。必ずしも原典を参照しなくても、吉沢好謙の一七七三年（安永二年）刊『信濃地名考』（『新編信濃史料叢書 第一巻』（信濃史料刊行会、一九七〇年）

のような地誌類を参照したと見ている。真澄は古歌を暗唱していたはずだが、こうした文章にまとめる際には地誌類が役立つにちがいない。それらは真澄が携帯したのではなく、本洗馬辺りの蔵書家に閲覧させてもらったと考えるのが妥当だろう。



また、ここには風越山の麓に満開の桜が咲く様子を描いた図絵が載る。そこには「風越の峰のうへにて見るときは雲は麓のものにそありける」という歌も添えられている。まるで

名所図会の挿絵のようである。この歌は『詞花集』巻一〇の雑下に載る歌で、詞書は「信濃の守にてくだりけるに、風越の峰にて」とあり、作者は「藤原家経朝臣」である。柳田国男校訂『伊那の中路』の頭注では、「此歌はこの歌枕の古歌の中で一番人の知るものである」とした。しかし、先に口ずさんだ古歌がみな題詠だったのに対して、この「風越の」の歌は、家経が信濃守として下向した際に、風越の峰の上で雲

を麓に見て詠んだ実景の歌であった。春の桜を詠んだ歌ではないが、この歌が添えられたのには深い理由があったと考えられる。

四 沓冠の歌で詠み込んだ本洗馬の地名——『伊那の中路』

② 真澄は本洗馬で一年余りを暮らすことになる。季節は夏を迎えるが、『伊那の中路』の六月一〇日には次のような一節が見つかる。

十日「もとせばの里の夏」てふことを、沓冠によめと人のいへば、

① もりにけさとさし近しと蟬の声の葉末もれてな軒に鳴たつ

又、青松山のすゞみといふことを、おなじさまに、

② あかすのみをのへをてらすまちも見ずつきの葉分のやへの重やま

ある人、牡丹の葉折もて、これをもよみてなどありけるに、「ふかみ草ちりしのち」てふことを、

③ ふりひたちかすみし山のみねもなしくさのみ茂りさくる通ひち

①は「本洗馬の里の夏」という地名と季節の題詠で、○印でわかるように、各句の最初で「もとせばの」、各句の最後で「さとのなつ」を隠し、「森で今朝、戸を差し固めても近くにいと、蟬の声が木々の葉先から洩れて軒先で鳴き立てる」くらいの意味だろう。

②は「青松山(青松山長興寺のこと)の涼み」という地名(山号)と季節の題詠で、○印でわかるように、各句の最初で「あをまつや」、各句の最後を遡って「まのすずみ」を隠し、「満足せず月がひたすら峰続きの高所を照らしている。待つて見ることもなく、月の光が葉と葉の間を分けて幾重にも重なる山であることよ」という意味だろう。

③は「深見草(牡丹の異名)散りし後」という植物の変化の題詠で、○印でわかるように、各句の最初で「ふかみぐさ」、各句の最後を遡って「ちりしのち」を隠し、「雨が降り日が出て霞んだ山の峰にもない、雑草ばかりが茂っているので避けて通ることできる道は」という意味か。ややわかりにくい。

ともかく、①～③の三首は出された題をすべて沓冠で詠んだ歌という点で共通し、①②は「本洗馬の里」「青松山(青松山長興寺のこと)」という地名を詠み込む。やや詠み方が

異なることは、柳田国男校訂『伊那の中路』の頭注が説いている。それに今の①～③を加えると、「以下の二首(②③を指す)の沓冠は前の(①を指す)とは違つて、下から折返すやうに詠んでゐる」となる。沓冠には二種類があつたが、真澄はそれぞれの沓冠の詠み方を使ったのである。

重要なのは、『伊勢物語』第九段の「かきつばたといふ五文字を句の上に据えて、旅の心を詠め」と求められて、「唐衣」で始まる折句の歌を即座に詠んだような場面があることである。①は「もとせばの里の夏」てふことを、沓冠によめと人のいへば、②は「青松山のすゞみといふことを、おなじさまに」、③は「ある人、牡丹の葉折もて、これをもよみてなどありけるに、「ふかみ草ちりしのち」てふことを」である。真澄は「人」「ある人」から、その場所と季節にふさわしい題とともに沓冠の歌を求められた。「人」「ある人」としかなので、誰の求めかはわからないが、こうして沓冠の歌を求めめる人が本洗馬にいたのである。真澄は孤立した状態で歌を詠んだわけではなかったことがはつきりする。そして、真澄はこうした難題に見事に応え、本洗馬の人々の信頼を得たのだと思われる。

もう一例は、『わがこころ』の旅の後であるが、冬の一〇月二一日、松本の郊外の和田における一節である。

こよひは和田（松本市）といふ村にやどかりぬ。やのぬ
しのいはく、こたびのおんはしらは、よつながら、こと
なうたちぬ。あるとしの御柱は人あやまち侍るゆへ、こ
んとしにて七とせにあたれど、これをことしぞし侍るは、
さるためしよからねば也と、かたらひて更ぬ。夜とともに
に林のおち葉、霰うちまじり、板ひさしうつ音、風とく、
木の枝もをれぬべう聞えたる音に、ねぎめしてきけば、
あられいよゝをやみもやらぬに、

山かぜのあられさそへばたまくらの夢もくだけで明
ぬこの夜は

諏訪地方一帯では御柱の神事が行われるので、真澄はそれ
を三の宮に見に行つて、和田に泊まつた。家の主人は「今度
の御柱は四本とも無事に立つた。ある年の御柱は人が怪我を
しましたので、来年が七年目にあたるが、これを今年します
のは、そのような先例がよくないからである」と説明した。
四本の神木を山中で伐りだして運ぶ際に、綱が切れて怪我を
したり死亡したりすることがあったので、縁起を担いだので
ある。

夜が更けるのとともに落ち葉に霰が混じり、板底を打つ音

がし、さらに風が吹き、木の枝が折れそうな音がして、寢覺
めて聞くと、霰がますます止まないのので、真澄はその様子を
「山かぜの」の歌に詠んだ。柳田国男校訂『伊那の中路』は「あ
られさそへは手枕」として○印を付けていないが、内田武志・
宮本常一編『菅江真澄全集 第一巻』（未來社、一九七一年）
は底本に従つて○印を付け、「ばた」に「和田」を隠したと
見る。「ば」と「わ」の仮名遣いの違いもあるので、判断に
迷うところではあるが、地名を詠み込んだ物名歌である可能
性を示唆しておきたい。

五 善光寺街道の地名を詠み込んだ物名歌―『わがころ』

①

真澄は『伊那の中路』から姨捨山への行き来を抜き出して、
『わがころ』にまとめた。本洗馬から松本を経て善光寺街
道に入ると、もはや歌枕とは呼べないような小地名が続く。
それを真澄は巧みに歌に詠み込んで行く。八月一三日に次の
一節が見える。

刈谷原（東筑摩郡四賀村）といふところに鷹（かり）の
鳴けれど、つらは見えざれば、

声斗そこともしらぬはつかりやはらはで霧の中に行

らん

「刈谷原」という場所で雁の鳴き声を聞いたが、姿が見えなかつたので、「声だけがしてそこにいるとも知られない初雁は、邪魔なものも払わずに霧の中を飛んで行くのだろうか」と詠んだ。○印で示されたように、「刈谷原」の地名を隠している。

続く八月一四日には、こうした地名と和歌が連続する。やはり長くなるが、引いてみる。

北、ひんがしのやまくは蕎(麦||脱)ばたけにて、花のましろに咲たるは、みねも麓も、雪のふれるかと思つゝくだりて、みだれはし(本城村)もなかば過ぎくとて、
①袖にちる露のみだれはし(本城村)もなかば過ぎくとて、し

赤豆阪をこゆるとて、

②秋ながら袖にあせして身にあつきさかまくいきのむねにくるしき

法橋といふめる邑に、みほとけのおはしませば、をがみ奉りて、

③舟ならで仏の法のし柱人わたすとて名たておきけ

らん

荻屋沢邑(坂北村)のやかたを行野辺に、とがまをふりかざし男の行が、うたのみひたにうたふ。

④ますらおがうまくさかりや沢の辺の薄高かやふみしだき行

青柳といふすく(宿)につきぬ。あまたの家居軒をつらねて、とみうど(富人)ぞ多かりかる。

⑤風にちる例もしらすで青柳の里の栄えは春ならずともいはほきりわけて、名を、きりとをしとて人を通しぬ。あざか河を渡りて、あたらしう家作るを下井堀(麻績村)といふといへば、

⑥民草の宿やさかへんこゝにしも井ほり田うへて人のすめれば

岨のはたなかに、大なる槻の一本生ひたてるふる塚のあり。此したつかたは、石をたゝみあげたる、大なるやのごとき洞也。世のしづかならざる頃、宝かくし入たる石室といひ、又、氷の雨のふりこんを、しのがん料に作りたりけりとも、家居いまだたても初めざる、あがりたる世のすまぬとも世にいひ、国々に在る、かくれがの、いとひろきなり。むかふかたに、やのおほく見えたりけるは矢倉村(麻績村)といふとか。麻積(麻績)の里に休

らひて、女の、はたをれるを見つゝながめたり。

⑦しづはたのりをりぬふわざのいとなさやくゝにをうみの里のわざとて

柳田国男校訂『わがこゝろ』（三元社、一九二九年）では、「あつきさか」「苺りや沢」に○印を付けるが、『菅江真澄全集 第一巻』では、「あつきさか」「かりや沢」に○印を欠く。底本の段階で見落としがあるらしい。①の「露の乱れは篠薄」に「乱橋」、②の「身に熱き逆巻く息の」に「赤豆阪」、④の「馬草刈りや沢の辺の」に「苺屋沢」、⑥の「此処にしも井掘り田植へて」に「下井堀」をそれぞれ隠した物名歌である。真澄は新たな小地名に出会ったとき、それを歌の文脈からは隠す物名歌にして詠み込んだのである。従つて、②のような坂を越える苦勞を詠んだ歌では、王朝和歌には見られないような表現も出て来ることになる。

④は「法橋」という地名を「御仏のおはしませば、拝み奉りて」という状況に合わせて、「法の橋」という歌ことばにして詠む。⑤は「青柳」という地名だが、これも「青柳」は歌ことばなので、そのまま詠む。⑦は「此処に芋績み」ではないが、「麻績（麻績）の里」と掛詞の文脈を作つて詠む。真澄は新たな小地名であつても、それが王朝和歌に見られる

伝統的な歌ことばで解釈できるならば、そのまま表に出して地名を詠み込んだのである。

この道行きを読むだけでも、真澄は二種類の詠み方を使つて小地名を詠み込んでいたことが確認できる。それはどちらも王朝和歌の技巧であり、それを信州の旅で生かしたことになる。ただし、この中でも、「きりとをし（切り通し）」は普通名詞かもしれないが、「あざか河」は麻績川の別名であり、これを渡つたにもかかわらず、歌に詠んでいない。真澄がすべての小地名を詠んだわけではないことも、当然のこととは言え、確認しておきたいことである。

六 偶然の出会いで詠み込んだ竹敷の浦―『わがこゝろ』②

真澄は八月一五日に姨捨山の月を見て、さらに北上して善光寺に参詣することにした。八月一六日、ふと道連れになつた雛川清歳と会話が弾む一節がある。

善光寺にまうでんとて、そのすぢをわくる。行ずりの、うちつけにものかたらふは雛川清歳とて、もゝふねのはつる、つしま（対馬）のくにより来ける、よべ（昨夜）見し人なり。をさなきより朝鮮に渡り、ことさやぐこと
の葉をまねび、ことかよふをわざとせりけれど、身に、

いさゝかあやまりおかし、かくさすらへありく。路の
辺に休らひ、諺文（げんぶん）して、なにくれと、こと
やうにかいなし、その国のこと葉もて、かれはかく、こ
れはかくぞいふめるなど、ときかたらひてけるに、浅茅
山の梢しぐれん色も、うへかたのやしほにそむるも、名
も竹敷の浦間のみち、われ行て見まほし、いかになど
こととひかはして、

たかしきの浦の桧葉よる波にちらすなゆめとたちや
出けん

とてやれば、此きよとし、越のくににまかるとて、わか
れたり。

雛川清歳は対馬から来て、昨夜姨捨山で会った人だった。

「百船の泊つる対馬」は『万葉集』巻第一五の「百船の泊つ
る対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり」を踏まえた表
現である。対馬は遣新羅使が碇泊する港が浅茅湾にあり、そ
こで使者や遊行女婦が歌を詠み交わした。真澄はそれを踏ま
えて、この場面を書いている。

清歳は幼いときから朝鮮に渡り、聞きにくい言葉を学び、
言葉を取り次ぐことを仕事としていたが、身にちよつとした
過失を犯して、こうしてさすらい歩いてきた。路の辺りに休

んで、ハンゲル文字であれこれ変わった様子に書きなし、そ
の国の言葉で「あれはこう、これはこう言うようだ」などと
説明してくれた。清歳は対馬で朝鮮語の通詞の家柄に生まれ、
朝鮮の倭館で外交や貿易の仕事をしていたが、過失を犯した
ために朝鮮にいられなくなり、放浪の旅をしていた。過失の
内容はわからないが、倭館は女人禁制だったので、女性問題
で追放されたのではないかと想像される（田代和生「倭館―
鎖国時代の日本人町―」文春新書、二〇〇二年）。

柳田国男校訂『わがころ』の頭注では、「此雛川氏のこ
とは尋ねたら分りさうだ。ちよつと面白い話である」として、
読者に喚起を促した。内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集
第一巻』の註では、「その経歴はここに書かれている以外
のことはわからぬが、朝鮮にわたった体験を語るることによつ
て旅することができたということは真澄の旅を考える上（ウツ）に参
考になる」とした。しかし、なおこの人物の詳細は不明なの
で、韓国の倭館研究者に尋ねてみたいと考えている。

真澄は清歳の話聞いて、「浅茅山の梢に時雨が降る色も、
山の上の方が時雨で色濃く染まるのも、あの有名な竹敷の浦
間の紅葉を、私は行つて見たい、どうか」など言い交わして、
「たかしきの」の歌で清歳の境遇に思いを寄せた。社交辞令
的な挨拶の言葉と和歌であり、その後真澄が対馬に行くこと

はなかった。それでも、故郷の対馬から朝鮮に渡ったものの、そこで人生を終えることができずに放浪している境遇は、わが身と引き比べられたにちがいない。

姨捨山の月見にはおびただしい人が訪れていたが、その中に真澄も清歳もいたのである。こうしたことは、この日記を見なければ知ることができない小さな事実である。二人の出会いは偶然だったが、清歳の話を受けて、真澄は『万葉集』に見える対馬の地名「たかしき（竹敷）の浦」とその景物「楢葉」を歌に詠んで贈った。日記には、こうして真澄がいる場所とは関係のない地名を詠み込んだ歌が出て来る。これも旅による多彩な出会いが生み出す地名の表現として考える必要がある。

七 「真澄遊覧記信濃の部 地名と人名 校訂本附録」の意義

最初に出た『来目路の橋』（三三元社、一九二九年）をはじめ、『伊那の中路』『わがこころ』を含む真澄遊覧記信濃の部は、信濃の部委員の支持を受け、大きな影響を及ぼした。秋田と並んで、信濃が真澄研究のもう一つの動きをつくつていたのである。

そのときに、信濃の部委員が深い関心を持ったのは、日記

の中に出て来る地名と人名であった。そこに記された地名と人名にはすぐにわかるものもあれば、調べなければわからないものもあり、さらには調べてもわからないものがあつた。それを柳田国男校訂『伊那の中路』の巻末に、「真澄遊覧記信濃の部 地名と人名 校訂本附録」として載せた。編纂責任者は胡桃沢勘内であつた。冒頭は次のように始まる。

「来目路の橋」の校訂本に就て、先づ第一に上田市の飯島花月翁から、其頭註に關して意見を報ぜられ、次に伊那町在住の八木貞助氏から、本文中の地名は現行の書き方や稱呼と相異して居るものゝ少く無いことを指摘し、其他固有名詞には成るべく多く註を加へるやうにといふ希望を申越された。元来此校訂本は単に原本読下の上に甚しく難解の字句を書き改めるのが主で、頭註なども簡略を旨とせられたものであつて、これによつて此地方に於ける、今後の研究を期待せらるゝものであつたが、此等の反響に刺戟されて信濃の部委員から諸方に照会して得た資料を試みに茲に列記して見ることにした。本会の雑務の中に在つて時日も短かつた上に、照会に対する回答の無かつたのもあるので、精粗一ならず全体から云へば不完全であることを免れない。

茲に列記するものは、大体「来目路の橋」「伊那の中路」「わがこころ」の覆刻本から固有名詞を探り、地名には成るべく現行の郡市町村名を註記したのであるが、小地名のいくつかには尚其不明なるものがあつたのは、前述の理由によつて止むを得ぬことであつた。人名に不詳なるものが少なからずあるのは、此百四五十年の歲月は、斯くまでに人を幽界に送つたきり、忘却せしめてしまつたことに今更心づいて、一種の寂しさをさへ感じたことであつた。(後略)

口火を切つたのは、江戸学者の飯島花月と考古学者の八木貞助であつたが、(後略)としたところには、小池直太郎・安間清・市村成人といった一七名の名前が並ぶ。胡桃沢は「元來此校訂本は単に原本読下の上に甚しく難解の字句を書き改めるのが主で、頭註なども簡略を旨とせられたものであつて」と趣旨を説明したが、信濃の部委員は郷土に密着した読み方をしてゐた。その際に浮上したのが地名や人名という固有名詞だったのである。こうした動きにすばやく対応して指摘を取りまとめ、「校訂本附録」に「通過地方略図 伊那の中路」を添えて載せたのは見事な英断であつた。

その中にはここで触れてきた内容と深く関わる記載もあ

る。例えば、飯田の「中根某」は「或は高遠の儒中根覺太夫経世かと考へたが、故郷に在つての友らしいから、さうでは無かつた。中根といふ名字は岡崎辺にもある。(高津)」とある。中根某は真澄が幼いときに和歌と書道と一緒に学んだ親友で、結局誰かはわからないが、「故郷に在つての友らしい」、「中根といふ名字は岡崎辺にもある」というのを深読みすれば、真澄の故郷を岡崎とする説に傾いてゆくことになる。

「くぐり姫の祠」には、「風越山東麓に白山神社がある。維新前には頂上に白山権現、麓に白山寺があつた。白山寺に菊理媛を祀つてあつて、これが風越の白山権現の前宮であつた。(市村)」とある。これは、柳田国男校訂『伊那の中路』の頭注の「菊理媛を祀り奉る小さき祠」に「白山神社のことである。今も存するや否」とあつた問いに答えたものと言つていい。先の図絵にもお宮が描かれていた。日記の記述や図絵が地元の視線で読み解かれていたのである。

また、先に見た善光寺街道の小地名については、次のようにある。

苅谷原 東筑摩郡錦部村。これから会田までは所謂嶺間部である。

乱橋 東筑摩郡本城村。こゝから麻績迄所謂筑北である。

赤豆坂 この名は記憶する人が無い。中の峠といふのであらう。

法橋 これも土地の人の忘れた名である。善光寺道名所
函会には、西条村のうちの小名とある。町の中に橋があつて、そこに寺がある。

苜谷沢邑 東筑摩郡坂北村。

青柳 同。此辺は煙草の産地であつた。切通しは天正八年に開き、後享保と明和に改修した。真澄翁通過後には、文化年間の普請がある。

あざか河 麻績川の別名。同じ郡坂井村安坂に上流がある。

下井堀 東筑摩郡麻績村。上井堀は日向村である。

矢倉村、市の川 何れも麻績村。

麻積の里 麻績である。青柳の次の宿場。

まことに簡略な記述であるが、信濃では確かに真澄の地名研究が始まっていたのである。

こうした動きは、さらに続いた。信濃教育会下伊那郡部会編『郷土読本』（信濃教育会下伊那郡部会、一九三二年）の菅江真澄「いななかみち」は、柳田国男校訂『伊那の中路』の前半の抜粋であつた。村沢武夫『伊那歌道史』（山村書院、

一九三六年）は「菅江真澄の来峡谷」を設け、真澄の存在を伊那歌壇史に位置づけた。残念ながらこうした動きは途絶えてしまつたが、真澄の地名研究と和歌研究の先駆的な業績として再評価し、今後を考える一助にしたいと考えている。

こうして『伊那の中路』『わがこころ』の和歌と地名の關係を表現方法の視点から見えてきた。三〇歳の真澄はすでに伝統的な和歌を詠む技量を十分身につけていたことが確認できる。季節の推移と違つて厄介だつたと思われるのは、行く先々での小地名を詠み込むことだつたが、それも技巧を駆使してなかなか見事に達成していると見えていい。だが、真澄が三河でどのようにしてこうした技量を身につけたのかを知ることができていない。それは困難かもしれないが、こうした達成を同時代に置いて検証することは可能はずである。私たちに次の課題が残されている。

現代語訳《ふでのまにまに》第二巻

嵯峨彩子

本誌前号にひきつづき、菅江真澄の随筆《ふでのまにまに》の現代語訳を収録する。同書の概要については前号の解題を参照されたい。

さて、今回訳出する第二巻は四十の章段からなる。その内容は習俗、地名、歌語、古跡などを主なテーマとしている。真澄はこれらの多くの章段で、文献を引用しながらそこに自らの旅の見聞をまじえて批評判定を加え、辺境地域に残存するものから文化の古層を探り出そうと試みている。こうした考証のスタイルや論述の方向性は、基本的に第一巻と同様である。

一方、ここで新たに第二巻から加わった要素もある。それは、真澄自身の著作からの引用である。たとえば、【21】つくしの滝、【22】はしわのわか葉、【27】石神山には、いずれも《はしわのわか葉》からの引用がある。ただし、正確に言えば【21】【22】は日記をそのまま記事にしているため、考証随筆の体裁にはなっておらず、この二つについては引用ではなく転載ととらえるべきかもしれない。ならば、なぜこ

こで日記の転載を入れたのか、またなぜそれが《はしわのわか葉》なのかという問題も検討に値しそうだが、ここではひとまずおく。

また、自著からの引用についてはもう一か所、【4】にしき木の中に、《津軽のおち》からの文章として夏泊半島の椿山を訪れた際の話を載せている。しかし、現存する《津軽のおち》にそのくだりはなく、加えて、津軽での日記にはまとまった形で残るものもきわめて少ないため、津軽時代の真澄を研究する上での資料としても興味深い。

最後に、第二巻のハイライトとして【4】にしき木と【12】みちのくやまを挙げておきたい。どちらも紙幅を存分に割き、【4】では椿明神と錦木塚というふたつの悲恋物語を、【12】では黄金山の伝説と難蔵法師の冒険譚を丁寧に取り上げている。異なるエピソードを縦横に織り交ぜることで、それぞれの物語から生まれるイメージが重なり合い、そこにロマンあふれる東北像が浮かびあがってくるかのような章段である。

(秋田県立博物館非常勤職員)

ア 書名には《》を、原文の割註には「」を、和歌や俳句などの解釈部分にはへゝを、訳註には（ ）を用いた。

イ 検索の便のため、全四十の章段に記事番号を付し、【 】内に示した。また、原文との照合がしやすいよう、章のタイトルのみ原文のままとした。

ウ 原文における人名、地名など固有名詞の表記で、現在の表記と異なるものがあっても、解釈上誤解の生じない限りにおいて、原文の表記をそのまま用いた。

エ ふりがなは原文にあるものと訳者によるものを区別せず、ひらがなに統一して付している。

オ 文献の引用部分もすべて現代語訳し、引用部分が高い場合は、真澄による文章との区別がしやすいように、点線で区切った上で、引用部分全体を二字下げとした。

カ 現代語訳にあたっては、未来社刊『菅江真澄全集』第十卷所収の翻刻を底本とした。また、校正のため、大館市立図書館ウェブサイトに「菅江真澄著作集」画像データを参考にした。

- 【1】 てのくぼ
- 【2】 はこやなぎ
- 【3】 くるゆり
- 【4】 にしき木
- 【5】 鈴と篠とすず
- 【6】 ほそけやくやま
- 【7】 きその真木
- 【8】 えみしのセツツ
- 【9】 ゆのさうじ
- 【10】 こまからかな
- 【11】 山たから
- 【12】 みちのくやま
- 【13】 青麻の神かみ
- 【14】 やまごのもつかた
- 【15】 さくらあさ花はな麻せ
- 【16】 あいたのうらの神
- 【17】 七倉の宮地みやじ
- 【18】 七倉のせき
- 【19】 やたての杉
- 【20】 長ばしりのせき
- 【21】 いつくしの滝
- 【22】 はしわのわか葉
- 【23】 なつぐら
- 【24】 露くま山
- 【25】 ふしかげやま
- 【26】 みやまの夜よ鶏とり
- 【27】 石神山
- 【28】 鷲座山
- 【29】 平弋山
- 【30】 劍峰つるぎね
- 【31】 青玉かけ子
- 【32】 みさき烏田からす
- 【33】 霞かすみがおか岳か
- 【34】 久比の美夜みや
- 【35】 をろち田
- 【36】 めさきぎざむ
- 【37】 ゆかはあみ
- 【38】 たか
- 【39】 ほふりのいみや
- 【40】 阿波岐原

筆のまにまに二の巻 菅江のますみしるす

【1】てのくぼ

強飯^{こわい}（1）などを手の平にのせて食べることを「手の窪す」という地域がある。これは「くぼて」という言葉が由来だろう。「くぼて」とは《延喜式》⁽²⁾に書かれている葉椀のことである。「窪手」の意味であろう。窪杯^{ぼぼ}などというものも同じはずである。

信濃国諏訪の三月酉日の鹿頭を供える神事では、乾いた柏の葉を竹針で縫い通し、それに麴^{かたぢ}（3）を盛って、それを葉盛といっている。また菱形餅、ホンダワラなどの沖に生えている藻、白うさぎなどをみな長い串にさしつらぬいて、御炊^{みかじ}（4）のためであろうか、御供えの米を盛っている桶二つにさして奉っている。

谷川土清^{たにかわとせう}（5）は「くぼて」について「陶器または木製の器がある。現在壺皿と称するものは、それらの風習が遺ったものである」といっている。「神山の柏のくぼて」⁽⁶⁾と相模が詠んだのもこれについてである。

さらに、田舎では田植えの時、朴木柏、檜柏の葉に飯や魚またさまざまなおかずを盛る。同じような木の葉のない村ではイタドリ^{イタドリ}の広葉にも盛る。これを「かいしき」という。その葉はどれもこれもみな柏である。

柏は「かいしき葉」というのが縮まったものだろうか。そ

の窪手というのも、もとは手窪こそがはじまりであろう。

【2】はこやなぎ

三河国額田郡弟見莊（乙見とも書く）岡崎の駅^{うまや}の北へ一里（約4km）ばかり行くと箱柳という山里がある。古くからの土地と思われる。ここでは観世音を産土神^{うぶすながみ}として祀っている。昔この地に箱柳が多かったのを献上したのでいいはじめた村名だろうか。

《文苑玉露》⁽⁷⁾ 下巻の箱柳のくだりに、次のようにある。

賀茂真淵翁がいうことには「《延喜式》などに見られる箱柳は、とりもなおさず今の柳行李⁽⁸⁾のことである。しかし端に竹を添えることはなく、同じ柳で作り、さらにすべて生糸で編む。《賦役令》⁽⁹⁾に、国々から箱柳を献上したことが書かれている。だからとても古い時代からあって、《延喜式》の頃まで同じであった」という。

この柳の漢名は白楊とかいって、はこやなぎと読む。古い時代にこの三河の箱柳村から献上したのだろうか。

【3】くろゆり

黒百合という植物がある。加賀の白山に生える花である。また陸奥の花淵山、松前の東蝦夷にある柄友が崎えととも、大黒嶋、出羽秋田郡馬場ノ目の山にある童神滝の谷、また同じ山の光嶽の辺りにも生えている。

その花は紺色で黒に近い。草の茎や葉は岩百合のようである。岩百合は白山百合というもので、車葉（車の輪のよう）に放射状に付く葉）なので車百合ともいう、その一種である。黒百合は本来それとは違う品種である。里に植えれば黒い色が年ごとに薄くなり、以後は普通の車百合、岩百合となる。

近頃《絵本太閤記》⁽¹⁰⁾という本に、この百合のことがもっぱら書かれており、絵にも描かれているが、車葉に描かれていない。この花を知らないのである。

〔4〕にしき木

月岡丹下という画工が宝暦十二年の正月に刊行した《東国名勝志》⁽¹¹⁾五冊の序の巻で、日の出の浜、松前につづいて、錦塚のことが書かれている。

錦塚〔浅虫・小湊の間にあり、錦木の里がここである〕古い時代、この土地の風習で、男が女を恋い慕ってやって来ると、錦木と呼ぶ柴を束ねて門に立てるが、女が拒

めばそのまま捨て置かれるという。それが千束を超えて、男はついに恋いこがれて死んだということで、錦塚の名が残っている。

〈錦木は立つたまま朽ちてしまった。狭布の細布は胸が重なり合わないというのだろうか〉。

そこから狩場沢、竈門を過ぎて狭の里があり、ここで布を織り出したという。

〈一晩中胸が合いがたいわが恋。そのつらさに比べられるものなどないような狭布（今日）の細布である〉。

ここに描かれた絵を見ると、灯火を掲げて女が機を織っているところに、冠を着けた男が柴を抱えてやってくる図である。

私が書いた《つがるのおち》という日記がある。その日記で、平内〔ヒルナイであつて、もとはアイヌ語である〕の小湊の浜辺に出て椿山を訪れたときに、本当に椿ばかりがとても多く生い茂り、他の木は見あたらない磯山が二つだけ並んでいた。そこに椿明神という神社がある。椿明神は伊勢国にいらつしやるので、それも昔伊勢から遷し奉つた御神であろうかと浦人にたずねると「いいえ、この神は女神です」という答えがあつた。

昔この浦に、とても容姿の美しい女がいた。吉備国の船乗りと将来を誓い合うと、女はいった。

「他国には椿の実が多く、女が髪に椿の実の油を塗ると、その髪が色美しく、つややかになり、すべすべとした椿の光沢を持つと人の話に聞きますが、この国にはあまり椿がありません。その椿の油を自分の髪に塗りたいと思つても、どうしようもありません。今度吉備にお帰りになつたら、来春は椿の実をおみやげにお持ちになつて、私にください。きつとですよ。お忘れにならないで。まあその油の木の実はともかく、来春までのお別れがひたすら死ぬほど悲しいこと、悲しいこと」と

そう言つて、女は男の袖にすがつてよよと泣いた。

「春は必ず大急ぎで船を出してここに帰つてこよう。それに、椿は吉備の中山にとても多い。たくさんみやげに持つて来よう。別れはともに名残惜しい（船尾に波がつきない）ものだ」

男は素晴らしい、ふたりは別れた。

春にもなると女は、今日は船が来るだろう、男が着くだろう、今日はそちらの方の風が東の風に吹いているのだろう、西北風に吹いているのだろう、潮流のよい日よ、はやくめぐつて来ておくれと、待ちに待ったけれどもむなしく春もすぎた。しだいに夏になつて、秋がふけても船が来なかつたので、

これは男の心が他の女に移つたのだろうと、思い悩んで女は重い病の床に臥し、その翌年の春の中頃、女は死んでしまつた。

男は親元に回忌の仏事があつて、二年ばかり心はみちのくにあつても、どうしようもなかつた。この用事が済み、このたびようやくこの小湊にこぎ着いて、女の事を尋ねてみると、三、四日前に病で亡くなつたという。男はこれを聞いて声を上げて泣いたけれどもかきもなく、持つてきていた椿の実七升ばかりを女の墓のあたりにまき散らし、これを手向けて泣く泣く帰つたと言ひ伝えられている。

その木の実が生え出て、年々に椿が咲きに咲いて、今は山二つに別の木は一本もなく、草さえ生えずにこのように茂つている。同じ椿の種であろうに、東の山の椿は早咲きで、西は遅咲きである。

こうしたいわれがあつて、その女の御霊みたまをこのように椿明神と申し上げている。この椿は小枝であろうと、折れて散らばつたものを子どもなどが拾つても風が吹き、海が荒れる。とても椿を惜しまれる御神であるといつて、浦人は畏ればかかるようになった。

この帰り道、小湊の里に出て北の方、童子村「弘法大師作の不動明王像が祀られ、この村に矜こんがら迦羅、制多迦せいたかの二童子の

像もあつたが、野火で焼かれてしまった。それで童子というという村に入った。東の方に大きな榎の木が二本、山際に生えていた。「これはにしぎという木です。昔はここを錦木の里といつていて、有名なところですよ」と、案内人も熱心に語った。

月岡丹下が錦塚といっているのは、錦木塚の事である。それをこの地であるといっている。本当の錦木塚というのは南部の鹿角「古い時代は上津野といつたところである」郡毛馬内「ケマナイもアイヌ語である。ケマとは足をいい、ナイは沢である。今そこに足名沢がある。足の沢である」という地にある。

古い時代、草木の里の男が毛布細道「風張村といつたところにある」を通い、太田原「この里は神田川したにあつて、今はこの村の跡を舟で渡している」の里の市日に行つていつも毛布細布を売る政子まさこという女と将来を深く約束した。男は草木の里から遠い道のりを夜な夜な通い、門に印の錦木を立てて、夜が更けるまで門に忍んでいた。しかし親たちが目ざとく、フクロウの声がすればせき払いし、また狐が鳴けば起き出して外を回つて歩いたので、男は来る夜も来る夜も女に会うことが出来ないまま、鶏が鳴くのでどうしようもなく、朝露に濡れて草木に帰つた。

この親たちは娘を裕福な人に嫁入りさせようと考え、大事な宝だと日々大切に養ひ育て、この上なく愛でて守つた。草木の男が錦木を何束となく立てても立てても取り入れもしなかつた。親の許さぬ中垣②を踏み越えられずに、ついに男は狭布の渡し場に身を投げた。「けふのわたりのなみだ川」と詠んだのは、今では淵と瀬と流れの様子こそ変わつて、が、神田の川をいつているのだろう。政子もこの事を聞いて、細布に石を包み、市が立つ日を待つて、太田原に行くといつて朝早く起きて出て、同じ川の流れにどぼんと身を投げた。

親たちはこれを聞いて驚き、それほどひたすらに想い合う仲と少しでも知つていたなら、どうして錦木を取り入れずにしただらうかと、声を上げておいおいと泣いたけれども、どうにもならない事であつた。こうして千束の錦木と一緒に、この男女の亡骸を同じ塚に入れて埋葬し、それを錦木塚と呼ぶといふことである。

のちにこの男女のために大きな寺を建立し、観音を祀つた。この寺を錦木山観音寺という。その頃は三十七代孝徳天皇の御代で、大化のはじめ、恵海とかいふ僧の書いた漢文の縁起がある。なるほど、乱雑な書きぶりながら、古い時代を知るには十分である。その中に政子姫の父の大海という由緒ある家柄の人の子孫である事が書かれている。

錦木塚は南部の鹿角毛馬内にあるというのが真実と思われるが、古い時代、錦木を立てるこの風習はあちこちにあつて、みちのくでは一般に錦木を立てることが結婚の手順としてさだめられていたのだろうか。かの津軽の平内にある錦木の里も、その風習が近頃まで残ったものなのだろうか。いずれにせよ、月岡丹下が錦木を柴といっているのはあたつている。

私は毛馬内に着いて、このことを人に会うごとに尋ね、また今も受け継いで細布を織る、古川村「古い時代の川の跡である」にいる黒沢氏の家を訪れて色々尋ねると、主人の兵之丞という翁が次のように語った。

細布はその寸法幅七八寸（約21〜24cm）ほどの布に、昔は羽毛の白い鳥のやわらかな毛を織りまぜていた。そういうわけで毛布細布けぬのほそぬのといった。それを今は世間で「けふのほそのの」とだけもつぱらいつている。場合によっては我が家で織つて宮中に献上することもあるが、鳥の毛を交ぜることはない。

その細布を織り出すときは、家の中を清め、一間ひとまに注連縄を長く延ばし、家の主婦は身心を清らかに保つ。また親族や近所から五十を過ぎた女性たちがたくさん集まつて、績麻つみをへそに作つて糸車をかけ、糸を集めて織り、みな精進齋しやうさいして、一日のうちはその家の主婦が織り終えるのが習わしであるという。

これは宮中のお産のとき、産屋にかけて安産帯となさつたとも、また、岩田帯（四）に巻き添えられたとも言ひ伝えられ、田舎でも少しばかりの長さを請い求めて産婦のお守りとする。旅人がはるばる訪ねてきてこれを請い求め、家族へのみやげにするが、たまに織るものなので家にはわずかしかない。少しですがこれをおみやげにお持ちください、といつてくれたものを見ると、五六寸（約15〜18cm）の切れ端であるが、幅は七八寸ばかりの厚ぼつた織つた麻織物の布であつた。古い時代に貢ぎ物として献上したのもこういつたものだったのだろうか。

また、錦木のことを尋ねると、この黒沢の翁は次のようにいつた。

その錦木というものは、染木などともいうとか。古い時代は酢の木、苦木、おにしき木、めにしき木、樺椈、楓などのよく紅葉する木を、立てる人の身の丈にして上下を切つて束ね、一束として、秋の夜がふけゆく頃、想いをかける女の家の門に立てた。これをなかどう木という。仲人木ということをそのようにいうのだろう。

私が思うに、その仲人木は錦木とも染木ともいつたので、木を彩つて立てたとも解釈された。それらの木はみな露、霜、初時雨を待ち迎えて、自然に染まる木なので、染木ともいつ

たのだろう。また、深山にある楓に種類が多く、その中に染葉染木ともいうものがある。山賤(5)たちの山言葉ながら、そういった者に似つかわしくない雅な言葉である。鬼箭羽(きせんう)という漢名の木も錦木といい、また、とても紅葉に染まった様子を錦などともいって、錦木と名づけたさまざまな紅葉にまじってしまうので、仲人木、染木という錦木の別名の方が知られたのである。

苦木はその様子が槐(えんじゆ)の葉の形にやや似ていて、くちなし色(濃い黄色)に黄葉する。木の味がひじょうに苦いのでさうよぶ。酢の木はその実が酸っぱいという。漢名は塩敷樹(えんじゆ)で、野山にとても多い。世間ではふし木、あるいはかつの木ともいう。山漆の名があるのでぬるでもみじともいう。また護摩木と呼ぶ木などは樺桜、樺ではなく、山桜のことである。その皮を剥ぎ取って材料として使う。

また〈矢作の里のかばぎくら〉と詠まれたのは、皮(かば)を河(かは)の意味に通じさせている(16)。さらに《万葉集》に〈かかにばまきつくれる舟〉(17)と詠まれている。それは樺「アイヌはタツと呼ぶ」のことで、今もアイヌはこの樺の皮で舟を巧妙に巻き、溜留(あかどめ)として使う。木は違うがその皮を皮(かば)といい、かにばともいう。

もみじ(紅葉する樹木)は深山にある楓のことで、出羽陸

奥の山々にはいまだ京都や大江戸の植木屋には見られないものが多い。前にも書いた染木染葉は中国の楓の葉の形をしていて、葉が細く尖端が長い。時雨の盛りは紅の色が濃く染まって、他の木の中でもそれとはつきりとわかる。

めにしき木の漢名は桃葉衛矛といい、これをえりまきという。また稚児のおおまきと呼ぶ土地もある。これらの木を一束に結わえて立てるので千束と呼ぶ。それが言葉の由縁であることは明らかである。

《歌林良材集》(19)に次のようにある。

〈錦木は千束になった。今こそ余人の知らない婦人の部屋の中を見よう〉

〈恋しさをおさえられず今日立てはじめた錦木が、千束になるのを待たないで逢う方法があればなあ 匡房〉

〈ただひたすら千束が朽ちてしまった錦木をなお置いているうちに、あきらめるのだな 永実〉

〈錦木は立つたまま朽ちてしまった。狭布の細布は胸が重なり合わないというのだろうか 能因〉

昔から錦木は一説にこういわれている。みちのく蝦夷の男女は、求婚しようと手紙をやる事はなく、一尺(約30cm)ほどのさまざまに色を取り混ぜた木を、男がその女の家

の門に立てる。女が逢おうと思つた時は、千束になると家の中に取り入れる。逢うまいと思う人のものは取り入れないことから、千束になつて朽ちる次第を詠んでゐる。このほかに灰の木を錦木とする説がある。《袖中抄》しゆうちゆうしやう (20) に書かれている。

私が思うに、灰の木を錦木とする説は、紫根染の下染めに使う灰汁が、ニシゴリ（錦織）という木を焼いた灰からできていることに由来している。そのニシゴリの木を津軽の山賤はハチゴリという。二四八ゴリの意だろうか。錦織氏という人がいるので、その人の苗字などを避けて二四ゴリを八ゴリといったのだろうか。

同じ書（《歌林良材集》）に、次のように書いている。

狭布の細布の事。へきょうのほそ布の細布は幅が狭いので、胸が合いづらい恋もするのだなあ。このきょうのほそ布は奥州の特産の狭布である。きょうは狭の字の音読みである。「狭（せば）し」と読むので音読みと訓読みで「きょうのせば布」という。また細布ともいう。きょうは郡の名であるという説は誤りである。奥州にきょうという郡はない。「胸が合いづらい」とは幅が狭い布

のため、背中のあたりは着たが、胸の部分は足りないの
で、「胸が合いづらい」と詠むのである。

また《無名抄》(21) に、「ほそ布はみちのくにおいて鳥の
毛で織つた布である。多くないもので織つた布なので、
幅が狭いという」とある、云々。

いずれも古い説はその土地を見ていないので、あてにならない話などに惑わされていることが多い。今細布を織る家を下古河村の黒沢角平というのは兵之丞の子である。兵之丞の妻が老いて細布を織っているのである。

近頃だろう、錦木塚のあたりの、群がりはえている松の中に一軒の家があり、大湯の南部九兵衛領の家来、大森武八とかいう人がいた。ここを錦木村とよび、錦木の里といった。錦木山観音寺の縁起もここにのせたいと思つたが、別のところ
に記したので、ここでは省く。

【5】鈴と篠と

《絵本味比事》(22) は寛保二年京都の文花堂の著作である。その中に「鞍馬の鈴」という段がある。どんな鈴かとみてみると、「石泉法印法性は鞍馬寺の別当で、寺から多くもらつたものを、ある人のもとへくれてやる」といつて詠んだ歌。へこ

の鈴は鞍馬の福であるぞ。だからといって剥かないで食べるなよ（百足召すなよ）とあった。

この話は《宇治物語》²³に載っていて、すずとは篠竹のようなもので、すず吹く風、また山伏の篠懸衣^{すずかけころも}（²⁴）などと詠む篠竹というものである。その篠竹の筍が鞍馬に多く、それを贈ったのである。「福」は毘沙門天の授けた福になぞらえていつている。百足も毘沙門天の使いなので、皮を剥くことと百足をかけたのである。本当に秀句である。《絵本味比事》ではその文章の意味を取り違えただけでなく、硯の蓋の中に鈴を二つ三つ入れた絵を描いているのは、奇妙にも滑稽にも感じられる。

【6】ほそけやく

南部鹿角の毛馬内花輪のあたりで、野火が山林に入ること恐れて、いつも春の中頃、野火が発生する前に風をみて野を焼くといって、人が大勢入って火をかける。これを細毛という。どんな由来があるのだろうか。

【7】くさまきのまき

真木とは世間でいう檜である。木曾山のものがよいという。南部の檜は葉が大きく厚い。これを別の国で檜葉というところ

がある。また、くさまきというところもある。雑真木^{くさまき}とはいかにも古い言葉である。古い説でこの木を幸草^{さいくさ}としているのは正しくないが、火避^{ひのき}という言葉は縁起がいいのでそれに馴染んだのだろうか。

この木は宮木^{みやぎ}の中の良材で、我が国特産の宝のひとつである。中国にはないとのことである。《奥州征伐記》²⁵という軍記に、次のように書いている。

文治三年三月上旬、前の対馬守護で、実は頼朝卿の従弟である対馬守親光は、平氏が盛んだった昔にしたがわなかった。その後、源平の合戦の際に九州および吉岐・対馬がことごとく平家に属する状況になっても源氏に志を寄せていたので、尾形三郎のために追い出され、九州に安住することが難しく、中国へ渡って宋の国に至った。すると、宋の国王がこれを憐れんで一ヶ所の土地を与え、それだけでなく、親光が弓馬の達人だったので、これをこの上なく寵愛するあまり、その嫡子太郎親定を婿として迎え、親しくしていた。

そこに、頼朝がこの次第を伝え聞かれ、父子ともに早く帰国するよう、はるばる仰せつかわされたが、宋の国王は惜しまれて戻さなかった。ならば、太郎親定はその国

にお留めになり、親光一人は早く日本へお帰してください、との頼朝からの申し出のため、宋の国王も仕方がなく、虎の皮やその他珍しい物を与えて、親光を日本へお帰しになった。それで親光はすぐに鎌倉に帰参して、それらの品々を献上した。

その返礼として、宋の国で所望の品だったので、和紙と檜を日本から贈った。親光はもとのように対馬の守護とし、子がいないので宋の国で生まれた嫡孫「太郎という」を呼び迎えて跡取りとした。はじめは永井と名乗っていたが、このときから宋対馬守と改名した。だから頼朝卿の治世から数百年続いてその国の領主である、云々。

檜は中国にはないものだったのだろう。

【8】えみしのせつ

奈良の春日山などにある宝蔵は、その形が井楼せいろう（26）のようなので、井楼組などと世間でもつばらいつている。今南部では、粟稗米などをたくさん蓄える際、俵には入れず、この井楼につめこむ。作り方は板で作り、少し異なっているが、おおよそ同じである。

またアイヌは高倉や熊の子を養い育てる檻を作るために、

木を重ねて組む。一隅に柱二本を立ててこの柱を引き寄せ、柱の先端を蔓でくくる。これをセツツという。これは古い時代の校倉が残ったものだろうか。

《新猿楽記》（27）に、「八の御許の夫は飛驒国の人である。位は大夫、大工名は檜前ひるまへの杉光、八省豊楽院の図面を伝承し、造殿造宮などの儀式作法を研究した、云々。車宿、御殿みまや、校倉、甲蔵などを作る名人である」と書いている。校倉も甲蔵に並ぶものなのだろうか。

三河国の民家では夜がふけると、村々に「ごいぞう御用心」と高らかに呼び回る。また「こうぞう」と呼び回る村もある。これは「御意ぞう」であろう。また「郷蔵御用心しやうぞう」というが、これも「校倉こうぞう」または「甲蔵御用心」であろうか。

【6】せつじやう

世間では佐藤庄司（28）を湯の庄司という。どんないきさつでそのように伝わったのだろうかと考えてみた。

南部の毛馬内から東三里（小道六町一里（一里＝六五四尺）の八倍を一里とする一里四十八町（一里＝約五・二km）で換算した道のりである）、大湯の里からは二里ばかり行くと白沢という村がある。その野原の中に三宝荒神（29）の社がある。その社に摩滅しかかった棟札があり、「地頭佐藤庄司―

「願主」と書かれているという。とても古い社と思われる。この社に長い年月を経た大杉があつたが、寛政の中頃、枯れて倒れたという。これはその社を守る毛馬内砂埜町の修験者、修善院の話である。

この大湯のあたりはみな佐藤庄司が治めたところで、大湯温泉のあたりに館もあつたという。そういうわけで湯の庄司の名があるのだろう。

【10】こまからかな

《北条九代記》⁽³⁰⁾に、次のように書いている。

北条相模守基時が執権となつた時、北条修理大夫貞顕を連署とした。基時は相模守重時からみると曾孫になる。弾正小弼業時にとつては孫で、新別当時兼の嫡男である。貞顕については、北条義時の五男に実泰という人がいて、この人は後に亀が谷殿と称して温良仁慈の評判があつた。その子である越後守実時は金沢(横浜市)に居住した。後に称名寺と号した。その子である越後守顕時から金沢を家号とし、称名寺の中に文庫を作つて和漢の多くの書物を集められ、内外面典⁽³¹⁾ 諸子百家⁽³²⁾ 医陰⁽³³⁾ 神歌⁽³⁴⁾と、この世に存在する書物で収蔵していないものは

なかつた。金沢文庫という印をこしらえて儒書には黒印、仏書には朱印を巻ごとに押した。講堂では希望者が貴賤道俗を問わず室内に籠つて学問にはげんだ。金沢の学校として旧跡が今も残っている。越後守顕時は文武の学問をたしなんで読書を好む性癖になつた。その子、貞顕はもちろん学業のつとめを怠らなかつた。作文詩章では当时有名だつた人なので、のちに執権の職についても恥ずかしくないといわれていたという、云々。

ありとあらゆる書物を中国から日本に運んできた際、たくさん書物を鼠が嚙つて駄目にすることを恐れて、鼠をよく捕まえる猫もたくさん連れてきた。そうして連れてきた猫はみな尾が短く、体も小さめで、三毛斑のものでつた。

そのためか、猫を高麗と呼ぶところがある。また唐と呼ぶところもある。さらになかと呼ぶところもある。みな中国の猫だという意味である。かなとは、金沢猫の血統だとしてこの人もみな求めて家で養つたので呼ぶ名なのだろう。

この文庫があつたころは徳治のはじめか、または延慶と改元したころだろうか。

【11】やまたから

出羽秋田郡大阿仁風張郷（今でいう吉田村である）に近い三梨（一つのへたに三つの実がなる梨が昔あったことからついた名。今は水無とする）村に二戸ある。天正のはじめ、頼源五という人がいて、のちに高田源五郎といった。その子孫がなお続いている。もう一戸を梅村久左衛門といった。四五代を経て梅村市兵衛を名乗ったが、長寿の家である。十二代目の梅村市兵衛がいて、そのころもまたこの二戸だったという。

向銀山のおこりは明応文亀で、天正の頃までも盛りであった。明応、文亀の直り³⁵という頃は、一日に百八十貫の白銀を産出し、天正の頃には大いに減つて途絶えた。また慶長、元和の頃には一日に十四貫八百匁を堀り出し、これをこの山の直りと呼んだ。享保十九年に山が崩れて、坑道が潰れたという。向銀山が盛りの頃は家が千戸あまりあったという。誰が作ったか、山宝という唄がある。

やまたから。そもそもこの出羽の国というのは山高くして海近く、谷深くして浦々の名所が色々多い。そうはいつても、その中でもこの銀山やまというのは、左右に金銀の山、山崎の前では天下清水の流れを汲み、人の心も清らかにして繁栄の靈地である。人家千戸の軒を連ねて

万民の暮らしは豊かである。また千代を重ねた露の衣の佐保姫が嶽、花の面影心葉やきなす冠の（花から紅葉の季節まで美しい）こじか嶽、言葉通りの白銀の露熊（山）、月の光も墨（澄む）川が、流れ流れてゆきつく先がないままに、天に羽ばたく天狗ひら、春秋ながめのよい板木沢、たぐい荒瀬（類あらず）とも波しずか、松吹く風もとても涼しく、木々も森吉の山高く、花も紅葉もしら雪も絶えないのは不尽（富士）と同じである、云々。

【12】みちのくやま

天平二十一年の如月（陰曆二月）の頃、陸奥守百濟王敬福^{きょうふく}が、領する小田にある山から産出した黄金を朝廷に献上した。そのことを中納言大伴家持卿（『万葉集』十八卷）が詠んだ長歌がある。またへ天皇の御代が栄えるであろうと、東にあるみちのく山に黄金の花が咲く³⁶というのは、産出した山の黄金を褒め、尊んで詠んだ歌である。

陸奥で女郎花をこがね花と呼ぶところがある。また、鱈にこがね肌というものがあり、鮭にこがね文（模様）というのがある。鱈にこがね肌があり、鮎にもこがね肌がある。鱈、鮭、鱒、鮎などに夕顔肌、とふげ³⁶、クロメスといつて、さま

さまざまな模様があるけれども、その中でも黄金肌がよいとする。また、草に黄金萱といつて、(色が)荻に似た萱がある。これは出羽陸奥でだけという方言で、別の国ではいまだ聞いたことがない。

さらに、人がもつぱらいうには「みちのく山と詠んだのは沖にある金花山で、そこから百済王敬福という朝鮮の人が、たくさんの黄金を堀り出すことができて、献上したところ、銀青光祿大夫(三位にあたる)の位をいただいた。また、そこに式内社があつて、黄金山の御神がいらっしゃつた。この金花山という島山こそ、みちのく山と詠まれた山であろう」という。

しかし、私が陸奥にいたころ、年老いた坑夫などに尋ねたところ、答えていうには「今も昔もそのような山に黄金があつたことはない。昔、朝廷の命令で、人がたくさん渡つてその島を見て回つて帰つたが、光る砂などを見た素人が『金がある』といったので、いつのころからか金花山という名前になつたものだろうか」という。なるほど、小田にある山とは知られているが、小田にある島で黄金を掘つたとは聞かない。私はこの話を聞いてから、ならばみちのく山とはつきり指していったのはどこの山だろうと、陸奥の国中くまなくめぐつて考えたところ、みちのく山とは総じて金のある陸奥の山

をいつたのではないかと推測した。そして、同じ陸奥の津軽路にいたつて、なおみちのく山を捜し求めてめぐつたところ、耕田山こうだやまという岩木嶽にならぶ大嶽があつた。

その山には櫛形、こがねなど、あれこれと名だたる八つの峰があるので、八耕田山はつこうだやまなどとも呼んでいる山である。また、そこにとても近い乙部おつぶという鉾山があるので、漢詩が好きな人々は耕田を甲田と書いて、乙部に並べて甲乙の山になぞらえて呼んだ。これは漢心かんしん ⁽³⁷⁾から生まれた妄言である。耕田は山の中ほどまで登ると田地がある。昔そこに住むところがあつて耕したので、音読みにして「耕田(こうだ)」と呼びならわしてきたのだらう。

この耕田嶽は同じ陸奥の南部奥瀬山おくせ(奥入瀬)にも続いている、その麓は十和田湖である。その湖には色有山あか「朱いところ津野である」など、名所がとても多い。そのあたりで、願いのある人は銭や米などを紙に包んで投げ、あるいは、紙よりうちということをして占う。このことは《新著聞集》⁽³⁸⁾にも書いてある。湖の深さははかりしれず、とてつもなく長い大鰻が棲み、十尋を越えるイモリのようなものもいる。また、河熊といつて、子馬のような(大ききの)猛々しい獣が棲むという。

昔播磨国にある書写山の寺に南蔵という僧がいて、知識と徳行にすぐれた法華経の行者であったが、長生きして菩薩の世に巡り会いたいと熊野に祈ったところ、夢のお告げで「東国に赴いてこのわらじが破れたところに住むように」とあり、道にはたいそう厚く作つてあるわらじがあった。それを「ああ、畏れ多いことだ」と拾つて履き、法華経をひたすら読み続けて、この十和田山にたどりつくと、左右のわらじがたちまち破れた。「ああうれしい。ここが私の住む山なのであろう」と、ますます経を読み、そののちに湖に入つて姿を変えたという。

南蔵坊「難蔵ともいう」の石像を作つて湖の岸に据え、また熊野神社もあつて、願いがあるものはこの神、または南蔵にも申し上げて、鉄でささやかにわらじの形を作つて奉納する。話にあつた夢のしるしが由来だろうか。

《三國伝記》⁽³⁹⁾「十二条」『釈難蔵不生不滅を得る事』というくだりに、次のようにある。

和阿弥がいうことには、中世、播磨国書写山の辺りに、釈難蔵という法華経の持経者がいた。仏の道では經典を口ずさんで懈怠の心がなく、神への信仰では権現を信じ、て精進する徳があつた。読経の功徳が積み重なつて三千

部となり、参詣の日は三十回になつた。

難蔵は心中に思つた。自分は生まれ変わりを待つことなく弥勒の出現にめぐりあおうといつも誓つていたが、よく考えてみれば、天竺（インド）の地は大義に背いたといつても、日本全国の地は円機が自然に熟した。これはこの仏・菩薩が衆生を救うために本来の姿を隠し、神として姿をお現わしになつて、目に見えない神仏の加護を恵み与えて、庇護をなさつたためである。とりわけ晋の遠公は権宗を嗜んでも来迎を廬山の月に感じ、梁の珍師は密教を諳んじても遊放を浄界の風に任じた⁽⁴⁰⁾。これはみなその人の誓願によつたためである。

難蔵はまた熊野山に詣で、三年山ごもりして、これを祈願して千日になつた。その夜、白髪の老人が社殿から出てきて難蔵にいつたことには、「お前の願いは叶い難いが、私が方便を用いるので、すみやかに関東に下つて、常陸（思うに常陸は陸奥の間違いだろう）と出羽の境に言両^{ことば}という山があるので、その山に居住すれば、弥勒仏出現の暁に立ち会うことができるだろう」云々という。

難蔵は夢から覚めてすぐに関東に下り、その山に訪ね入ると、山中に咲く花が開いて錦のようで、谷の水は満ちあふれ、藍のようだった。山頂につくと大きな池が見え

た。池は円形で底が深く、年を経た松や檜の老木が空を隠し、(奇岩や石塊が)その岸にそびえ立っていた。池の端に大きな松の木があった。実に大きな岩屋があったのを利用して、そういう形の草庵を構えた。

林の木の実が庭に落ちて日々の食が秋風に満ち、野の実が畑に生えて日々の営みに春の色がこまやかであった。ここに住んで法華経を読経する様子はあたかも仙人のようであった。香をたく煙は微かで月を妨げることがなく、僧の歩みは穏やかで苔を踏みつぶすことはなかった。

ここに、年の頃十八九ばかりで、美しい流し目の、見目麗しいなやかな女がどこからともなくやってきて、毎日読経を聴聞するようになった。怪しいと思いつながら幾日か過ぎたところに、女がいうには「私は珍しく得難い法華経に接する機会を得て、五障の雲がたちまち晴れて智慧の光が南方で無垢の月に並び、三明の露はまさにあたたかで、覺慧は極樂浄土の宝池の蓮に添っています(4)。どうか私の住んでいるところにお越しになって、法華経を読み、多くの生類を教化し、導いてください」という。難蔵がこたえて「私は神のお告げでこの山に入りました。よそに移ることはできないでしょう。弥勒菩薩の出現を待ちます」というと、女がいうには「私の住

みかはこの池です。私は池の主の竜女です。竜の子は寿命が長く、一生のうちに千仏の出世に出会えるのです。ですから、私と夫婦の契りを交わし、弥勒菩薩の出現をお待ちください」という。難蔵は「あの妙莊嚴王は昔、真実の菩提を求めたが、王位を貪り、光栄を愛して、菩提心を失い、生死の間に行き来した。鬱頭藍子はその当時、煩惱を断ち切らないままの禪定を得たが、女色に耽り、染欲を起して、非想定(5)を退け、空しく悪趣の底に沈んだ。どうすべきか」と考えたが、「これも権現の方便だろうか。生まれ変わらずに弥勒菩薩の出現に立ち会うことこそ大切なことだ」と思った。しかし「松柏の質は厳しい霜を帯びていよいよ固く節を曲げない。蒲柳の姿は秋風に相対して落ちやすい」といつて進まなかった。」「これも仏道によつて衆生をこの世の苦海から救い、悟りの境地である彼岸へと導くためです」と、女が強引に誘うので、その言葉に従って、この池に入つて住むようになった。

そんなあるとき、女が難蔵にいった。「この山の西、奴可の嶽というところに池があります。この言両の嶽から三里離れたところですよ。その池に八つの頭の大蛇が棲んでいて、私を妻として、一ヶ月の間、前半の十五日は奴

可「思うに、奴可は糠のことをいうのだろうか。今は糠部郡としてゐる。みな糟部と間違つて書いている」の池に住み、後半の十五日はこの池に住むので、今も来てもおかしくない時分です。気をつけてください」。この時に、難蔵はまったく怖れる様子がなく、すぐに法華経八巻を頭の上に載せると、九つの頭の竜になった。

とうとうその八頭の竜が来ると、風がひゅうひゅうと吹き、雨がざあざあ降つた。すぐに九頭竜が出て立ち向かい、互いに噛み合うこと七日七夜となつた。乱れ騒ぐ様子は雷が轟くようで、力の輝きは電光に似ていた。

ついに八頭の竜は喰い負けて、大海に入ろうとした。しかし、道に松の木が生えていて通ることができなかった。力、力が尽き果てて小さな体になり、元の奴可の獄の池に入った。

難蔵は勝利を得て、その女とともに言両の獄に居るといふことである。今も山で働く者がその池の辺りに行くとき、法華経を唱える声が漲る波の下に幽かに聞こえるという、云々。

出羽の八竜湖（一般に八郎湖という）もこうしたいわれからきているのだろうか。この言両は今、十曲の湖という。耕

田の獄に登ろうとする場合、この十曲の麓からはとても登りやすそうに見える。また、津軽の方角からは山が険しくそびえ立っていて、麓は木々が深く、中腹まで登ればなよ竹が茂っているが、分け入るのが容易でない山である。

私はこの山の中腹過ぎまで登つたことがある。溪水を渡ると氷のようで、水面に映る月影も寒々としていた。山沢の水の中に、大小の石で作つた金研臼かねすりうすというものが数え切れないほど転がって、埋もれていた。これを見ても、その昔ここが黄金を掘つた山であつたことは疑いようがない。耕田は小田こうだの訛りで、《万葉集》にある「小田なる山」なのだろう。また、「みちのく山」とも呼んだ山なのであろう。

それから、東の麓にゅうふに入内という村がある。青森の湊に近い。この入内（元々入内はアイヌ語である。それを文字で書いたのである）の村に古い観音堂がある。たいそうな秘仏で、昔から拜み申し上げたという人はいない。ある人が秘かに暗がりでお堂を探してみたところ、この観音はまったく仏の形ではなかった。金を取り出すときのからみ(43)などのようなものだろうか、その重さは見当もつかないという。堂は辻堂のようなささやかな堂ながら、それほど古くない昔までは小金山華福寺といつて、大きな寺であつた。寺の名は今もそう呼ぶ。

また、金浜かねはま（はまとは方言でもつばら川原などをいう）、あるいは小金沢などという山沢の名がある。さらに、近いあたりに吾妻が嶽という山がある。これは《万葉集》にある「吾妻（東）なるみちのく山」の由来であろうか。これを考えれば、小金山こがね花福寺は百済の敬福が建てた寺で、黄金山こがね敬福寺を訛つて呼び伝えて、今そのように文字を換えて書くのであるうか。

それに、観音がとても重く、仏の形でないというのは、自然にできた金欄の糸金などといって、自然に産出する金があると、その黄金などを神とも仏ともみなして祀ることがあるので、ここにも古い時代の人が祀り申し上げたものだろうか。それを考えれば、この観音堂というのは黄金山神社であろう。「小田なる島」ともいうなら、沖にある金花山こがねを黄金山とも推定することができるだろうが、「小田なる山」は古い時代の言ことば、今でいう耕田の嶽であることは明白である。

【13】青麻の神仙（あおそのかみ）

今でいう仙北郡は、昔の山本郡である。仙北は元々の郡名ではない。雄勝、平鹿、山本を山北やまきた三郡といった。昔は山北やまきた、河北かきたと呼んだ地である。河北は今の山本郡能代（古名は淳代、または野代である）のあたりを指していった。仙北

を山乏と書いたことがあった。縁起の悪い字だとして、千福と書いたという。山乏と書いたのはいつの頃だろう。千福と書いたことは無住国師の《沙石集》⁴⁴にも書いてあって、とても古くからいつていたことと思われる。

ある書に、山に仙人がいるので山北を仙北と書き、音読みをした次第を書いている。さらに、その仙人というのは常陸坊海存あまである、云々とある。海存の父は尾張国の故須知こすぢの五郎景吉といった人である。海存も尾張国に生まれて、幼名を小次郎丸といった。この小次郎丸のちに出家して、法名を心了坊とつけた。その頃源九郎判官義経公は七八歳ほどで、まだ牛若丸といって、山科の権守兼房とんのかみの家にいらつしやつたが、心了坊は二条あたりにいたので、折々訪ね申し上げて、牛若丸に平家退治のことをすすめ申し上げ、この君が大人になられるのを指折り数えて待ちに待ち、みずからも常陸坊と名を改めた。

この常陸坊は仙術を習得してこの仙北郡の奥山、駒ヶ嶽に今も住んでいて、きこりなどは時折見たことがあるという。あやしい話で本当かどうかかわからないが、仙台の青麻あおそ権現としてお祀りしているのは常陸坊海存であると世間でもつぱらいつている。しかしその宮司は「けつしてそのような神ではいらつしやらない。祀っているのは三光⁴⁵である」とい

っている。それは隠しているからで、実は仙人権現といって、海存の生霊を祀っているのだという人がいる。

陸奥に《清悦物語》⁽⁴⁶⁾という一卷の本がある。その書に、衣川の戦いの頃、小四郎清悦^{きよえみ}という人が、高館の城に籠って、義経の影のごとく常にその身にしがたい、働いて、敵を大勢討ち取ったという、云々とある。そのはじめに、清悦、海存ほかに近習が二人、この四人の人々は肉生^{にくだん}とかいうものを食べて、長生きした人だとある。清悦は寛永七年の夏の頃まで生きていて、平泉に住んでいたという。

また、源家嫡流の子息、右衛門大夫^{うゑもんのだいふ}という人のお供の小野多左衛門という人は、近い時代の元和二〔丙辰〕年から同七〔辛酉〕年まで、清悦を兵術の師とたのんで、六年ほど毎日付き添っていた。そこで高館が滅びた物語をはじめ、色々書き残したものをもととして、その里の古老の耳に残っているものまで伝え聞いて、交ぜて書いたという。さらに、異本も多いという。

国守中納言政宗公が、あるとき清悦坊〔小四郎、または喜四郎ともある。出家して清悦坊という〕をお召しになって「お前は本当に長生きでめでたい人だ。言い伝えに聞く源義経の御書面を持っているとのこと、拝見したいものだ。もしできるなら」といわれた。清悦は頭を下げて「畏れ多いお言葉で

す」といって、朱塗りの箱を一つ携えて出て、その中から義経公の手紙を取り出して捧げた。すると中納言政宗公は席から少し退いて、額ずいて読み終えられた。清悦坊は手紙を受け取って巻きおさめ、元の箱に入れた。政宗公は清悦坊に所領をお与えになろうとした。清悦坊は「ああ、もったいない。しかし多くの年月命を永らえて、何事もせずこの御国で長生きし、居続けることこそ所領にもいちだんと勝つてありがたい、恐縮すべきことでしょう。我が身はこのような歳で、いまさら所領をいただいても、なににお任せ申し上げましょう」といって、お断り申し上げたので、こうして、政宗公はたびたびのお召しにも所領のことは仰せにならなかったという、云々。

こういう物語もあるので、海存が神仙になったということも、そのいわれがないわけでもなく、さらにその物語にくわしく書いてある。

【14】やまごのもつかた

出羽陸奥できこりを山子^{やまこ}という。河辺郡岩見の山に杣小屋を作つて、そのあたりの麓にもたくさん住んでいる。そのきこりたちの宿では、きこりという飯碗のようなものに七八寸(約21~24 cm) または一尺(約30 cm)ほどの柄があるものを折杓

子とともに杉の皮をはった戸に挿している。何かと尋ねると「もつかた」だという。これには大小あつて、飯を炊くときに米を量る基準としてゐる。

これを考えてみると、《延喜式》に椀形卍口もむかたみやくちとあるのも「もつかた」であつて、この椀形は、諸国から献上したものが今の世にいたるまでこうした辺鄙な山里にも残つてゐるものだらう。

また、きこりたちがいつも使う折杓子、手木日記しるし、また雪車の四乳よつち、はやぶさなどは、他の国では見たことがない人が多いだらう。私はこの事を《凡国風土器》(47) という本にも書いてゐる。

【15】 さくらあき、はなぞ

私がとても若かつた頃、更級の月見の帰り、本洗馬といふところに三四日ほど滞在した。翌年三月酉の日の諏訪祭りを見に行くと、花が真つ盛りで、諏訪湖には富士山の影が映つてゐた。雪が白々と水底まで霞んでゐる上に小舟を巡らせて人を渡してゐた。

桜が多く咲いてゐるところがあつた。その名前を地元の人に尋ねると「花岡」といふ答えがあり、一緒に行つた人が「何も歌を作らないのはどうかと思う」といふので、〈名前を

尋ねると花と答える岡のあたりで、語るのも花の話題。そんな花かげの道である」と詠つて通り過ぎた。こうした事などは《諏訪の海》という一巻に記した。

再び本洗馬の里に着き、医者の子見氏のもとに滞在して、花の風情あるところがあればどこであれ、ひとり分け入つて歩いた。犀川「さい川」といふ名はとても多い」とかいう二瀬の荒川に、竹を編んだ橋がかかつてゐるのを渡ると、山桜がとても風流に咲いてゐて、村の家々もあちらこちらに見え、水が流れてゐる様子などが右に見えたり左に見えたりして趣があつた。

そこを分け行くうちに、大きな木に淡い色の桜が咲いてゐた。その下は畑で、作物の種を蒔いてゐる男がいた。「今の種を蒔いてゐるのですか」と尋ねると、男は「これは麻芋あさおの種です」と答えた。「変ですね。麻の種は冬に蒔くものでしょう。どうして今蒔いてゐるのですか」と尋ねると、麻芋の種を蒔いてゐた男はにつこりして「今蒔いてゐるのを桜麻あさおとも花芋ともいつて、いつも春の花が咲く頃を待つてこの辺りでは種を蒔くのです。また、この筑摩郡にかぎらず、桜麻の種は蒔きます。それはとても多く、早生桜が咲いた頃種を蒔いた畑では早くも萌え出たところも見えます」といふてゐた。

これは珍しい話を聞いたものである。《万葉集》〔十二卷〕に「桜麻の⁽⁴⁸⁾ 芋原の下草が早く生えるように、あなたが早く成長していたならば、その下紐を解く（あなたと共寝をする）こともできなかつただろう」という歌がある。それならば「桜麻」を「さくらあき」とも「さくらさ」とも「花^(麻)そ」とも「さくらそ」とも読んで間違ではないということではないか。今世間でよく読まれている《万葉集略解》⁽⁴⁹⁾でも色々説明しており、桜麻とは本当にそうであるが、信濃の麻苧を蒔いていた男がいった桜麻、花麻こそもつともらしく、歌の意味も昔の様子をいったものだろう。また、蒔いた種が萌え出たなどといっていることから、この歌の意味は自然とわかった。

【16】 鰐田浦神（あいたのうらのかみ）

《日本書紀》には次のようにある。

天豊財重日足姫天皇（斉明天皇の事をいう）四年の春正月の甲申の朔^{つひ}丙申（十三日）に、左大臣巨勢徳大臣が亡くなった。夏四月、阿部臣（名を欠く）が船軍百八十艘を率いて蝦夷を討った。鰐田と淳代の二郡の蝦夷は、遠くから見て怖れをなし、降伏を乞うた。そこで軍を整

え、船を鰐田浦に連ねた。鰐田の蝦夷、恩荷^{おんが}は進み出て誓っていった。「官軍と戦うために弓矢を持つているのではありません。ただ私どもは肉食の習慣があるために弓矢を持つているのです。もし官軍に刃向かうために弓矢を準備していたなら、鰐田浦の神がご存知だったのでしよう。清く、やましいところのない心を持つて、帝にお仕えしましょう」。よつて、恩荷に小乙上の位を授け、淳代・津軽二郡の郡領を定めた。最後に有間浜に渡島の蝦夷を召し集めて、大いに饗応して帰した、云々。

淳代は今でいう能代であり、鰐田は今でいう秋田である。津軽は陸奥では津刈とも書いた。積^{つひ}猫^{みけ}が縮まったものだという。恩荷は今では男鹿、小鹿、雄鹿、牡鹿などのように書くが、昔そこに住んでいた蝦夷の長の名であった。恩荷が誓約したその神を鰐田浦の神と申し上げている。

今の山本郡、米代川の湊である向能代の浦、落合というところに、昔、とても古い社地があつた。その後、田村將軍が鉦と旗を秘め納めて、それを新たに祀り奉り、近い時代から蝦夷^{えぞむけ}平八幡（蝦夷平定の八幡）とお呼びしていたが、荒波で壊れて、社地はその痕跡すらなくなった。今は荒波の打ち寄せる湊となつたので、神殿を能代の湊に遷した。年月が経つ

て古びるままとなつていゝうち、新たに住吉神社を建て、蝦夷平神社と軒を並べてお祀り申し上げたので、この浦に入港する船人たちは、船の安全を祈るために住吉の御神のみを尊み、寄附を差し上げた。そのため住吉神社はその土地の神のように鎮座され、古い蝦夷平神社は神がおわす様子もななく、人も知らずにいるのが残念でもあり、もつたない事でもある。

さらに、そこには大きな仁王門があり、これは蝦夷平八幡と申し上げるので、昔はこの神社のために建てたものだが、それさえ住吉神社に付属しているのだといわれ、今は能代の住吉といえは知らない人はいない。神の御心は神鏡のようにくもりのないものであるが、見る人の心は雲霧に覆われて分別がつかず、浅はかなものである。

渡嶋というのは、今福山浦がある松前島のことであろう。有間浜は津軽の深浦にある。今は訛つて吾妻浜、東の浜などともいつて、とても美しい砂浜である。

また「柵養の蝦夷二人に位一階を授け、淳代郡の大領沙尼具那には小乙下「あるところでは位を二階授けて（小乙下とし）人口を調査させた」、少領宇婆左^{すのりみやま}」などとある。沙尼具那については、仁鮎「古名荷鮎」という地名がある。沙尼具那を訛つて早口でいったようである。柵養は松前の東

にあり、それを「きこない」（木古内）といい、また「ちこない」ともいふ。

それから、秋田郡綴子^{つづねこ}「古名肉入籠^{しりこ}である」の近くの畑にも「ちこない」という地名があつて、昔、アイヌの村がここにあつたとのことである。あちこちでアイヌ語と同一の地名を聞く。

また、少領宇婆左は津軽に住んでいたのだから。津軽の早瀬野村の近くに宇婆左頭^{うばさづかみ}という高い山がある。宇婆左の頭髪が長く連なつていゝような山の様子なので、そう呼び伝えられたのだろうか。麓にアイヌが住んでいたところがある。

さらに「津軽の大領馬武^{まむ}に大乙上を、少領青森^{あおひる}に小乙上を授ける」といふ記述がある。馬武が津軽に住んでいたので、弘前から青森に通じる道ばたに豆が坂、またまみが坂などという地名があるのは、馬武の名が訛つて残つたものだろう。青森については今、南部（かつての）糠部郡の田名部の里近くの目名というところに青平村がある。これは青森を訛つて伝えたものだろうか。そのほかにも考察できる土地は多いが、ここには載せない。

【17】七倉の宮ごころ

出羽国には七倉というところが多い。三つの七倉のほかにも山本郡太良山の矢櫃というあたりに七倉山がある。そのほかにもあちこちで聞く山の名である。

秋田郡北比内の荘、小繋村に七倉山がある。三つの七倉の内の一つである。菅原道真公をお祀りして、南岳悦山による天神宮の三字がしるされた、金泥のとても古い額がある。ここには神代七代の御神をお祀りしており、それを天神とお呼びしているのであつて、菅神の事をお祀りしているのではないとも、また、神代七代の御神と菅神の神像を合わせた八柱の神を同じ神社にお祀り申し上げているのだともいう。

また、小阿仁の七倉山は小沢田村にある。麓に寺があり、これを七倉山泉涌寺といい、また山を七宝峰ななたからみねともよぶという。三つの七倉のいわれがあり、神成三七という古城の主が住んだ跡がある。

さらに、五城目〔五十目というのが古名である〕の七倉山は、現在畑になつている。岡本城落城の時、野山までみな焼かれて神殿も灰になつた。人々はそれを見て「ああひどい。畏れ多い御神の神社さえこうして消えておしまひになつた」と、灰を掘り起こしたけれどもかきもなく、涙ながらに帰つた。後で見ると、その菅神の神像はある森の高い木の叉にいられつやつた。人々は不思議に思い、木に登つて容れ物にお

入れし、綱を用意して、かろうじてその神像を降ろし申し上げる事が出来た。それで、この森に神社を建ててお祀り申し上げている。今大河の駅の天神と申し上げているのがこれである。

この三つ七倉の菅原道真公の神像は、応永二年に阿部氏が山城国北野天満宮の御神をこの国に遷してお祀り申し上げた。また筑紫国の飛梅の枯れ枝を少しばかり神像の内側におさめて、天神の神像三柱を京都の止利仏師に作らせた。この菅神の神像は大阿仁荘麻生〔小繋の森の川向かいに七倉山がある〕の七倉山に神域を定めてお祀り申し上げたが、ふたたび小繋の森に遷してお祀りしているという。

もう一柱の神像をお祀りしているのは、五城目の七倉山の神社である。岡本城は七倉山の麓にあつたという。

さらにもう一柱の神像は、小阿仁荘の七宝峰〔七倉山をいう〕の神社にお祀り申し上げていたが、ここは年月が経つて古び、荒れ果てていたのを、小沢田村七倉の城主、神成三七某が再興した。七宝峰から泉が湧いて流れたので、麓の寺を泉涌寺という。妻帯のうばそく⁶⁰が住持である。

昔の城主神成三七の子孫がおり、わけあつて今は加藤氏である。この主は壞れておられた神像を正保元年にあらたにお作り申し上げ、毎年三月二十五日にお祭りをして、この里の

鎮守の御神として尊み奉っているという。このことのあらましは、享保二十年八月に書かれた加藤政貞の家の記録などにも載っている。

また、小綱木「小繫のことである」の神社の菅神は神代七代の御神である、と申し上げているのは、ごく近い時代に生まれた俗説であろう。能代の住吉神社の別当、里鶯(5)「桂葉の子で、どちらも向南亭季吟の弟子。元禄の人である」が比内の大館に行き、冬になって能代に帰るという内容の《山懐》という日記がある。これは「懐橘遺親(橘を懐に入れ親に贈る)」の故事にならって、父桂葉のために懐に入れるみやげとして書いた。この書の中にも「冬枯れの木々の中から菅神社がこうこうと見えるのを、舟の中で額ずいて拝礼し」などと書かれている。だとすれば、元禄の頃まではもっぱら七倉天神というのは菅神の事を申し上げていたのだろう。

【18】七倉のせき

昔七倉天神宮の森のあたりに関所が設置されていたのだろうか。天文十九年庚戌の正月の記録で、浅利家の分限帳(52)がある。その中の「鹿角両比内(南北の比内のことである)小繫村に至る」というくだりに、「七倉川関役高七十刈小繫三助」という記述がある。

【19】やたての齋杉(すぎ)

今、陸奥と出羽の国境、折箸山(または折橋山ともいう。同じ名が南比内十二所にある)に、古い時代とても大きな杉の木があった。この杉はいわれのある木である。ある古い記録に、次のようにある。

五十七代陽成天皇の御代、元慶二(戊戌)年、大館城主は公家きみいえという者だった。同四年、碓が関近辺に橘吉明よしからという者が城を築き、居住した。同年五月十四日、大館城主公家は津軽へ軍を出して戦をし、帰陣の際、橘吉明の居城を攻め、城主吉明を討ち取った。大館の兵卒を引き揚げる際、公家は大杉のもとに弓一張と征矢そやとの一組を立てて納め置いた。その頃から矢立杉という。

この書はいかなるものであったのか、はじめと終りが虫に食われたような大館の郷の古記録の端に、交ぜて書いてあったというのを見せられたので、それをここに記す。

【20】長走りのせきや

清少納言が「関は横走りがよい」と褒めたのは、駿河国足

柄山の辺りにあつた関である。また、この出羽の長走も田舎風の名前ではないので、世に知られていたならば、かの《枕草子》にも記されたであらう。

〔21〕つづくの滝〔はしわのわか葉〕にある〕

私が陸奥にいた頃、四月九日に「今日初午の日の祭を見よう」と人々に誘われて出かけた。漆寺の前に朽ちた桜のひこばえ⁽⁵³⁾が今を盛りと咲いているので、へ枯れた枝も花の恵みを得る、うるし寺である。唱える尊い経文のご利益であらう」という歌を詠んだ。

この寺の上人などを誘い、前沢の大桜を見ようと、尋ねて分け入った。ここを大桜村という。大きな不動明王の堂が一つあり、この桜は一本の花で寺全体を覆う山桜である。木の太さは、手を繋いで周囲を取り囲むのに七人いるほどである。これは秀衡の時代からある桜だと言ひ伝えられている。

へ雪を積み、雲を集めたかのように、一本の木で寺を覆うような桜の花を見ているのだ。

衣川の検断桜「秀衡の時代にあつた検断の門の外の桜だという」を見ようといつて急ぐ。ようやくそこに着くと、その木だけでなく桜が色々入り交じつて咲き、水の色までも格別でとても風情があるところである。

へ衣川の水際の桜を見に来たら、たもとにかかる花の白波が趣深い。

こうして中尊寺に入ると、たくさんの人々でいっぱいだった。御堂はみな押し開かれていて、白山神の御前にある拝殿に白い帳を垂れて、おひとつ馬というのが渡つてのち、この拝殿に衆徒が登った。田楽、開口、祝詞、若女の舞、老女の舞などが終ると、猿楽を舞った。衆徒はみな頭に髪をまとめた男の格好をして、鼓を打つ法師は墨染の袖を肩脱ぎして囃した。この猿楽の装束は国守が寄進されたものだということ、たいそう華麗を極めていた。

今朝から風が吹き出したが、いよいよ風の勢いが強まり、盛りの花はきれいさっぱり散り失せてしまふだろうと思ひながら、猿楽を見終わり留まっていると、さらに荒々しく風が吹いて、一面に生い茂つた杉の葉や枝が落ちてきた。空ばかり見て用心していると、風が吹いて大きな枝が折れ落ちて、大勢の人が頭に怪我をしたといつてひどく大騒ぎをした。法師の付髪も横向きになり、舞を舞う扇も風に吹きやられて思うようにならない。また、老杉「この木は国守が「みちのく」と名づけられた杉であるとして、人々が愛でて取るようになった」の空木があつたが、風に吹かれて倒れそうなほどギイギイと鳴るので、猿楽を見る気も起こらないといつて帰る人

が多かった。

ここに弁慶桜といって、武蔵坊弁慶が植えた薄墨桜というのがあつたと聞いて、人に尋ねると、その桜は近頃枯れたとのことで、仕方なくここを出て高館の旧跡に登り、義経堂に額ずいた。

秀衡は臨終の枕元に義経公をお招き申し上げ、「ああ、わが君よ、本当に進退窮まつた時は、これを開いて見て、とにかく無事生き延び、次の好機をおつかみください」といつて、錦の袋を義経公に渡した。義経公はそれをうやうやしく顔の前にささげられ、のちにお開きになった。御仏に灯明を照らして、妻も子も古年刀（こんねんとう）（先祖代々の刀）で刺し殺し、御身の身代わりとして似た者を斬り、その首を鎌倉に送つて、自らは蝦夷が島にお渡りになった。伊達治郎泰衡も主君の跡を慕つたのだらう。出羽に至つて河田の手にかかったことなど、この君の霊像を見ながら昔の話をして涙を流した。この夜は平泉に泊まった。

十日、今日も猿樂があるという話だったが、散らないで残つた近所の花も見ようといつて、早朝、平泉を発つた。まず達谷の窟に入つて、かの百八体の多聞天を見ようとすると、みな壊れてなくなり、わずかばかりが残つていた。春見たところであるが、雪が消えたので見所が多かつた。有名な桜原

の花もきつと咲いているだらう。

昔、葉室中納言某卿の娘を悪路王（あろ）が盗み取つて、この姫とともにこの窟に籠つて住んでいたが、都から人が訪ねて来ると、悪路王は意地悪くののしつて、姫を小脇に抱え込み、大太刀を抜いて向かつたので、訪ねて来た都人はもてあまして逃げていつた。ある年の春、悪路王は桜原の花の風情にほだされて、姫を誘つて窟を出て、この花のもとで酒をひどく飲んだ。そして、悪路王が酔いに酔つて倒れ伏した時、かの姫君がただおひとりお逃げになつたことなど、昔物語をしつ、五串村に來た。

厳美神社の旧跡は瑞玉山に残っている。今はそこを水山村の山王箇窟という。七十四代鳥羽院の元永保安の頃であるうか、この御世に開山した中尊寺を、今でいう平泉に遷された。ここに平泉野というところがあるが、大日山中尊寺の跡、また高森山法福寺の跡、栗駒山法範寺の跡、尼寺（この尼寺のことは西行法師の《選集抄》⁵⁵に詳しく書いてある）の跡、骨寺（今の本寺村がそれである）の跡、円位法師の庵の跡、逆柴山などというところがある。今の関山の中尊寺の近隣にさかしぼ山というのがある。それはここからうつした名である。

美麗（いづしのたま）滝というのは、その名が高く、人々の評判となつてい

る。岩盤の露出した溪谷を流れる川に臨む、本当に珍しい滝だとはいうが、ごつごつと険しい岩の中を、岩に当たり、妨げられながら流れる様子は、白地の綾織物などを引き延べたようで、まったく水の様子とは思えない。玉の滝というのがあって、またの名を小松が滝ともいつている。京田の滝、あたらし滝、大滝、童子が滝、はなれ滝、魚谷滝、麻がせの滝など、みな総じていつくしの滝という。あちこちの岸には桃、山吹、柳枝を交えて、本当に他にたとえようもないほど趣深い。へ落ちる滝の波は美しく打ち寄せてはかえる。その美しさは筆による彩色でも及ばない。

残らず見ようとすると際限がないので、また今度と、田の中の道を行き、山ノ目に出ると、注連縄を長くのばしたところに御幣(56)などを挿し束ねてあった。水口祭(57)をしていたのだろうか。へ水口に立つて(みな少しも言葉に出さないで)祈る今まさに、いつくしの小田に萌える苗代である。

人々と別れて山ノ目に来た。磐井郡の保長(58)大槻(千左エ門という)清雄のもとを訪ね、「ああ、久しぶりです」などと語り合ううちに、主人の長男である清古が筆をとって、へ久しぶりだなあ。今日を待って時鳥の声を聞いたが、初音のように初めて聞く話題で語りあっている」と詠んだ短冊を見せてくれた。そのお返しとしてへ久しぶりだなあと飽きず

に語り合ったので、今日はすっかり終ってしまった。そんな時鳥の初音のように久しぶりの人の言葉である」と詠んだ。

【22】はしわのわか葉〔夏の紀行の名前である〕

同じ月の十一日早朝、大槻清古に誘われて、この宿からはひじょうに近い配志和神社に参拝した。

この神社の中央に皇孫二ニギノミコト、左にコノハナノサクヤビメ、右にタカミムスビノカミをお祀りしている。神明社があり、八幡、安日、鎌足、神皇、土守などの神社がある。その中に安日とあるのは安倍家の始祖だろうか。神武天皇が治められた頃、安日は陸奥に流され、津軽郡戸左の浦(今は十三とかいて、じゅうさんという)に住み着いて、その子孫が安倍頼時である。また鎌足の神社もいわれがあるのだろうか。とても古い神社なので伝承が多い。

さらにこの山に古い時代、菅原道真公の御子がおひとり、配流されていらつしゃったという物語がある。そのためか、菅香梅といって、年を経た梅に若葉が萌え出していた。この木の枝の中ほどに山桜の宿木があつて、梅の青葉がまじり、花より不思議で趣があつた。古い時代は梅が多かつたところなので、乱梅山または蘭梅山などと呼ばれ、また、梅が嶺、梅が森、梅杜山ともいった。

鳥居の額は土御門泰邦卿⁵⁹の筆跡である。この卿の御歌というのがこの神社に残っている。へみちのくの梅杜山に吹く神風も、私の心に吹きつたえてきた（風儀を伝承してきた）。

遠方の眺めがとてもよいといって、乾飯の飯びつを開き、芝を座る場所にして「ああ楽しい、ああ面白い。へ多くの人が磐井の里に団居をして、ともに長い年月を過ごそう」（『夫木集』⁶⁰に載っている）」と口ずさみ返した。

日暮れ近く、大槻家に帰るといってへ梅森の山は色も香も夏の生い茂った木立である。そこに吹く神風は永久に続く」と詠んだ。

【23】セツぐい

前に七倉の事を書いたが、不十分だったので、ふたたびここに記す。

七倉の前の流れをかねくら川という。崖に七倉山がある。七倉というのは、松倉、大倉、三本杉倉、柴倉、箕倉、烏帽子倉、獅子倉（岩面に獅子頭を彫っている。このあたりでは獅子頭を権現と名づけて呼んでいるので、権現倉とも正面倉ともいう）で七つの倉である。

そして、前回は里鶯翁の日記について、記憶だけを頼りに

雑に書いたので、もう一度本を見て修正し、根拠とする。

《山ふところ》には、次のように書いている。

寛永元年九月末頃のことである。羽陽秋田の北に大館というところがあり、この大館に藩の支城がある。この支城の城主を義方公といった。この義方公は、私（里鶯）に和歌を学びたい、近いうちに来なさいと、一度ならず二度までも飯村林翠のところへいつて来た。それで林翠が私のところにその旨伝えて来たので、捨てておくこともできず、十月十一日、その大館の支城に向かうことにした。父の桂葉が馬のはなむけ⁶¹をしようと酒宴を開いてくださった。流れゆく私は一首一詠をつづつて父に捧げた、云々。

十一月十日、大館の城を出発して扇田に移動して、云々。十二日、朝早く舟を出していると丸雪（あられ）がしきりに降ったので、へ旅衣を着る私に旅のつらさを体験せよとばかりに、やまずに袖にあられがふる」と詠んだ。七倉山の麓を過ぎると、東の岸の杉林に菅神社が一字、神々しい様子で立っていた。舟を近づけ、まず一首つづつて幣に代えて捧げた。へ神社には曇天に降る雪のように白い幣がそよぐ。冷え冷えとする風のままに。すぐ

さま舟を降りて、我が家に着くと日が暮れた。

その最後に「少蝶庵里鶯がこれを書いた」とある。里鶯は当時の学才豊かな人で、大館、綴子、扇田などあちこちに弟子が多く、江戸の雉子橋にある向南亭に行き、師の季吟と大峰に行った帰り、一日色々語り合つて《一日清話集》を編んだ。また男鹿にいた頃、《日陰草》と《埋れ水》の両巻を書いた。書を書きぶりは拙い様子で、当時はまだ未熟であった。道の芝草におく露が消える、そんなわずかの間に過ぎてしまった昔をしのぶ文章は、とても感慨深い。

そういうわけで、(里鶯が生きた)宝永の頃まで、世間では七倉の天神宮を、神代七代の御神を祀つた神社だとはいっていかなかっただろう。里鶯の書に「菅神社一字」と書いてあるのを見て「神代七代の御神を祀っている」という説は畏れ多くも最近言い出した事だと理解して、迷いを解くべきである。

【24】 つゆくまやま

同じ秋田郡阿仁荘につゆくま山という岩山がある。春秋はとりわけ風情のある山であるが、さらに滝が落ち、川の流れもあれば、なお目をみはるにちがいないところである。わず

かに細い谷水が草の中で音さえ立てないのが残念である。

マタギ岩、狗岩というものがある。昔マタギが犬を引き連れて白熊を追つて来たが、熊は神などであったのだろうか、空を飛んで行方がわからなくなり、マタギも犬も息が絶え、死んだ。それが立つたまま岩と化したものだという。美濃国大井山で、根津神平⁽⁶²⁾が鷹狩りの鷹を追つて来て、犬とともに立つたまま死んだ話に似ている。

マタギというのは元々科剥^{またぎ}で、マタはシナノキの皮をいう。そのマタを剥ぎ、糸に繰つて布を織り、また縄になつて用いる。その仕事をする山賤たちはいつも矛たつぎ(刃の広い斧)を持つて山に入り、何であれ獣を見ればまずそれを獲つた。狩りを禁じられたことがあったので、狩を生業とするものが鉾の柄を抜き取り、山たつぎを隠してマタ剥ぎだと偽つて山に入ったのがはじまりで、今は出羽陸奥の狛師の名となつて、又鬼などと書く。

それらの山言葉というのがとても多い。笠を雨蓋^{あまがた}、米を草の実、獲物の肉を幸肉^{さちのこ}、犬をセタ、山羊^{かもし}(カモシカ)をケラ(元は虫の名で、その姿に似た蓑をいう)、また熊もケラという。さらに白熊を露ケラというのは風流な言葉である。そして犬をセタというのはアイヌ語である。肉を幸の肉というのは山幸から生まれた言葉で、とても古い言葉である。

この山の岩に、笠あまふたを着けたマタギの姿をした岩がある。矛さや犬の岩もあつたが、今はくだけたという。白熊を露熊つゆくまというので、ここがつゆくま山の名前を持っているのだろう。山羊あおし「かもしし、かもしか、にくししなどの名がある。「かをもをもをしと思ふなりけり」⁽⁶³⁾と詠んだのもこの皮である」を指すケラというのは肩蓑のことである。蝮うづまとて虫の羽が肩幅ぐらゐの短さで、その形をした雨着なので、ケラ蓑を略してケラといい、ケラコなどもつばらいつている。

また白熊は神ともいえるだろう。命が長いものである。《江源武鑑》⁽⁶⁴⁾という書の四巻下の部、天文十八年九月十九日のくだりに「美濃国立正寺から白熊を將軍家に献上する。大きさは小馬ぐらゐで、その首に金札があり、『承久元年正月十日、土岐太郎光方がこれを捕獲し、同月二十九日に山に放つた』と書いてあつた、云々」とある。承久元年の正月から天文十八年秋までは三百二十一年あまりもあり、長寿である。また、岩倉山へお放しになつたという。このつゆくま山にいた白熊つゆくまもまた生きながらえているのだろうか。

さらに、今熊、猪熊、だれ熊、それ熊と、熊という名称がとても多い。それはみな隈くまや前まへについていつている。三河国額田郡にある式内社を稲前神社いなまへという。そこは俣木村で、とても年を経て茂つた森の宮地で、〈歌い奏でる稲前の宮〉と

詠まれているという。また岡崎の駅から一里あまり北に稲熊村がある。とても古い神明社がある。この宮地こそ稲前神社であろうと拝察する。私がとても若かつたとき、遠江の内山真龍うちやまたつ⁽⁶⁵⁾や駿河の栗田土満くりたひじまら⁽⁶⁶⁾などに判断を求めたところ、いい考察であると同意してくれた。

【25】ふしかげやま

露熊山の紅葉を見た折、さらに深く分け入って巡ると、同じ山の横の嶺に仏形岩などが二柱、三柱ならび、奥に伏陰ふしかげという村もあつた。ふしかげはいわれのありそうな名前である。伏陰、節掛なども書いている。節懸とは矢の矢柄やへという長ふしかげ、小ふしかげ、くだふしかげなどの類であろう。そのことは《四季草》⁽⁶⁷⁾の春草の巻に詳しく書いてある。

【26】みやまの夜鶏（よとり）

深山の奥で夜が更けてから鶏が鳴くことがある。私が聞いたことを《駒形日記》にも載せた。三回声を聞いたが、とても小さい声だつた。出羽雄勝郡の七葉樹温泉とちで聞いた人がいる。秋田郡森吉の嶽でも聞いた人がいる。また同郡太平洋山の女人堂で聞いた人がいる。いずれもチャボが鳴くかのようで、ほぼ一声ずつであるという。

《武家俗説弁》⁽⁶⁸⁾「古戦場に必ず幽霊が出て不思議な現象を起こす」というくだりに、「性理大全」⁽⁶⁹⁾南軒張氏がいうには、淮河^{わい、が}の上流にいたとき小さな寺に泊まった。夜、小さな鶏の声を聞き、その声は数万にもなった。起きると灯明はますます地に満ちて見えた。これについて尋ねると、寺の僧がいうには、ここは古戦場だった。空が暗いとこの現象が起きる、云々」とある。私はこれを不思議に思いながら聞いたときに考えた。山には竹鶏^{てつけい}、松鶏^{しょうけい}などがある。その声だろうかと思われる。

〔27〕石神山

陸奥との国境近くに虎毛山、牛尾山、大高森、白山、杵山、黄金原、駒形山、馬草ヶ嶽などという嶺々が並んでいる。駒形山の頂上は陸奥側にある。また石神山はとても高く秀麗である。その山には石像があるという。この石神山の麓には出羽国雄勝郡椽温泉がある。

石神山は古い名所である。《統紀》^(四十七)三十卷(七)に「延暦八年云々。丁亥陸奥国黒川郡石神山^{いわかみ}の社を官社につらねる、云々」とある。そのころは官軍が頻繁に参拝したところで、満願のお礼参りなどのために、その社を官社となさったのだらう。このことは《駒形日記》の秋山鳥にも記した。

また、私の《はしわの若葉》にはこう書いた。

六月も今日で終る。つづき石の神といって大原に鎮座する神に参拝した。古い時代、阿倍比羅夫や虫麿などがここにいらつしやつたという。また黒麻呂朝臣の詠まれた和歌だといってへよいことを末永く続け、つづき石の神の恵みは大原の里である」とみなうたっていた。本当であらうか、どうだらう。

この神社は貞観のころ、山城国大原野の神をお遷しして、続名山大原寺を円珍禅師がお開きになった。本地は薬師仏である。清衡が豊田館から平泉に移り住み、鬼門にあたり祈祷したところに、円仁作の仏像がいらつしやる。文徳天皇仁寿二年辛未七月、陸奥国にある石神に従五位下を授けられたという。この神の御事であると大原寺の縁起にある。私も幼稚な歌の手向けをした。へ太平の御代は途絶えることなく続け。石のように揺るぎない将来の様子も目に見えるようである。」

〔28〕鷺座山(わしぐらやま)⁽⁹⁾

雄勝郡根杉山の尾根を足倉山といつて、爪の白い鷺がいつ

も棲んでいるという。脚座（足倉）とは「わしくら」を訛っていったのだろう。

《続紀》三十六巻に「天宗高紹天皇（四十九代光仁天皇の御事を申し上げる）宝龜十一年正月、云々。庚子（十二月十日）征東使が申し上げたことには、云々。二千の兵を遣わして、鶯座、楯座、楯石沢、大菅屋、柳沢など五道を攻めつた、云々」とある。また、足倉は手倉山にこじつけていった名だろうと思うのは未熟な考えである。

さらに雄勝郡の山々のことを詳しく書いて集めた《椎の葉日記》がある。

【29】平戈山

陸奥国胆沢郡の駒形の神山（同国栗原郡には駒形根神がいらつしやる）は石の鯨尾矛（つ）のようなものを納めているので平戈山というのだ、と唱える人がいる。私が八口内（ヤクナイは元々アイヌ語にあつたシャクナイである。シャクは夏ナイは沢である）のことを記した中に、神室が岳の麓に戈立石、石兜（いわたもと）などという場所がある、と書いた。この神室が岳は、出羽と陸奥に跨る大きな山である。

《続紀》十二巻、天平七年（725）のくだりに（四月十四日）玉野から賊地ひらほこ山に至る八十里に渡り、地勢が平坦で、険

阻ではない。蝦夷の捕虜たちがいうには、ひらほこ山から雄勝村に至る五十余里の間、平坦である。ただ二つの川があり、増水のたびに、みな舟を使って渡るといふ、云々」とある。また「天平宝字三年正月云々。（九月二十六日）陸奥国桃生城、出羽国雄勝城を造る、云々。はじめ出羽国雄勝、平鹿の二郡、玉野、避翼、平戈、横河、雄勝、助河、並びに陸奥国嶺基等の駅家を置く、云々」とある。

この山を越えて分け入り、たずねてみたならば古道にもたどりつき、また平戈山もそれであると確かにいえるだろう。しかし分け入ってみようにも、木々が深く塞いで峰が崩れ、谷も迫っていて、杣山賤も進むのに苦労し、（木を伐るための）斧も振ることができないという。

【30】ヒギガエ

阿仁荘森吉岳は、ヒギガエルに似た名のひきが嶽といって、蛙を神の御使いとしており、麓の人はヒギガエルが通りすぎるのを見ても畏れ多く思うという。また、同じ秋田郡大江平山（おほえだいらま）、今でいう太平山（たいへいざん）は、地元では太平山ともつばらいつている。これは蛇野庄にある大きな山である。麓の大野に蛇がとも多かつたが、今は田となって開けた。この山の峰は蛇の頭に似ていて、尾は劔峰（つるぎのね）にあるという。神も蛇を使い

となさるとのこと、蛇野村がある。森吉の神と太平山の神が口争いをなさるとの根拠のない話は、蛇とヒキガエルとのいわれがあるからにちがいない。

この二つの高い山はいずれも少彦名命すくなひこなのみことをお祀りし、本地には薬師仏をお祀りしている。ある年の秋、太平山に登ったとき、小雨がそぼふり、雲や霧が深く、峰がはつきり見えなかつた。どこであるとも区別がつかず、矢櫃山、劔峰など山の高い三つの頂だけが見えたので、へおろち山、それを三つに斬つたので、霧の中、尾から現れ出た劔の峰である」と詠んだことがある。

また、陸奥国の恐山に秋に登り、(再び登つたところ)雪が降つて、温泉に入ったその帰り、劔山の麓を分け入つて道をたどると、とても寒かつたので、(その秋の霜は物の数ではない。切れそうなほど冴える(冷え冷えとする)劔の冬の山かげである)と詠んだことがある。

劔の山、劔の峰というのは、いたるところで多い名前である。これを考えるに、《姓氏録》(73)に「葛木忌寸、タカミムスビノカミの五世孫である劔根命の後胤である」とある。劔根は劔の峰である。不尽根ふしのねは富士の峰である。屋根やは家の峰、屋の棟むね(屋根のもつとも高いところ)である。「これは黄泉の国に行かなくてもこの世に劔山はとても多い。まずこれに

登つてあの世に行く練習をしよう」というと、聞いていた人は「あはは」と大いに笑つた。

【31】あおたまかけご

現在世に知られたカラフト玉(74)「唐太ともいう渡来玉である」は、樺太に遠方の島から渡来し、色々な物と交換になつて松前に渡来している。これはさまざまな鑄物の玉である。その中で、色の青いものが美しく優美で素晴しいので、どの人もみなこれを佩玉はいぎょく(75)としていた。古い時代もこの玉を大切にしたのである。

孝元天皇の御巻には、河内国に青玉繫女かけこという娘がいたことが書かれている。今もアイヌの妻女はシトギという若干の玉を買いたものを首にかけており、本当に五百箇御統いおつみすまる(76)の玉をまとい、首にかけていらつしやる様子もこのようなものと、古い時代がしのばれる。古代に外国から渡来した樺太の玉は、色がとても青くつややかで美麗に見える。今はまれに物の飾りに残つている。

【32】みさきがらす、たがらす

出羽国雄勝郡若畑村の奥山郷にある兜野新田「兜倉という山の麓である」という山奥の家に泊まつたとき、夜が白々と

明けていくと、家の老婦人の声がして「みさき鳥、田鳥も鳴いている。起きなさい、起きなさい」と、いつまでも寝ている家族を起こしていた。田鳥は田畑などに群れて餌をあさっている、世にいうハシブトガラスで、生き物の肉などを群れて食べる鳥をいうのであろうか。

また、みさき鳥は山がらすで、木の実草の実だけをあさる畑鳥などを指して御幸鴉と呼ぶのだろうか。《姓氏録》に、カミムスビノミコトの孫、カモタケツノミノミコトが八咫鳥やたとなつて神武天皇を導き申し上げたことが書かれている。御幸鴉は御前鳥で、その八咫鳥のことをいっているのだろう。また、八咫鳥を御幸鴉ということも間違いではないだろう。遠い山里などに古い雅な言葉が残つたものだろうか。

〔33〕霞が岳（かすみがおか）

《三代実録》(7) 三十五巻に、次のようにある。

元慶三年正月云々。(十三日)出羽国に勅符があつた〔記述を欠く〕。出羽国の俘囚である外正六位下深江〔考えるに雄勝郡に深江村がある〕三門に外従五位下、外正八位下大辟おほひら法天と玉作正月丸ともに外従五位下を授け、軍功を賞した云々。(三月二日)春泉はるみずが鎮守府に到着しな

い間、去年九月十五日、好蔭かすみながれのみちが流霞路〔考えるに、田舎の人は某長峰某長根ということをもつば何ながれ、くれながれなどと今もいつている。都人はそういう発音を聞いて、霞長根を霞ながれと書き残したのでらう〕から来た。二十五日、春風が上津野〔考えるに、今という鹿角のことで、南部の毛布の里である〕から来た。この時、道路は泥が深く、風の寒さが厳しく、険しい場所を通つて兵士たちは疲労困憊した、云々。

流霞路(8)はかすみながれと読んで、霞長根のことである。霞長根は霞長峰である。現在、北比内の山奥に霞の橋というところがあり、そこを霞ながれと呼ぶともいう。また、霞が岳という山が陸奥にある。とても古い地名である。とても古い時代、出羽と行き来した古道があるので、霞長峰も霞が岳もその道筋であろうか。

ある縁起に「古い社がある。小宮はその村の名をいう。本宮として奥州栗原郡二迫にのはさま莊文字村〔古くは吾勝郡である〕霞が岳に保呂羽権現があり、そのお宮の中に若児大明神というのがある〔出羽国由利郡保呂波山天国寺に藤原吉親が遊行し、この麓で獵師遠藤太郎に会つた。大同年中に建立された。嶺(保呂羽山)は由利平鹿両郡にまたがる。また金峰(神社)

は天平宝字年中に吉野山で安閑天皇を祀ったことから、蔵王権現と名付けられた云々」とある。

また、保呂羽山は同じ陸奥東山のあたりにもあると記憶している。霞ながね、霞が岡、かすみが岳、みな同じところならば、その吾勝郡文字村の山をいつているのだろう。

【34】くひのみや

《陸奥国駒形山古縁起》に「神室山の嶺宮は駒形荘松岡村〔古くは齧村である〕瑞崎、あるいは松岡山という場所にある。祭神が一座あり、スサノオノミコトである。また、アマテラスオオミカミを合祀しており、これを嶺大明神という。小宮がなおある。祭日、別当…」とある。とても古い、由緒のある地である。

正月七日までこの村には物忌みがある。縁のある人であっても、この七日の物忌みの内に新年の挨拶にくると、村の外れでこれを捕まえ、濁り酒を際限なく飲ませ、また唐辛子の粉末と清水をひどく飲ませる。このようなことも嶺宮を祀るなごりであろうか。

五月四日は夜宮で、人は夜籠りをする。毎年狐火がたくさん現れる。これは狐炬火たきまろといって、狐火が多い年は稲の実りがよい、というのは王子の除夜の狐火と同じ習俗である。

また、この山にとっても大きなトチノキがあつて、実を多くつけるが、一つとして落ちることがない。これを礫たけぞの椽とちといつて、毎年この山の神が疫病神に礫を投げて追い払われるので、このトチの実は一つとして落ちることがないのである。これらをそこでは松岡山の不思議と呼んでいる。

【35】をうち田（大蛇田）

おほやまをうち田（仁徳天皇の御事を申し上げる）の御代五十五年、蝦夷が反乱を起こし、田道を遣わして討伐をお命じになつたが、田道は蝦夷に敗れ、伊寺水門いしのみとで死んだ。従者たちは田道の手纏たまきを取つてその妻に与えた。妻は手纏を取つて抱き、首を吊つて死んだ。当時の人々はこれを聞いて悲しんだ。そののち、また蝦夷が襲つてきて、農民たちを襲つた。蝦夷人が田道の墓を掘つて暴くと、大蛇が出てきてにらみつけ、蝦夷を咬んだという。

これを考えるに、陸奥には現在、石巻の湊に蛇田という里がある。昔はそこをおうち田といつていたのではないか。また、伊寺水門いしのみとは「石のみと」であつて、今でいう石巻の湊であろう。みな同じところにある地名である。

【36】めやきやまむ

天明三、四年は卯辰の飢渴けかつといつて、稲が実らず、飢饉の年となり、津軽路などは金持ちも町人も道に倒れ伏し、死ぬ者も非常に多かつた。どうしようもなく、木の実、草の根を食べ、それさえ尽きて、筵むしろやこもなどを搗こいて、餅もちにして食べ、馬や牛を殺してこの肉を食くべて命をつないだ。のちのちは馬の肉を煮て市で販売し、陸魚おたかなと名づけて「一椀五錢だよ」といつて呼びかけた。また他人の馬を盗んで山に隠し、口を縄で縛くわつたり、耳から煮え湯を注こぎ入れたりして殺した。

ある人が語るには、卯の年の冬、死馬を雪の上に捨てたところ、この馬の肉を取ろうと男女が手に鉋かまや菜刀を持ってやってきた。桶を抱かえて吠かというものに取かつて入いれるといつて切きつてバラバラにし、手も足も血にまみれているさまなどを見て「ああ、あさましい世の中だ。いつまで生きながらえてこんなつらい目にあうのだろう」と涙しながら暮くらしていたという。

また、松前島の浦々はアイヌに助けられた人がとても多かつた。さらにアイヌの妻となつて身みごもる女性も多くいて、その子どもも多い。男性は髪を切り、アイヌに混まじつて住んでいるが、彼らはヒゲがとても短く、目が鋭とくなく、アイヌのようにも見えない。

それから、その中に額かぶに一文字入れ墨をし、十字を入れ墨

にしたアイヌがいた。これは元々アイヌではないが、島の法を犯した罪人を牢屋の中から引き出して、その罪の分しだけ答こたへ打うつて、これを解とき放はなつときにする入れ墨であるという。これを越山おつさんといつて、西であれ東であれ山越こえさせる習なわしである。

これを考えるに、履中天皇の御代に、死罪にあたるものをお許ゆるしになつて、額かぶに入れ墨をする罪があつた。これを黥めさきさむむという。昔は淡路野嶋の海人の罪であり、これもこの島人の罪であるから、島の作法であらうか。古風が残つているのも興味深い。

【37】 ゆかはあみ

出羽陸奥の山奥の里人で、多くは女性の言葉に、温泉に行いくことを「湯川ゆがわに行く」という。この言葉は《日本書記》に「ゆかはあみ（沐浴）し、きよらかにして、盟神みかみ探湯（80）せよ」とある。とても古い言葉である。

【38】 たか

《倭訓栞わくのしお》⁽⁸¹⁾では「たか」について「鷹たかをいう。たけし（猛々しい）」という意味である。猛禽を称す。あるいは、高く飛ぶものなので名なづけられた。西方の国の鷹揚たかの意味であるとも

いう。アイヌではトコボチカブという」とある。

私を考えるに、鷹は手養たがいの省略した言葉であろう。手に据えて養う鳥であるからそういうのだろうか。

【39】ほぶりのいみや

出羽国南比内荘の山里で、人を火葬した跡に、三喬さんきょうといって、三本の木を三脚にして結び、それに自在鉤ざいぜんこうというものを吊つて、その三脚の又またに古い鎌を掛けている。あるいは、二尺二尺(約60cm)あまりの細い木を弓とし、シナノキの弦を張り、篠の矢やにそぎ板の羽をつけて引きしほり、これを北に向けて放つような形にして掛けている。

また、アイヌを土葬した塚にも鎌をさしている。さらに、アイヌの妻女が亡くなると、その家を切り倒し、火を放つて焼き払うと、妻女を埋めた塚の上に三脚を作つて、自在鉤を吊り、小鍋をかけていた。比内の山里の風習に少し似ているが、比内では鉤だけを吊つて鍋がないのは、昔は鍋をかけていたのを省略した形だからである。

考えるに、《古事記》〔神代四巻〕に、次のようにある。

さて、(イザナギノミコトは)その妻、イザナミノミコトに
トに
対面しようと思ひ、(中略)「私があなたと作つた国

は、いまだ作り終えていないので、帰つてきてください」とおっしゃつた。それに対してイザナミノミコトは「悔しいです。早くいらつしやらないので」とくきまさずて、私は死者の世界の食事(よもつへぐい)をしてしまひました」とおっしゃつた、云々。

《古事記伝》⁽²⁾には、次のようにある。

○不速来(とくきまさずて)、この「ずて」は悔やむ意味のある言葉である。《万葉集三》(二十丁)に「早く来てでも見てしまえばよかつたのに(とく来てても見てまじものを)。山城の多賀郷の槻の木は黄葉が散つてしまつたなあ」とある。

○黄泉戸喫よもつへぐい、《日本書紀》に「黄泉の国のかまどで煮炊きしたものを食べること、これをよもつへぐいという」とある。「閉へ」とはつまりかまどのことである。戸への字を書くのは、竈へを元として民家のことをも戸へという言葉である。さて、黄泉戸喫とは、黄泉の国のかまどで煮炊きしたものを食べることという。これは火を忌み清めることの元となつている、云々。

この、鍋を吊り、鉤を作るのは、黄泉戸喫になぞらえたものであり、黄泉の国のかまどで煮炊きすることを由来とするのであろう。みな古い時代の形である。

また、この掛けた弓も桃の木であるが、近頃は何の木でも押し曲げて作るという。それは「その黄泉つ平坂の坂の下にある桃の実を三つ取ってお投げになると、追っ手がみな逃げ去った」とあるいわれもあり、桃の弓に葦の矢をつがえて黄泉醜女を追い払う趣旨であらう。

《倭訓栞》のいみやのくだりに「《古事記》に忌矢とある、云々。上総の風習で、人が死ぬと竹で弓矢を作り、門に掛けて忌中を知らせる。これを忌屋講という」とある。秋田比内の山里の風習も同様のものであらう。

【40】阿波岐原

《古事記伝》六卷（三十七丁）には、次のようにある。

竺紫の日向の橘の小門の阿波岐〔この三字は音読み〕原にお出かけになって、穢れを祓い清められた、云々。《古事記伝》五卷（十三葉）に引用したとおり、云々。この考えに基づくと、竺紫は九州の総称である。右の二つの考え（日向の読み方をめぐる二通りの説）のどちらがよ

いだろう。決めかねるが、《日本書紀》神功の巻に、これを日向国橘小門としていることをたよりに、とりあえず国名の方について「ひむか」と読んだ（この神功の巻にあるのも「ひむかいの国」と読むべきだが、これはやはり国名に聞こえるからである）。

橘小門は、《日本書紀》火折尊の段にもこの地名がある。同じところであらう。さて、日向国にこの地名は見られず、古い時代は大隅薩摩の地まで含めて日向といっていたが、その国々にもまったく見られない、云々。

阿波岐原（岐は濁音で読む。清音で読むのはよくない。また之と添えて読むのもよくない）は、《日本書紀》に憶原と書いて「憶はこれを阿波岐という」とある。《和名抄》（83）には次のように書いている。「説文解字」（84）によると、憶は梓の属である。《日本紀私記》（85）によると、阿波木は今思うに榎の木の異名である。《爾雅》（86）の注にある。だから、この木は今の世に阿乎木と呼んでいるものではない。ひきつづきよく探究すべきである。

私が考えるに、橘憶原のこの橘というのも、「たちばな」という音に近いので文字を当てていつている。橘は同書《古

事記伝》六卷)の分注に次のように書いている。

貝原氏の説に「筑前国糟屋郡に立花といふところがある。また席田郡、早良郡にも青木村といふのがあつて、海辺である」といふ。本當にこの御祓でお生まれになつた墨江大神、また志賀の海神(6)の鎮座もみなその国なので、何か由来があるように思われる。

その立花といふ地は、立岬たちばなであろう。今も立岬、横岬などがとても多い。青木といふ名も多い地名である。青木は櫛櫃あおわきがばらなどという類ではない。蒼沖であろうか。立岬、青澳原だとすれば、海辺は理屈に合つてゐる。しばしば耳にするが、その意味はだいたい古い意義に近いであろう。どうであろうか。文政六年癸未の夏、水無月の二十五日、秋田の笹ノ屋で書き終えた。

註

- (1) 強飯 米を甑こしぎに入れて蒸し炊いた飯。
- (2) 延喜式 養老律令の施行細則を集大成した法典。
- (3) 麴(かんだち) こうじの古い呼称。
- (4) 御炊 貴人の食事を調える場所。
- (5) 谷川士清 江戸後期の国語辞書《倭訓栞わくのしおひ》の編者。
- (6) 神山の柏のくぼて 平安後期の女流歌人、相模が詠んだ歌。「神山のかしはのくぼてさしながらおひなをるみなさかへともがな」へ伊豆山の柏の窪手を捧げ持ちながら、お祈りして気持を改めたら、皆が栄え幸せになるようにしてほしいものです。
- (7) 文苑玉露 蓮阿編。文化十一年刊。本居宣長・賀茂真淵等の雅文の撰集。
- (8) 柳行李 コリヤナギの若枝の皮をはぎ、乾燥させ、麻糸で編んで作った行李。
- (9) 賦役令 律令国家の基本法である令のうち、調・庸・歳役などの基本税目についての規定を扱うもの。
- (10) 絵本太閤記 寛政九く享和二年刊の読本。武内確斎著とされる豊臣秀吉の一代記。
- (11) 東国名勝志 地誌。鳥飼醉雅著・月岡丹下画。宝暦

十二年刊。北海道、東北を含めた東国の名所旧跡と、その歌枕にまつわる名歌を紹介している。

- (12) 親の許さぬ中垣 親の許さない仲で、中に設けられた垣。義太夫節の語りなどにみられる表現。

- (13) 績麻・綜麻 績麻は細く裂いて長くよりあわせた麻糸。綜麻はつむいだ麻糸を巻きつけた糸巻。

- (14) 岩田帯 妊娠した女性が胎児の保護のために腹に巻く白布。安産を祈って妊娠五ヶ月目の戌の日につける風習がある。

- (15) 山賤 猟師やきこりなど、山中に生活する人。

- (16) 矢作の里のかばざくら… 《新撰和歌六帖》藤原為家「あづさ弓やはぎのさとのかばざくらはなにのみ入るわがころかな」へ矢作の里の榊桜がまことに美しく、花から目をそらせない私の心です。矢作川は現在の愛知県岡崎市を流れる川。真澄が追善行事に関わった浄瑠璃姫の物語の舞台の一つでもある。

- (17) かにはまきつくれる舟 桜皮を巻いて作った船。《万葉集》九四二番、山部赤人の歌の一節。

- (18) 滄留 船中に水が入るのを防ぐため、楨肌まきはだなどを船板の合わせ目に詰める作業。

- (19) 歌林良材集 室町時代の歌学書。一条兼良著。

- (20) 袖中抄 平安末・鎌倉初期の歌人、顕照著の歌学書。

- (21) 無名抄 鎌倉初期の歌学書。鴨長明著。

- (22) 絵本咏比事 江戸中期の絵本。西川祐信画。

- (23) 宇治物語 鎌倉初期の説話集《宇治拾遺物語》を指すか。ただし、現在「鞍馬の鈴」の説話が確認できるのは、鎌倉中期の説話集《古今著聞集》である。

- (24) 篠懸衣 修験者が衣服の上に着ける麻製の法衣。

- (25) 奥州征伐記 通俗軍記。源平合戦から平泉征伐までを描いた《東実記》の中から、平泉征伐の譚が独立したもの。

- (26) 井楼 戦場で敵陣偵察のために材木を組んでつくるやぐら。

- (27) 新猿染記 平安後期の漢文で書かれた随筆。藤原明衡著。

- (28) 佐藤庄司 佐藤基治（元治）。信夫庄司と呼ばれていたが、飯坂温泉の湧く地であるため湯の庄司とも呼ばれた。源義経に従軍して戦死した佐藤継信・忠信兄弟の父。

- (29) 三宝荒神 屋内の囲炉裏や竈など火を使う場所に祀られる神。

- (30) 北条九代記 江戸前期の雑史。伝浅井了意著。北条執

権九代の事跡を記し、論評を加えたもの。

- (31) 内外両典 内典は仏教の經典。外典は仏教の經典以外の書籍を意味するが、日本では主として儒学の典籍を指す。

- (32) 諸子百家 中国の春秋戦国時代に輩出した多くの思想家やその学派。また、その著書。

- (33) 医陰 医道と陰陽道。

- (34) 神歌 神道と歌道。

- (35) 直り 生産量が衰退した鉱山において新たに富鉱脈が発見され、再び生産量が増すこと。

- (36) とふげ 《雪の出羽路平鹿郡二》沼館の文章中に「鈍色」という表現がある。また「どぶねずみ」という語に黒ずんだねずみ色の意味があることから、とふげはどぶ毛であり、ねずみ色を指すと考えられる。

- (37) 漢心 漢籍などに学んで感化され、中国の国風や文化に心酔する心。

- (38) 新著聞集 寛延二年刊。珍談・奇談を集めた説話集。神谷養勇軒編。

- (39) 三国伝記 室町時代の仏教説話集。玄棟著。

- (40) 晋の遠公は… 東晋の遠公は念仏を行としながら往生し、梁の道珍は阿弥陀経を唱えて往生したことを表現

している。

- (41) 五障の雲が… 女人がもっている五種の障害が消え、仏の教えにふれ、悟りが花開く様子を表現している。

- (42) 非想定 仏道修行における最高の瞑想の境地。

- (43) からみ 鉱石を溶かして精錬するとき生ずるかす。

- (44) 沙石集 鎌倉時代の仏教説話集。無住著。

- (45) 三光 三光天。日・月・星の三つの尊称。天照大御神、天之御中主神、月読神のこと。

- (46) 清悦物語 源義経の従者、清悦が「にんかん」という物を食べて不死となり、東北各地を放浪したという伝説がもととなった本。近世、東北地方に流布していた。

- (47) 凡国風土器 真澄の著作であるが、未発見本。凶絵集。

- (48) 桜麻の「をふ」「かりふ」にかかる歌語。「さくらあさの」のほか「さくらおの」とも読む。語義は諸説あるが、実体不明のまま、歌語として受け継がれた。

- (49) 万葉集略解 江戸後期の《万葉集》の注釈書。橘千蔭著。師賀茂真淵、本居宣長などの先人の説を集成し、入門書として流布した。

- (50) うばそく 仏教用語で在俗の男性信者。

- (51) 里鶯 能代の八幡・山王両社の別当職をつとめるかたわら、北村季吟の門に入り、歌学を学んだ。父桂葉と

里鶯を中心とした資料は「桂葉・里鶯淳城家文芸資料」として秋田県指定文化財となっている。

- (52) 分限帳 大名が領国内の家臣団成員をその身分、家格別に列挙した名簿。

- (53) ひこばえ 伐った草木の根株から出た芽。

- (54) 悪路王 平安時代、坂上田村麻呂や藤原利仁に滅ぼされたと伝えられる人物。蝦夷の族長アテルイの訛ったものとの見方もある。

- (55) 選集抄 鎌倉後期の仏教説話集。編者未詳。西行に仮託した書。

- (56) 御幣 幣束の敬称。白色や金・銀色の紙などを細長く切り、幣串にはさんだもの。お祓いするときなどに用いる。

- (57) 水口祭 農事を始めるとき、苗代田の水口に幣を立て神酒を供えて田の神をまつる行事。

- (58) 保長 ここでは肝煎の意味で使われている。

- (59) 土御門泰邦卿 江戸中期の公卿。陰陽頭、天文博士。

- (60) 夫木集 《夫木和歌抄》。鎌倉後期の私撰和歌集。

- (61) 馬のはなむけ 旅立つ人のために酒食を出したり、物を贈ったりすること。

- (62) 根津神平 祢津流鷹術の鷹匠として諸説が伝わる人物。

- (63) かもをもをしと：「かをさしてむまといふ人ありければかもをもをしとおもふなるべし」へ鹿をさして馬

という人がいたから、鴨をも篤と思う（鹿毛をも惜しい）人もいるようだ《拾遺和歌集》藤原仲文の歌。

- (64) 江源武鑑 佐々木氏郷著とされる。近江守護六角氏の末期四代の雑史。現在では偽文書と評価されている。

- (65) 内山真龍 江戸時代中期・後期の国学者。遠江の人。賀茂真淵に国学をまなぶ。

- (66) 栗田土満 江戸中期の歌人、国学者。遠江の人。賀茂真淵、のち本居宣長に師事。

- (67) 四季草 伊勢貞丈著。江戸後期の有職故実書。真澄による《四季草》の書写本である《斯伎具佐波夫伎夫美》の中に、本項で言及された部分が写されている。

- (68) 武家俗説弁 享保二年刊。神田白龍子編。武家の間に伝わるさまざま俗説について述べたもの。

- (69) 性理大全 中国の儒家書。明の永楽帝の勅により、胡

広らが撰。宋・元の性理学者百二十余人の説を集録。

- (70) 竹鶏・松鶏 竹鶏はキジ科の鳥。コジュケイの台湾産品種。松鶏はキジ科のライチョウ。

- (71) 続紀 《続日本紀》。《日本書紀》につぐ官撰国史。本項に記載された内容は、実際には延暦九年十一月

- 二十五日（丁亥）の記事である。
- (72) 鯨尾矛 鯨の尾に似た形状の矛。切先の部分を両刃にして平たくそらせたもの。
- (73) 姓氏録 《新撰姓氏録》。平安前期の系譜書。嵯峨天皇の勅をうけ、万多親王らが編集。
- (74) カラフト玉 中国東北部から樺太を経て日本に渡来した練物の玉。緒締などに用いる。
- (75) 佩玉 装身具の一つ。腰をしめる革帯などにつりさげた玉類。
- (76) 五百箇御統 多くの玉を緒に貫いたもの。
- (77) 三代実録 《日本三代実録》。六国史の一つ。清和・陽成・光孝三天皇の事績を記した編年体の史書。
- (78) 流霞路 流霞道（りゅうかどう、ながれしぐれみち）。陸奥国北部から、出羽国北部の秋田城以北に通じる交通路と考えられる。
- (79) 手纏 腕飾りの一つ。古代、玉・鈴などを紐に通し、ひじにまとった輪形の装飾品。
- (80) 盟神探湯 古代の神誓裁判の一形式。沸騰した湯の中に手を入れさせ、火傷の有無により正邪を判定する方法。
- (81) 倭訓栞 註（5）参照。

- (82) 古事記伝 《古事記》の注釈書。本居宣長著。
- (83) 和名抄 《和名類聚抄》。平安時代の漢和辞書。
- (84) 説文解字 中国最古の部首別字書。中国文字学の基本的古典。後漢の許慎著。
- (85) 日本紀私記 平安時代、朝廷で行われた《日本書紀》講究行事の際の覚書。
- (86) 爾雅 中国の字書。漢の学者たちが諸経書の伝注を集録したものといわれる。
- (87) 墨江大神、志賀の海神 いずれもイザナギノミコトが橘小門之阿波岐原で禊をしたとき生じた神々。
- 【付記】 自筆本から写本への書写時、もしくは底本（全集）の翻刻時の誤りと思われる箇所を、本稿では次のように修正の上、現代語訳している。
- （全集十卷38ページ5行目） かけ線り↓かけ線り。書写時の誤りと思われる。
- （同60ページ15行目） こたひかなつる↓うたひかなつる。翻刻時の誤り。
- （同68ページ18行目） 此橘と立るも↓此橘と云へるも。翻刻時の誤り。

真崎文庫内叢書における真澄遺墨及び関係資料写文の翻刻

松山修

翻刻について

大館市立栗盛記念図書館が蔵する真崎文庫には、「菅江真澄著作」と総称される菅江真澄の自筆資料（写本を含む）があり、秋田県指定文化財になっている。

真崎文庫における文献資料二二七点のうち、右の「菅江真澄著作」四十六点と「手柄岡持（朋誠堂喜三）自筆作品並びに関係資料」三点（M-1397、M-1728、M-1729）が秋田県指定文化財で、その他の二〇七八点がすべて大館市指定文化財である。その中でも菅江真澄の自筆資料が含まれることは、本誌『真澄研究』第二十二号（平成三十年三月）で明らかにしてきたところである。

ところで、真崎文庫には、その収集者真崎勇助による古文書や古文獻からの抜き書きや写しが数多く残されている。それらを今、「写文」と呼ぶことにする。写文の多くは書冊としてまとめられ、さらにそれらの書冊が同じタイトルの下で群をなしている。その群は「叢書」と呼ばれる。真崎文庫の叢書は、下に示す通り十六種、二六五冊を数えることができる。

種類	請求番号	叢書名	冊数
1	M-6	秋田の落葉	55
2	M-7	酔月堂叢書	50
3	M-8	やみ津々理	29
4	M-9	芳園拾遺	7
5	M-10	温故図録	10
6	M-11	酔月堂隨筆	5
7	M-12	筆まかせ目録	1
	M-13	〃 1編	5
	M-14	〃 2編	5
	M-15	〃 3編	5
	M-16	〃 4編	5
	M-17	〃 5編	5
8	M-18	汲古録	27
9	M-19	舎惜録 1編	10
	M-20	〃 2編	10
10	M-21	こしかたぶり	3
11	M-22	艦圖録（おんとくろく）	5
12	M-23	酔月堂雑録	10
13	M-24	囊草（ふくろぐさ）	4
14	M-25	己巳録（きしろく）	8
15	M-26	庚午録（こうごろく）	3
16	M-1852	乙丑録（いつちゅうろく）	3
		計	265

叢書に含まれる写文の中には、原本となるものが現存していないものや他に写文がないことなどから、写文といえども貴重な資料になっているものがある。

このことは菅江真澄に関する記述でも同じで、未来社『菅江真澄全集』などの図書に掲載されていないことから底本がわからないものや、さらには真澄研究であまり話題にされて

こなかったものなどがある。

当館の展示では、真崎文庫における真澄に関する記述を紹介するため、これまで幾度となく取り上げてきた。ただ、どの叢書にどの記述が写されているかを、叢書全体に位置づけてとらえることをしてこなかった。そのことから本稿では、叢書の冊子別に真澄関係の記述を整理することにしたものである。

ただし、本誌で写文を紹介するには分量が多すぎるため、制約を施さざるを得ない。詳しくは凡例に示すとおりである。

(秋田県立博物館 主査兼学芸主事)

凡例

- 一、すでに『菅江真澄全集』(以下、真澄全集の略称を用いる)で翻刻されているものうち、長文については翻刻を割愛した。その場合、誤字や細かな表記の違いについては、底本の違いではなく写文の誤りと判断した。
- 二、翻刻を割愛する場合、文章の始めを「▽」、終わりを「△」で示し、その中に真澄全集の巻数、あるいは頁数や行数を示した。巻数は第一巻を①とするなど丸番号を用いた。
- 三、短冊や色紙などの分量の少ない遺墨資料については、真澄全集に翻刻されているものであっても新たに翻刻した上

で、()内に真澄全集の頁数などを示した。

四、資料名にある「M」は、大館市立栗盛記念図書館の請求番号で、リストは大館市教育委員会『真崎勇助翁コレクション目録』(平成五年)による。

五、叢書ごとに請求番号を示した上で仕切り線を入れ、加えて巻数ごとにも請求番号を示した上で仕切り線を入れた。

また、叢書名・巻数・請求番号をゴシック体にした。

六、叢書の書冊によつて、目次や見出しの有無がある。また、目次にある見出しと項目にある見出しが異なる場合もある。その場合、目次にある見出しを優先した。

七、見出しについては、「一二」のように数字を漢字に置き換えたものや、「六号」のように「号」を付けたものも若干ある。これらを「十二」や「六」のように漢数字を用いたものに置き換えた。

八、見出しに数字等がなく順番が示されていない場合は、丁数の表ウラで表した。

九、割註を「」内に示した。

十、写文には、漢字にひらがな、あるいはカタカナが混じっている場合がある。この場合を含め、読みやすさを考慮してすべてを漢字かな交じり文にした。

十一、行数をLで示した。後は最終行からの数を表す。

M—6 『秋田の落葉』

【巻五】(M—6—5)

【七】「五城の目森明庵の記」

(▽真澄全集④277頁～同278頁にある《軒の山吹》「五城の目森明庵の記」△)

(※真澄全集④287頁にある《風の落葉六》「異文二」とは歌と年号が異なる。)

【巻二十一】(M—6—22)

【一】「花のしのゝめ」

(▽真澄全集⑩363頁～同369頁にある著作《花のしのゝめ》△)

【二】「花の真寒泉」

(▽真澄全集⑩265頁～同274頁にある著作《花の真寒泉》△)

【三】「雪の胆沢辺」

(▽真澄全集①407頁～同417頁にある著作《雪の胆沢辺》△)

(※ここでは、地の文を詞書にし、歌を二字分上部に書く写

し方をしている。)

M—7 『酔月堂叢書』

【巻十四】(M—7—14)

【六】「道の夏くさ」

(▽真澄全集①403頁～同411頁にある著作《道の夏くさ》△)

M—8 『やみ津々理』

【巻八】(M—8—8)

【六】 稲川直清講余割記抄

稲川直清君ノ筆記ノ中ニアリ 「講余割記十五」

管^{ツツ}井真澄ハ和学者ニテ博覧ノ一奇人也。常ニ昼夜頭巾ヲ脱ガザルヲ以テ俗ニ常冠ト云。別シテ名所旧迹ヲ探索シテ精細ニ絵入ニテ記録セル書類数十卷アリ。之ヲ真澄遊覽記ト云、今旧主家ニ御所蔵也。此人常ニ在処ヲ人ニ語ラザルガ為ニ加賀公ノ浪人ノ落胤ナドト云ハ附会ノ説也。予、仙北郡六郷^{ムラ}ノ官舎ニ在リシ時、同郷ノ竹村治左エ門来リ話次、真澄ノ事ニ及ブ。彼曰、真澄ハ当村熊野宮神主熊谷政治ノ宅ニ永

ク居ラレシガ、晩年ノ事故、或時治左エ門曰、人ノ死生ハ量
 リ難キモノニ候処、若シ翁ノ没セラレシ時、御在処ヲ心得ザ
 レバ訃報ニ由シナキ事ヲ云タレバ、其時始メテ参河国雲母
 ノ荘入文村白井某ノ次男ト云ヘル由。終ニ秋田ニ終リ、年
 七十二、三歳ナルベシト云。性酒ヲ好マズ、小食ニシテ極メ
 テ摂生ノ道ヲ守レリト云。豊嶋町ノ鳥屋宇助ト云者ヲ養子シ
 テ迹ヲ譲レリト云。死シテ沐浴ノ時ニモ一生成天突ヲ人ニ見セ
 ヌ事故、死トモ其志ヲ失ハヌト云テ、宇助ハ頭ヲ平生頭巾ヲ
 冠リタル儘ニシテ上ヘ顔隠シヨカケテ歛セシ由。其後、熊谷
 政治上京ノ節在所ヲ尋ネタルトキ、其家ハ郷土ノ様ナ家ニテ
 大家デアリシトナリ。菅井白太夫ノ後裔故、紋所ハ梅鉢也。
 ソレヨリ附会ノ説ヲナスモノ也。那珂助教先生ノ家ニモ暫ク
 居ラレシガ、家ヨリ折々金ヲ送り来タルト云事也。秋田ニ来
 リシヨリ学問ガ進ミタルトテ喜テ話セシ事アリタリト云。
 右之筆記ニテ真澄翁ノ生国村名明了と存申候。以上

二十七年四月尽日

高橋克己

真崎勇助君 硯北

(※真澄全集別巻一・16頁に翻刻がある。)

【巻十】(M—8—10)

【十四】菅江真澄翁七十年祭詩歌文発句

菅江真澄翁の遠忌に

頼昌

くもりなき真澄の月のよの中に光りを残し玉の言の葉

真澄翁七十年の遠忌に遊覧記を 正幸

かきおきし人はむかしになりぬればふみのあるじのかたみと
 ぞ見る

菅江真澄翁の七十年祭に寄鏡懷旧といふことを

信衛

真澄鏡こゝろにかけてあふぎつゝむかしの影を偲ふけふかな

真澄翁の追善に 田口九耕

国の為め尽せし功績顕はれて千代仰かるゝ水荃のあと

三河なる雲母のさとよりめぐり来て光りとゞむる月の出羽路

菅江真澄翁七十年追善をよみて奉る

貞直

君が名を千とせに伝へ寺内のみはかにたてる松風のご系

雪松

おくつきの山松風もなつかしき昔ながらの音と思へば

真澄翁の遊覧記を拝読して 長保

水荃の古りにしあとを見るにつけてきみがいさをの高きをぞ
 しる

菅江真澄翁の西来院追善会によみて奉る 翠

おくてかる秋田県のふる事を書あつめたる君ぞ尊ぶき

政治

真こゝろにあまたつどへてまつれるはみなをしへ子といふべ
かりけり

元貞

世にのこる真ことの言葉月かげの澄み渡りたるこゝちこそす
れ

兵一

やちがほのたるほの秋田かきわけていよくふかしみづくき
の跡

桐齋

古のことかきつめてのこされしきみがいさをぞ尊かりける

恒四郎

世のためにつくせし君がいさをしはなきてをろがむ外なかり
けり

堅治

としへてもしたふあまりになき君のみたまをまつる今日にも
ある哉

兵吉

国のため君がしらべし文は皆ひらけゆくよの光とぞなる

喜代治

君なせしあまたのふみは世にありてくにの宝となりけるか

な

菅江真澄翁七十年の追善によみて奉る

観堂

なき玉を弔ふ水のかげ澄て深き御法の月ぞうつらふ

菅江真澄翁の七十年祭に詠て奉る 駒蔵

かきのこし君がゝたみをしたひつゝなをゆくすゑにつたへと
ぞおもふ

徳蔵

一筋につくしゝ君がいさをしはのちのよまでもかをるなりけ
り

与助

濁りなき菅江の清水としをへてくむ人あまたなりまさるかな

浅治

なきたまのかゝれしふみは世にひろく手向の花とにほひける
かな

久蔵

国のためつくしゝ君がいさをしはのちのよまでのかゝみなり
けり

真澄翁七十年忌の追善会に

那珂小市

世の為に植にし種は七十の今日咲く花の包ぬるかな

雨はれて袖手をぬらし今日のゑん

定吉

枯れてさへ月の影澄む尾花哉

墾農

今も其汗で秋田のみのり哉

桐齊

菅の江の蓮をちりてもかほりかな

定吉

菅江真澄翁の追善会にまうで、

七むかし立や枯野の夢の跡

鴉香

菅江翁七十年祭に詠て奉る

ぬかついて時雨にぬるゝこゝろかな

竹精

故菅江真澄翁の追善会を営みて

亡き君かいさをしとうて祭ける

近藤耕志

枯れてなお世に誉めらるゝ尾花かな

桐齊

菅江真澄翁七十年の追善会に相逢ふて手向に寄せてよめる

大川祖順

幾世まで薫り残して菊の花

散る花も遠くはしらず匂ひかな

夢さめて見れば七十歳経りにけり

万世に名残り惜む真澄翁

亡き跡を絶ゑぬ煙や今日の宴

菅江翁七十年追善会賦一絶供焉

岡崎雪松

寺内山頭松樹中 瑣珉高表菅江翁 嘖々賞揚先及処

秋田遊

覽記書功

菅江真澄翁の追善の会に仮名の詩を賦して靈前に備ふ

八百齋

こゝろの友とかたりあひつゝけふの亡靈に菊を手向てはや七十ぢのむかしなりとは尚なつかしき水荳の跡

祭文

維時明治三十一年十一月廿七日、薰沐齋戒謹テ菅江大人真澄翁ノ神靈ニ白ウス。生(小生)素ト翁ノ何人タルヲ知ラズ。又、其事蹟ヲ詳ニセズ。明治十年ノ頃、生初メテ真崎氏ノ石亭ニ到ル。尔来氏ニ親泥スル事、茲ニ二十余年ナリ。生ノ翁ヲ知ル、実ニ真崎氏ノ媒介スル所ナリ。是ニ於テ翁ノ著書ヲ閱、翁ノ事蹟ヲ察シ、其好古ノ情、愛国ノ志、生ヲシテ敬慕禁ゼザラシム。或ハ其著書ヲ写ス。或ハ其遺墨ヲ購ヒ、之ヲ尚ブ事師ノ如ク、之ヲ愛スル事兄ノ如シ。彼ノ遊覽記ノ如キハ、雪ヲ踏ミ暑ヲ冒ス辛苦、経営ノ余リニ就ルモノニシテ、六郡ノ古来、旧蹟、地景、風俗、細大収メテ洩サズ。其功蹟実ニ偉大ナリト云ツベキナリ。近年、教育家ノ郷土史ヲ編成スルモノ、一ニ此記ニ基カザルナシ。況ンヤ、明治維新ノ初メニ当リ、百事新ヲ尚ビ、旧ヲ廢スルノ弊、一時靡然トシテ起リ、社寺土農ノ古伝、旧蔵ノ歴史關係ノ物ニシテ、徒ラニ賤商ノ手ニ落チ、其存亡ヲ知ルニ、由ナキモノ往々之レアリ。中ニ就テ、

僅力ニ我曹同好ノ秘笈ニ蔵スルヲ得タルモノハ、初メ、翁ノ著書ニ因テ其所在ヲ知り、將サニ亡ビントスルニ、之レヲ存スタルモノ又鮮トセズ、嗚呼高哉。天樹公ノ明、翁ノ技ヲ知り、翁ヲ遇スルコト浅カラズ、嗚呼深哉。翁ノ志、公ノ恩ヲ荷ヒ、公ニ報ユル所、赤誠空シカラズ。今哉、国粹保存、歴史研究ノ道大ニ開ケ、翁ノ著書ノ如キハ、実ニ羽陰六郡ニ於ル海洋ノ磁針、山野ノ枝折ニシテ、生等ノ如キ後進者ヲシテ、古ヲ探リ、故キヲ温ヌルノ行路ヲ開キ、方向ヲ導クモノ、皆是、翁ノ賜モノナリ。翁世ヲ去リテ後七十年、遺芳弥薰ンズ、残灯益明ナリ。恭シク時差ヲ供ヘ、茲ニ聊カ翁ノ尊靈ヲ慰メ、敢テ生等ガ敬慕、崇拜ノ微誠ヲ致ス。冀クハ享ケヨ

平鹿郡角間川町平野虎吉檜首百拜謹而白

政良拜
見ることに慕はるゝかな後のため君かもせしその筆のあと

(※真崎勇助や石川理紀之助等が催主となり、明治三十一年十一月二十七日、菅江真澄没後七十年祭が秋田市寺内にある西来院でおこなわれた。その詳細を伝える資料である。)

【卷二十一】(M—8—22)

【五】稲荷棟札 狐之書

○鳥居村に柴田市之助が祭る稲荷明神の棟札臨書。

○長サ一尺八寸、横六寸五分。

○此棟札天正のころより伝ふ。こは狐の書つるよし。一字も読解事あたはぬもの也。むかし天狗の書といふもの、また狐の書といふもの見し事あり。凡似たり。

稲荷棟札表(図)

棟札裡(図)

右雪能伊伝波遲平鹿郡三卷ヨリ抄録

(※真澄全集⑥にある《雪の出羽路平鹿郡三》図絵〔239〕に同じだが、わずかに写していない部分がある。)

【卷二十六】(M—8—26)

【十七】十曲湖序 菅江真澄

(▽真澄全集④149頁にある《十曲湖》序文△)

右菅江真澄翁著「十曲湖」自序也。此本に「明德館図書章」と云ふ捺印あり。何つ頃他へ所有せられしか。

仙北郡西明寺齊藤高英の所蔵と云。明治四十三年七月十八日石川理紀之助の語を聞けり。此日現本を見せられたり。石川写せしと云ふ。

右本持主の名前を石川が書て見せられしをこゝに貼付す。

「仙北郡西明寺村 斎藤高英」

【九】秋田物語殘編 菅江真澄

○阿伊太物語

いにしへより鰐田飽田秋田など見えたり。倭訓栞あいだの件クダリに出羽のくに秋田をあいだといふは韻通ずるなり。日本紀に鰐田作る。和名鈔に鰐をあぎとよめり。美作の郡名英多は音也○秋田城介は出羽ノ介にて秋田城を守る也。姓の城も是より出といふ云々と見えたり。秋田は人の名にも見えたり。氏にも多し。竹取物語に名をばある紀ノ秋田を呼んで付ケさす。あきた、なよたけのかぐやひめとつけつ云々と見えたり。著聞集九巻に、強盗入たりけるに、貞綱は酒に酔て白拍子玉寿と合宿したりけり。おもひもよらぬ処寢処にうち入たりければ、貞綱太刀をぬぎて打はらひ、玉寿を引立て後苑へしりぞき、檜垣より隣へこして我身もともに逃にけり。其事世に聞へて、強盗に逃たるわろしなとさたしけるを、貞綱かへり聞て、今より後なりとも強盗にあひて命うしなうまじき。幾度も君の御大事にこそ命はをしむまじけれ、といひけるにあはせて、秋田左衛門尉義盛が合戦の時、昼は紅のほろをか

け黒き馬に

(柱：秋田物語 一)

のり夜は白きほろをかけて葦毛の馬に乗りて、軍のさきをかける。誠に一人当千とぞ見えける。日来の詞に合せてゆゝしくぞ侍りける。終に組合ものなかりければ、自害してけり。云々と見えたり。此出羽ノ国秋田は本ト郡ノ名ながら六郡に亘るがごとくに、ことくにうどはもはらおもへり。秋田城介ありしゆゑにや。秋田にてもはらつかふ詞にまた調度にまれなまれと古き名どもの云ひ残れしど、したゞみ貝の訛伝はりてそれとは人もえしらざる事の多なれど、沢水のさは流れうせなむもをしければひとつふたつと書もて行けば、とを、はた、みそ、よそ、いよのゆげたのたぐひして、人の見なむもつゝましけれど、都多蔓のつたなき筆のまに／＼おのがこゝろのほかにかまかせたり。

○くずはなくずのうを

大和ノ国芳野葛とて葛粉クダナの名におふはむかし国栖人の制りて貢りしより其草をくずの葉ともくずかつらとも云ふか、又、吉野が皿尺サリタケとてそのころ鮎ノ魚を

【十】しのゝはくさ残編 全人

此城山にいたりて神無月の枯生の草をはらはせて、きよき筵をしかせて、此千重に包みたる神像ミガタをときてなから斗りおし

ひらき給ふほどに、風さと吹て木ノ葉はらくと散りかゝるをうち払はむとし給ひしかば、多賀谷の館に火かゝり、煙高ク棟にたちぬ。こはこはいかにと人々驚きさはげば、君もあはてふためき、ちり込し落葉のまた神影を巻をさめ馬をとばせて飯館たまふに、館には露も火のけしきもなく、こゝにある人はつねさまのわざしつゝ、人々のとくあはたゞしく販り来給ふ君をあやしみぬ。来る人々あきれてめをひきそばめ、こは神のなしたまひしみわざにやあらむ。神像をおして見奉らむとし給ひしかば、神のみいかりならんとおもへり。君も神像にむかひぬかづき、あやまちくひかしこみてみがたに□□に人もなくちりこみたる木葉は今に巻こみておはしませりとなむ。正月ノ十一日ごとに連歌を奉る例あり。その連歌は北野の能楽院より奉る也。その発句を某々宿の梅てふ事いづもしか作りもて宿の梅といふは御願主の句と定メたり。百韻誦をはるまで

(柱：しのゝはぐさ一 二十)

(※『芳園拾遺』全七巻は、秋田の文人等の自筆断簡を貼り合わせたもので、真崎勇助の写文からなる他の叢書類とは趣を異にしている。ここに翻刻したものは菅江真澄による自筆草稿である。)

M 10 『温故図録』

〔巻一〕(M 10—1)

〔十丁表・ウラ〕

霞むつきほし 菅江真澄著

略 (◇真澄全集④ 78頁後L7) 向能代に出たりくいまを

はじめにこそあなれ(同79頁L1△) 略。

〔十一丁表〕

(◇真澄全集④) 《かすむ月星》 図絵 (642) △

〔十一丁ウラ〕

(◇真澄全集④) 《かすむ月星》 図絵 (643) △

〔十二丁表・十三丁ウラ〕

美香弊乃誉路臂ト云卷二 菅江真澄

波都企

(◇真澄全集④ 57頁L5) 十二日、雨もや、晴てく鈴木長兵衛といふぬしのもとに、宿つきたり(同58頁L9△)

略。

〔十四丁表・ウラ〕

(◇真澄全集④) 《みかべのよろい》 図絵 (627) 及び図説

説明文の後半部△)

〔十五丁表〕

(◇)真澄全集③ 260頁にある《津軽のつと》(第四部) △

〔十五丁ウラ〜十六丁ウラ〕

(◇)真澄全集③ 《津軽のつと》 図絵〔405〕〔406〕〔407〕
△

以上七葉は真澄遊覧記より抄出。

【巻四】(M—10—4)

〔二十八丁表〕

菅江真澄翁粉本稿/内

(◇)真澄全集⑨ 《粉本稿》 図絵〔13〕 上段 △

(※)図絵説明文の最終部「景政の五りんも見えたり」を写していいい。

〔二十八丁ウラ〕

菅江真澄翁粉本稿/内

(◇)真澄全集⑨ 《粉本稿》 図絵〔17〕 下段 △

〔二十九丁表〕

(◇)真澄全集⑨ 《粉本稿》 図絵〔17〕 上段 △

菅江真澄翁粉本稿/内

〔三十丁表〕

菅江翁/書ヨリ抄出

(◇)真澄全集④ 《勝手の雄弓》 図絵〔964〕 △

【巻九】(M—10—9)

〔五丁表・ウラ〕

(◇)真澄全集⑥ 《雪の出羽路平鹿郡七》 図絵〔342〕 △

(※)図絵〔342〕の右に同書259頁「森岡」の項目、同書260頁「田村ノ産物」、同書253頁「旧器」の項目が書写されている。

〔六丁表〕

(◇)真澄全集⑥ 《雪の出羽路平鹿郡八》 図絵〔373〕 △

〔六丁ウラ〕

(◇)真澄全集⑥ 《雪の出羽路平鹿郡八》 図絵〔374〕 △
右ハ雪能出羽路八之卷ニテリ。真澄遊覧記也。

〔十二丁表〜十三丁ウラ〕

本書真翁也。牛丸平八氏写之。

愛染臨写粉本

(◇)真澄全集⑫ 《雪のおろちね》の図絵〔71〕と図絵〔73〕
△

(※)二図を横並びにして、建物や地点にイロハを付け、イロハの説明を冒頭にまとめている。

【巻一】(M-11-1)

「(四)」 真澄先生書翰並和歌

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫184頁にある書簡(4) 高階貞房宛△)

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫183頁にある書簡(1) 高階貞房宛△)

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫183頁にある書簡(2) 高階貞房宛△)

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫183頁にある書簡(3) 高階貞房宛△)

(※この書簡について、真澄全集⑫588頁下段にある解題では「大館市立栗盛記念図書館旧蔵」とするが、昭和二十六年における同館への移管時点での所在確認は不明である。ここは栗盛教育団旧蔵とすべきであろう。)

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫184頁にある書簡(5) 高階貞房宛△)

(※この書簡について、真澄全集⑫589頁上段にある解題では「大館市立栗盛記念図書館旧蔵」とするが、昭和二十六年における同館への移管時点での所在確認は不明である。ここは栗盛教育団旧蔵とすべきであろう。)

〈断簡〉

金花山といふ麓を旭川行ぬ ますみ

こぼれてはあさ日の川の光そふこがねの花の山吹の露

おなじ河くまにうぐひすの鳴ぬ

花咲ばいかに長閑き旭川ながれて匂ふ鶯の声

雪の山に鶯鳴なり

汝れも来て花とてまよふ消あへぬ雪の高根に鶯のなく

桜淵フチといふに

岸に寄る波を花とやかくばかりやがてさくらの淵フチにちらまし

(※原資料の断簡は、秋田県立博物館平成十年展企画展図録『菅江真澄』に掲載された。)

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫192頁〜同193頁にある書簡(20) 鳥屋

長秋宛△)

(※冒頭の天註に「酔月子云、此書ハ友人竜田氏ノタメニ故アリテ予ガ珍藏トナレリ」とある。昭和八年八月三十一日発行『秋田叢書別集菅江真澄集』第六の口絵に、北秋田郡大館町栗盛教育団所蔵として図版が掲載されている。真澄全集はこの口絵図版を翻刻したとあるから、所蔵先を「大館市立栗盛記念図書館旧蔵」(昭和二十六年に移管)とするのは誤りで、ここは栗盛教育団旧蔵とすべきであろう。)

〈断簡〉

勅使館見てよめる長うた 「酔月子云真澄翁作にや。直書を以て写す」

あら玉の つきたちかさね きさらぎの 日にけにやゝに
日も長く 霞もたてば わきへつの せとになみたる たか
くくの 高ききのべを きえのこる ゆきてもみなと かし
のみの ひとりにはあれど むらきもの こゝろふりおこし
しきたへの 袖ふりゆけば したのおひの 道はかたぐ
雪はあれど 春をえおほひて 春草は もえ出てあれば
おむかしみ それさへあるを ぬつとり きゝすはなけば
玉ほこの 道ゆきがてに のぼりたち ふりさけ見れば み
なとべに 小船つらなめ すぎきには すとりなつさび 海
原に 浪もえたゝず 八重だゝみ しげるが如く 水とりの
かもちふ船は もみぢばの ちれるが如く かくしこそ
見ともあがめや むかしより 今の世までも もてはやす
その百人の 百うたの あるが中にも 鎌くらの 右の大臣
の 世の中は つねにもかもな なぎさこく あまのをぶね
とうたはれし そのうたをしも しぬびつるかも

かへし歌

春の日の長きもしらに 出立て霞と引けるあまのたぐなは

(※原資料は所在不明であるが、撮影写真が秋田県立博物館

蔵の深澤多市旧蔵資料にある。筆跡の特徴に加えて内容が長歌であることから、鳥屋長秋による筆と考えられる。)

(※真崎文庫M-975『寺内旧蹟誌附録』に「勅使館見てよめる長うた 欠名」(目次の文言)が真崎勇助によつて写されている。その識語として「酔月子、此勅使館の長うたは先年菅江真澄翁の真蹟を借うけ写置たれど、もとより名もしるさゞれば必らず同翁の詠みなせしとも定めがたし。後証を待のみ。今寺内旧蹟誌の編輯に臨み再び爰にのす」とある。)

〈断簡〉

大山梶明神

真澄

いたづらに空はしぐれて杉の尾の杜の梢はいろもかはらず

早春山

あづまぢの春とやいはんふじの根の雪より明て霞むおほ空

松岡といへるかな山にてよめる

白銀もこがねの花もみちのくにならひいではの山ぞさかゆく

雪吹をやみなければ

梢よりちるは花かもしら雪を大沢嵐名に立てふく

白の木生ひ立るを見て

千代を經て宇須となるべき木々はみな枝(た||脱)れ地につくといふ也

(※「いたづらに」の同歌は《秋田のかりね》真澄全集①
194頁及び《秋田のかりね(異文)》真澄全集①227頁、
「あづまぢの」の類歌は真澄全集②にある断簡(13)(19)
(88)、「白銀(しろかね)も」の同歌は《風の落葉六》真
澄全集①232頁、「千代を経て」の同歌は《白白之図(異
文一)》真澄全集⑨452頁にある。

【巻二】(M-11-2)

【十三】地蔵之記

鰐田五城の目新河町といふ処の辻堂に地蔵大士の石仏あまた
おはしけるが中に、大なる立石の面に半軀の菩薩有。此石は
杜山の山脚よりとりて、渡倍莊介綱治の砌にとしごろまろば
したるおもて履脱石ついでいしとしたりければ、これをふむ人をりとし
てはたふれふし、身もそこないやぶる事あれど、ひたぶるに
ひんがしの御寺のおしへを守る家にてさのみやはとてとし月
ふれど、いよくさる事のいまし耳しげくなれば、ことやか
らの人々のうらびさせ梓ひかせなどすれば、尊き石をふみや
りてかしこしとも思はれてなどいへば、掘り上るるに三の梵
字有つ。こと文字はよみもとかれじなどあらまじに語らひて、
法の師の教にまかせて此そびらに地蔵尊のみかたしるをきら
せて、そとせのむかし此舎には奉るとなん。やつがれさぐり

もとむれば、種字の梵形抔淳古にしていまし世の人々の及と
ころにあらず。承和五年七月二十日右為妙法尼〇〇〇といふ
のみぞさだかに見ゆる。こと文字はえこそ見わくべうもあ
らね。承和の年の号は神日本磐余彦の尊由、五十四代にして
仁明の御代にあたりてや、千とせも近きものかゝる石のある
じや誰ならんと昔の下までもうち偲れて、此地蔵菩薩を作り
奉らずは承和の昔もさらに人しれでや過なむと石仏のそびら
にむかひ手酬して、亡たまの埋れし名もあらわれぬかたら
ざりせばかたらざらまし 是をかゝなべておもふに、いにし
へ太宰ノ師從三位高ノ成章の女にして具戒精進世にならびな
く法華経の行者にて八十一に身を越ふるまですでに六万部を
ぞずんじける妙法尼といふ人有しが、其徳をしたひこゝかし
こに壘して祭るにや。はたまほにその人のすぎやうしありき
てこゝに身まかれる墓誌石にてやあらんかし。さりけれど、
そのとし月を精しからねばさだかにそれともさだめがたし。
尚、後に見ん人これをかうがへてかいそへたうばりて、また
かゝむ事をほりし侍るものか。此梵形ふみでのすさみ円仁大
徳のみでならんといふ人のありつれど、慈覚大徳はこのとし
承和五年に東大寺の実慧上人の従弟にて惠運といふ師ととも
にもるこしへ渡りて、おなじ十四年に帰朝ありと聞えつれば
いかゞ侍らんかしらじかし。

此ふみや往復ふ人の見なん事をも憚の関のはゞかりあり。慙し杜のはづかしけれど、世にかゝるふるごとをたゞに捨なんも浪速の筆の本意ならんと、人の進めにまかせてこゝろ短き筆にかいのこし侍る事しかぐ。

(※真澄全集④177頁〜178頁にある《ひなの遊び》「石仏地藏大士の記」とは細部で異なる。『筆まかせ』一編五卷(M-13-5)にある「二十六」菅江真澄翁履歴に、「南秋田郡なる五十目村なる新川町の辻堂の額を見しに「文化六年己巳夏六月三河国白井真隅」とあることから、真澄(真隅)の識語部分を含めて、「新川町の辻堂の額」を写したと考えられる。)

〔十四〕梅の花湯の記

(▽真澄全集②162頁にある断簡(55)△)

(※ただし、最終部の「たはれ歌ひとくさ あつからばうめ ゆといひてひさぎ女の梅が香盈す鶯のそで」が写されていない。原資料は真崎文庫で、秋田県指定文化財「菅江真澄著作」に含まれる。)

(※『酔月堂雜録』巻六(M-23-6)「二」にも写している。)

【卷三】(M-11-3)

〔十八〕菅江真澄翁本国素性平元氏之説

歌の原に書きやふ左の如し

春雨のふる枝の梅のしたしづく香をかぐけらみ草やもゆらむ予が是を見解きたるは弘化の始の頃なり。家にある草稿反古の内に入り幼女ら始のまをひきさきたるにより皆川に投げる草より写し故おきぬ。皆川文四郎真澄の其画像に自ら題せる一幅の掛物を示せる時かきて贈りたる故、其草を残せるなり。

徳しるす。

菅江真澄終身本姓を頭と共に包み今に至まで其本国素性を知る者なし。今其写照に自題せる一首の和歌にて本国素性明らかにせられたりき哉。

春雨のふる枝の梅のしたしづく香をかぐはらみ草やもゆらむ本国は加賀にて前田侯の連枝隠居せられし人の落し種なる事疑なし。

春雨のふる枝の梅のしたしづく

枝は連枝の意にて兄弟を連枝といふ。ふるとは雨のかけ言葉なれども古の訓にかよひ隠居せられし連枝の人故、古枝といふなり。梅は前田侯の家章。したしづくは其母

へ幸のかゝりたるをいふ。

香をかくはらみ草やもゆらむ

歌の一と節は梅の下た雫を土中に孕みて其かおりにて草の萌出たるならんといふことなれども、その寓せる処は、前田侯の種をかくのごとく身にやどして我身を生み出したるよと深き意を籠めたるなり。香加をか買ぐといふ詞の中へ加賀の文字を孕ませ、草は我が身になぞらひたり。もゆらむと想像のてにおはを用ひたるはわざとくもらしていひたるなり。一首皆此の体なり。

さて是に就て思ふに、真澄、梅ばちを紋所とし「其ふりを少しく被ひたるは憚り避けてなるべし」菅江を以氏とし真澄を名とせるも其意皆昭々乎として不可掩。

前田侯は菅丞相の苗裔にて菅原を姓とせる故、其菅の字をとりにて菅江とし、丞相の諱道真の真の字以我が名の頭字となし、菅家の末流にて心に濁なきとの意にて江の字、澄の字を添たるなり。

黄泉の下にて此老なにと思ふぞ一言のいらひ聞まほしけれ。

又按に前田侯の本家にては、近世公子にて終りし人なし。分家の加州江沼郡大聖寺侯の家なるべし。故に江沼の江の字を菅の字へ合せて此となしたると思はる。

後に真澄がかける筆のまに／＼といふ本を巻しに、童子の頃富士へ行きたる事又三河国遠江の国の事など一くだりならず書きたるをもて、老ふれば三河の国人のやうに見えぬが、そは其母なる者三河の国の生にて菅原姓の諸侯の奥へ奉公に出、はからずも其老侯の種をやどしたるを妾にかへられたるにもあらねば、外への聞えを憚られ、其生国へ送られ月満て生み落せるものなるにも、徳川三代將軍の手をかけられしめの妊身になれるを其里本へかへされ子を生みて母子とも終りしをある姦智にたけたる小僧の其生みたる子と偽り天一坊と名を称して江戸へ出たるよしを記せる本あり。彼は偽の子、此は実の種なれど、子をやどせらし女を親里へ帰されしは同じ類ならんかし。徳又しるす。

(※題名にある「平元氏」と文の前後にある「徳しるす」から、この説を唱えたのが平元謹斎、通称「徳(たもつ)」であつたことがわかる。)

(※M—8—8の『やみ津々理』巻八・「六」稲川直清講余剗記抄で「此人常二在処ヲ人ニ語ラザルガ為ニ加賀公ノ浪人ノ落胤ナドト云ハ附会ノ説也」とするやうに、明治時代になつても人口に膾炙した説ではあつたが、妄説として評価されていたものであらう。)

〔一九〕菅江真澄翁墓

友たちあまたして石碑立る時によみてかきつける
三河ノ渥美小国田雲(タヌ)はなれこゝに來をりて夕星のかゆきか
くゆき年まねくあそべるはしにかしこきや殿命の仰言いたゞ
き持て石上古き名所まきあるきかけるふみをら鏡なす
明德館にことくゞにさゞげをさめて劔太刀名をもいさをも万
代にきこえあけつるはしきやし菅江をぢがをくつき処

鳥屋長秋

正面ハ菅江真澄翁トアリテ鳥屋長秋ノ長歌ヲ彫リタリ。傍ニ文
政十二己丑七月十九日卒年七十六七トゾアリキ。(図略)

〔二十〕菅江真澄翁和歌

歳暮

暮てゆく年の終りや三河路を思ひ出羽に身は老にけり
菅苑に栖る人のもとへみな月斗申つかはしける
ころもでも涼しこゝろもすがくし菅のそのふく風のまに
く

月前雁

こゑ晴てしばしは空にあり明の月のくまなる鷹のひとつら

雪中待人

やま風も絶て大雪に閑なるこゝろの友を松の下庵

海路日暮 菅江真澄 秀雄

くれわたる海のおもかちとり梶のこゑをしるべにつゞく友舟
〔※「暮てゆく」の同歌は《笹ノ屋日記》真澄全集⑩429頁、
「やま風も」の同歌は《風の落葉六》真澄全集⑪175頁
にある。〕

【巻五】(M—11—5)

〔一〕粉本稿序

秀雄は白井永治と云人にて、はじめて我が藩に來りし時の名
也。是は菅江真澄翁の事にて、此人の書集しもの八十冊明
徳館にありしを 佐竹義和公へ奉りたり。又草稿のこゝかし
こに残りしもあり。予も又蔵せり。人の持伝へしとて粉本稿
〔原行〕一冊、稿本婢呂綿乃具一冊、合せてふたま(き||脱)
を見しうちに、粉本稿にのみはし書あり云々。

〔▽真澄全集⑨〕13頁にある《粉本稿》序文△)

〔二〕鉢位山神社縁起

〔▽真澄全集⑫〕170にある断簡(69)△)

(※原資料の卷子は横手市大森町個人蔵である。)

〔三〕観音寺由来

(◇真澄全集⑥124～126頁にある「観音寺由来」モリガタリ)△)

(※最終部に「菅江真澄」の署名がある。)

〔四〕菅江真澄和歌

〈和歌九首〉

旅宿聞虫

真澄

露ふかき野辺のちぐさをまくらにてむしも夜寒の袖に鳴なり

雨中鶯

うぐひすのうは毛の色も草も木もみどりにかへる野路の春雨

立春山

春は今朝紀人ともしもまつち山まちえていとゞたのしかるら

し

折梅

をる人の袖の匂ひをたがそでにうつして送る梅の一えだ

顕悉

つゝみこし露の玉づさちりしよりうき身ひとつのおきどころ

なき

夕鷺を

うぐひすのいさゝむら竹ふしなれてねぐらに販る夕ぐれのこと

系

小場愛米のぬしことし文化九とせ、四十とせあまり二と

せといふ齡をほぎて青木氏忠固のもとより扇ひとひらを
贈られける。此ぬしにかはりて

老の阪千代をは山の麓松よしよねさしもかぎりいられし

臙の桜 一名月影桜

月影のうつらばさぞな湯の森はひるも臙の桜咲なり

雪吹をやみなければ

梢よりちるは花かもしら雪を大沢嵐名に立てふく

(※「露ふかき」の類歌は真澄全集⑫178頁上段にある断

簡(120)、「月影の」の同歌は真澄全集⑧38頁にある

《月の出羽路仙北郡十三》、「梢より」の同歌は真澄全集⑥

502頁にある《雪の出羽路平鹿郡七》にある。)

〈断簡〉

(◇真澄全集⑫165頁下段にある断簡(58)△)

〔五〕石仏地藏大士の記

(◇真澄全集④177～178頁にある《ひなの遊び》第三

部「石仏地藏大士の記」△)

〔六〕柳の杜のふるごと

(◇真澄全集④182～183頁にある《ひなの遊び》第六

部「柳の杜のふるごと」△)

○月出羽路「仙北郡千代ふるいつき」野田邑前北浦廿三卷

野田といふところにてことしもをへぬれば

真澄

月も日も雪のたかやまみじか山つもりく〜てくるゝとしかも
もむじやう十とせまり玉くしげふたとせといふあらかね
のつちのとのくがねおふうしのとしの元めふみで試ると
て

いつ万代も筆の命毛長らへてかき流さばや水くきの安斗

(※右は、真澄全集⑧197頁にある《月の出羽路仙北郡
二十三》の題簽及び序文に同じ。)

【十三】浅利家琵琶付テ詩歌(※真澄のみ)

天文年中浅利与市則頼同民部勝頼、十狐城三居住セリ。其遣
器ナリトテ旧来大日堂ニ取ミダレテ残リアルヲ、菅江真澄見
出シテ和歌ヲ詠シタル。示後四方之雅客詩哥アリ。大日堂ハ
旧時浅利氏尊信ノ伽藍ナリ。即今郷中ノ共有トナリ村総代人

ニテ預リ置ク。詩歌琵琶ノ内箱之内等ニ貼附セリ。

浅利家の調度とて大日堂に納めてこぼれたる琵琶なむむ
けるを見て 菅江真澄

むかし誰が手に触にけん四つの緒の調に変わる松風の音

(※右の原資料は大館市比内町大日神社蔵で、大館市指定文
化財。琵琶の内側に貼られた短冊は、現在、詞書と歌の三
文字を確認できるだけである。真崎勇助が写した当時、短
冊の歌部分が確認できたのであれば、《雪の秋田根》にあ
る歌とは語句に若干の違いがあつたことになる。全集⑫
174頁の断簡(83)では大日神社蔵の断簡を紹介するが、
終句と「読人」とあるところが異なる。検討が必要であろ
う。)

【十四】菅江真澄歌

○大友氏の諸先生の帖のうちに

竹間花といふことを 真澄

くれたけのしげみがくれに咲花も見えて葉分の風にほふ
也

梅が香や光解に風の色 菅江真澄翁

墓(花押)

海辺松雪

真澄

なみの花ちるか三穂の浦風に雪ふきこぼす松のむら立
(※右のうち、「竹間花といふことを」は全集⑩174頁の
断簡(82)にもある。また、「竹間花といふことを」と「墓
と花押のある句は、真崎文庫M—1669『書画帳』に書
かれている。)

○予がもてる帖の真澄翁の歌に

阿伎良のぬしは世にありとあるみやびごとさとびた
るふしどもいはず、なにくれところをやりひろく
見ひろく行ひて、なほ国々をたづねわたり人々に交
らひ円居せまくほりす。語りければ此ぬしにかはり
て
菅江真澄

雲居路の友と聞まし時鳥この五月雨にふり出てなけ

(※真澄全集⑫173頁にある断簡(81)で翻刻されている。)

【巻二】(M—13—2)

【三】黒百合

此くろゆりは秋田郡馬場の目山の三の瀧の上光り嶽のあたり
にありと、菅江真澄のかくれし筆のまにくといふ巻にあり。
(※真澄全集⑩35頁にある《筆のまにまに二》「くろゆり」
を指している。)

【六】真澄和歌

水石契久

菅江真澄

ざされ石のなれる巖の末までも契はふかき中川の水

【七】尔辞貴迺波末

迺辞貴迺波末ト云卷ノ内ニ

菅江真澄翁著

(※真澄全集③266頁にある《錦の浜》(第一部)に同じ。
この場面に、菅江真澄肖像画に添えられた詠歌「春雨のふ
る枝の梅のしたしづく香をかぐはしみ草やもゆらん」があ
る。)

【十二】鎌田ノ祝瓶

元和寛永ころにやあらむ。出羽ノ国秋田郡率浦ノ荘妹河ノ村な
る鎌田市左衛門、おのが佃るたどころ沼田といふより掘り出
し転賣あり。その高サ壹尺五寸余肩ノ回り四尺余口径リ七寸四
分余也。これいにしへの齋盆にして、齋戸を忌ひ穿居竹玉を
繁にぬきたれなどよめるはにもものにて、千歳もちかきもの
から今またくわりえじもさちなる事になもありける。うべも
鑿居るものにしあれば、尻円ッたてには居る事あたはぬ事也。
此村に貞観のころありし定額の寺観音寺の旧蹟あり。また近

き山田ノ岡に貞観の糸り石などあるをもてもふりにしところ
としてられたる。

文化十四年冬

十月尽

菅江真澄

(※ここに記録した「鎌田ノ祝瓶」について、真澄は、真澄全集⑨の《新古祝籠品類之図》図絵〔318〕、《菅江真澄翁画(仮題「埋没家屋」)》図絵〔303〕、真澄全集⑩の《雪の山越え》図絵〔71〕に描いている。)

【二十七】月の松島

此巻は菅江真澄老人の撰なり。

【三十三】菅江真澄書

飛鳥川の瀬にかはりめかりしほくみし浦も野となり山となる
たぐひは、神世のむかしよりいくちたびともしら浪のうちよ
るきしべはいにしへの通路などいふたぐひぞ多かる。うべも
文化と年のなかはりたるとしの水無月の六日の夜への事にな
む、なみいとくおほきにふりもて、いではの海の磯もとゆ
すりたち、あめつちもひとつになりはてむこちして、名だ
る蚶瀆の浦もふりこぼれはてぬ。あめにます豊岡姫にことゝ
はむ、幾世になりぬ象潟の神垣はしらず、今はう糸田の穂な

みうちなびき月のみふねのかげさす斗あはれいにしへぞしの
ばれたる。

菅江真澄

うつし糸にうつしとめざばきさかたのむかしをいかでみ
づくきのあと

(※大館町栗盛教育団所蔵として『秋田叢書別集菅江真澄集』
第三巻の口絵に資料写真と翻刻が掲載されている。真澄全
集⑫166頁にある断簡(60)と同じ。)

【卷三】(M—13—3)

【三二】真澄翁の画

雄勝郡川向村佐藤宇三郎といふもの所蔵の鳥海山の画は此翁
の筆のよし。外二又巻物もありと庄司氏勇太郎ものがたり也。

【七】是観上人の肖像に真澄の書

笹原寺の家蔵是観上人の肖像に真澄翁書る
笹原寺の是観大徳の新発意恵観上人わが父の像を人にかゝせ
て人に見すましきものからこれに歌ひとつかきて行末ながく
寺に伝へまく思ふと聞えける。まことにけうのこゝろふかか
りけるをおもひて筆をとりぬ。此恵観上人の父是観上人は越
後ノ国蒲原ノ郡弥彦ノ庄小吉ノ郷坂本山伊豆ノ円明寺ノ僧円證上

人の末男也。父円證上人は五條大納言為軀卿ノ猶子にして母は出羽ノ国秋田ノ人にて久保田なる菩提山淨弘寺ノ上人正道の女也。そが娘を是觀上人の生れし里の寺に嫁せしめける事となむ。かくて是觀上人寛政六年甲寅ノ冬十月廿三歳のころ出羽ノ国秋田ノ郡久保田ノ郷に來りて当知山本誓寺ノ十二世にあたる至徳院成是上人の世に此寺に入りて堂のあばれたるを興し門をあらたに建て法器をことごとくとり備へ、いとなき法の行ひの露のいとましあれば、好たる道とて茶は古堀の流を汲みて、大森氏の家の風を伝へ、和歌はみさとの梅月堂黃中にまなび、またつれづれのころやりに庭鞠の上下しきりなるをたのしみ、あるは陶作る事をこのみて、公にも是を造りてなれり。文化九年の春三月八日、空のうらくと長閑なるにゆくりなう 国守入らせ給ひてみけしきことによけく御自造らせ給ふたる 美杼理といふ茶杓に

くり出す柳の糸の河水にうつるみどりの影ぞ長閑き
といふ歌を詠みそへて給りぬ。また一とせ最上川の埋木をもて茶杓をけづりなしたるを 公御らんせさせ給ひて是を苔の衣と名付給ひて 御自此茶杓の筒を作らせ給ひて此筒に

苔の衣の玉ならば終に光はくらからじ

といふ阿漕のうたひものさうかをのくぐりかいて贈り給ふ 君のおほむたまものあまた有るが中に、此ふたくさを

わきて寺の宝とてせりける。ある年荷田ノ訓之といふこの寺に來てぐゑむじ物語をよみ、和語をといて人々にしらしむ。是觀上人これをまなびえて其むねをひらきて古鄧保具斯といふ一まきのふみをあらはし、十あまり五の軌をさだめて古言のとけがたきをときさとし聞え給ふ。此当知山本誓寺は原ノ加賀ノ国笹原といへる処より秋田の土崎の湊に遷して其後今の久保田にうつしたる寺。其頃は野原のごとく柳ひしく茂りてやゝひらけたり。大柳一本異のくまに生ひ残りたるを元文寛保の頃ならんか、此柳を伐りて矢橋ノ山王宮の獅子頭を作りて此里の頭人等日吉ノ神に納む。其由をもて日吉の獅子、まづ此寺に來て神庭ふむといふ事して本誓寺に舞初たりしが浄土真宗門にかゝる神わざめける事似つかぬ事とて十二世成觀上人の代にゆめくなせそとて、此事止ぬられてより寺町へ獅子舞は入りこざりしけるとなもいへり。おのれ此は觀上人とはたとせまり語らひむつびて、をりとしてはこの笹原寺に在る事なほ末ながくむつびなむと契りて

法の師の掛し衣の珠の緒も猶末長く水くきの跡

文政五年壬午正月三河国菅江真澄（花押）

（※真澄全集① 463頁〜464頁にある《筆の山口》「衣のたま」と文意が同じ。）

〔九〕真澄の書

鎌倉のためしとして、雪をかいつかねついでいひちのごとまた
小田のさましてそれに稲だわらをつみもて、火をかけて
やいはらふためしあり 真澄

民安く秋田刈るてふかまくらの庭火ややがて萌る苗代

十五日はさえの神祭とて、蝦夷の稲穂めけるものして粥
の木突てふためしあり。その杖を火焚棒ホタキキといへるはいね
の穂尺ケにやなずららふ

八束足る稲の穂たけのかゆ杖はつきぬ秋田のためしなるらし

〔十〕風の落葉

風の落葉と云三ノ巻に

河北岸 飛根

古名飛岸也。中古富根といへり。慶長十二年丁未ノ秋、渋江
内膳某至りて古町下村大林小林林ノ平となどいふ処を合て馭馬
に定られたり。

此村の北川向とに狐森の近きに、龍ヶ島といふ処に経塚あり。
そは目名瀧村ノ智積院尊諱ノ女種村千光院尊常の室たりしが、
わかきより志シ人にこえて老て心経五百ノ巻書て、龍箇岬の
巖を掘りうがちて納め光明真言五万篇を唱へし地トコロとなん。法
号秋林妙恵といへり。

枝村 狐森 寛永廿年癸未のとしより人住ぬ。

羽立新田 承応元年壬辰のとし飛根村よりうつる。

河北山本郡 田床内

合浦ノ柵タテとて古廓の跡あり。浅利氏の居館たりしよしを云へ
り。

人見日記三云、武州岩築の城主太田三楽「道灌ノ二男」に二
人の子あり。兄を源五郎弟を源太「梶原美濃が事」といふ。
源太は当腹の愛子也。さて源五郎は常に悲ツツみ、是がため父三
楽とは隙あり。上杉家より源太を所望し梶原源太と名乗らせ、
後に美濃と号し、我君の部下となりし梶原美濃景国といへる
豪傑の士也。

(※真澄全集① 81頁及び同82頁にある《風の落葉三》に
ある。同書は真崎文庫である。)

【卷四】(M—13—4)

〔四〕真澄書翰

菅江真澄老人の書翰とて、友人小野岡某精一郎を訪ひし折
から示されたりしは 二月廿六日

〈書簡〉

(▽真澄全集⑫ 191頁にある書簡(17) 佐藤太治兵衛宛△)

〈書簡〉

〔▽真澄全集⑫190頁にある書簡(15) 佐藤太治兵衛宛△〕
〔※原資料は現在、秋田県立博物館蔵。〕

〈書簡〉

〔▽真澄全集⑫189頁にある書簡(14) 佐藤太治兵衛宛△〕
〔※原資料は現在、秋田県立博物館蔵。〕

〈書簡〉

〔▽真澄全集⑫191頁にある書簡(19) 佐藤太治兵衛宛△〕
〔※宛名にある佐藤熊蔵を佐藤太治兵衛とするのは、再考を要する。参考／拙稿「佐藤太治兵衛は一人だったのか」・『真澄研究』第二十三号・平成三十一年秋田県立博物館〕

〈書簡〉

〔▽真澄全集⑫190頁にある書簡(16) 佐藤太治兵衛宛△〕
〔※原資料は現在、秋田県立博物館蔵。なお、真澄全集で「^{不明}」とある部分には該当する文言がない。よって、この部分は削除すべき。〕

真澄雅公 有政

御風流不相変御たのしみ御出情のよし大慶。さて又御とし玉として毛織御恵被下辱候。世が望し品殊ニ大慶付候。大たのしみに待てたゞ成たけ出たちの間に合候様御計ひ(可||脱)被下候。いよく三月一日に出足いたし候。御存じ記の事決

て延引なく候。何も今一度御地へと心がけ候へ共無其義、これよりはたゞ御縁次第再度また可申上候。以上。

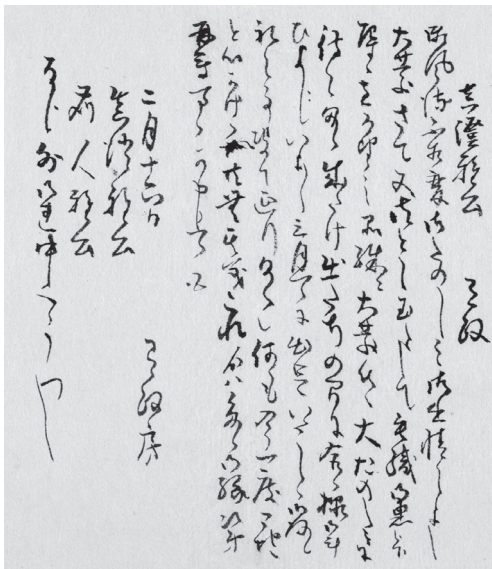
二月十六日 有政房

真澄雅公

刈人雅公

尚々 外御連中へよろしく。

(※真澄宛の書簡で、原資料は現在、秋田県立博物館蔵。差出人や内容の詳細は不明である。翻刻の修正を含め、さらなる解明のために写文の画像を掲示しておく。)



〔八〕菅江真澄歌

山家冬月 真澄

零ぬまた落葉しぐれて月影のあらしにくもる冬のやま里

山家

つま琴のしらべにかへて柴の戸のしばく馴る軒のまつ風

寄鳥変恋

家鶏の尾のながきせのかはるこそ人のそら音を頼み来つらめ

〔卷五〕(M—13—5)

〔五〕真澄和歌一首

薄暮松風 真澄

なつの日のかげも入佐乃山松に秋のこゑきく風の涼しき

〔十六〕柳の杜のふるごと

菅江真澄が書たる夷舎奴安装婢といふ巻を見しに

柳の杜のふるごと 菅江真澄

(▽真澄全集④182頁〜183頁にある《ひなの遊び》(第

六部) △)

(▽真澄全集④にある《ひなの遊び》図絵〔764〕△)

〔二十〕蝦夷が湊

夷舎奴安装婢

略 (▽真澄全集④179頁にある《ひなの遊び》(第四部)の冒頭五行△) 略

〔二十一〕菅江真澄翁履歴

菅江真澄翁履歴 石癖頑夫述

一 天明四年甲辰の夏科野国にて書たる「来目路^{クメヂ}橋^{ハシ}」といふ日記あり。

一 同年越後の国より鼠ヶ関を経庄内へ入り御崎峠を越へて由利郡へ来り。象潟を一見しては嶋を経て雄勝郡なる柳田といふ村に年を暮たりし日記を「秋田の刈寝」といふ也。此時秋田に来りしはじめなりと考ひたり。此日記を予所蔵せり。

一 同五年乙巳秋八月三日よりおなじ葉月廿五日までの日記を「そとが浜風」といふ。同廿六日よりなが月の卅日までの日記を「けふのせばのゝ」となづくのはいづれもつがる路より罫田路をへて鹿角郡に至り岩手郡和賀郡を過て仙台路にかゝり江刺郡の片岡邑に宿りたるまでをかいたるなり。此記行も予所蔵せり。

一 同六年より同七年までは仙台路を遊覧せしならんとおもわれたり。其紀行いまに見ず。

一 同八年卯月朔、日より六月廿九日までの事を記して「はしわのわか葉」といふて仙台の国にて書たる日記なり。是も予所蔵せり。

一 寛政年中南部津軽松前の日記数冊あり。

一 享和の年より再び秋田に來り。文政年中迄秋田藩内を漫遊し所として至らざるはなし。此翁の日記はすべて八拾五冊ありしを、佐竹公に奉りて御家蔵となりて今に残れし。しかれども此冊子の外にも諸所に散逸せるありて予も数冊を所蔵せり。

一 此翁の生国は区々に語るものあれど、雄鹿の春風といふ巻を見しに、三河国乙見なる菅江の麻須美とあり。又南秋田郡なる五十目村なる新川町の辻堂の額を見しに「文化六年己巳夏六月三河国白井真隅」、又平鹿郡なる猿田村の辺りなる鉢位山神社縁起にも「文政八年乙酉正月三河国人菅江真澄」とぞあり。又歳暮の吟とて「暮れてゆく年のをはりや三河路を思ひ出羽に身は老にけり」とも聞えたり。

一 此翁当国に來りしはじめは白井永治秀雄と稱したるよし。予にも秀雄と書たる短冊あり。真澄と書たるもある也。享和の頃、再び城下に來りたる時ならん。明德館にめされて、義和公に拝謁せしとも聞えたり。其時にや黒縮緬の頭巾なんとも給はりたりしともいふ人あり。又名所旧蹟神社仏閣

の取調の命を蒙りしとあり。かたくも御伝馬賄など給はりたりと「雪の出羽路」「平鹿郡拾四冊」「月の出羽道」「仙北郡式拾四冊」の巻はすなはち命に寄りて書たるものならん。仙北郡梅沢といふ村に漫遊せし頃病にかゝり角館なる伊勢堂の別当鎌田某が家にて終りしといふ。南秋田郡の寺裡村鎌田某は真澄翁と朋友たり。殊に何事によらず引受人にてあれば、其亡体ナキミタを此鎌田が許に取寄せ同村なる奇南橋の辺り高野山といふ処に埋葬したり。悉しくは末にしるせり。

一 翁の肖像を見しに、画工何人かしらねど黒の頭巾を冠り、梅ばちの家章の付たる波皮のごときものを羽織にして褥の上に座せり。後口に机をすへ其上には筒入の書籍を置き硯に臥牛の水滴をそへて筆架に筆をかけたなり。硯屏を兼たる筆立には壺対の筆をさすあり。傍に青磁の花瓶に梅の枝挿たり。自筆の和歌の賛あり。云く、「春雨のふる枝の梅のしたしづく香をかぐはしみ草やもゆらむ」「真澄」とぞありける。此歌は津軽の国にて「雨中梅」といふ題にて読たる也。「逐辞貴ニシキ 廻波末マヅメ」といふ日記に見えたり。此歌の意によりてとか或人の生国の考もあれどいかゞにやいふかし。肖像を友人小室怡々齋をして写さしめて、予も珍藏す。又此翁をさして俗に常冠りともいふは高貴の人の前にいたりても其冠りを脱がずといふなる人にや。

右真澄翁の真蹟にして予が珍藏せしなり。明治十六年十二月ノ調。

M—14 『筆まかせ』二編

【卷二】(M—14—2)

【一】菅江真澄和歌

十月卅一日田口耕三氏訪ひ来りて、四壁といふ人の浜辺に松に鹿の画に真澄翁の賛ありけるを恵みを得たり。此真澄翁の事におゐては予兼て信用せし友の田口氏の耳にとゞまりたる其心ばえのいとふかゞりしこと感ずるにあまりあり。其賛に 菅江真澄

小雄鹿のうらの浜木綿ふみしだき百重に思婦嬢や恋ふ良武
(※原資料の軸装は現在、秋田県立博物館蔵。)

平鹿郡角間川村なる平野勝真氏が、柴田与三よりといひへる人より得たる真澄翁の短冊の類とて、十月廿八日付の手翰十一月一日に達したる写に

折梅 真澄

をる人の袖の匂ひをたがそでにうつして送る梅の一えだ

【卷三】(M—14—3)

【一】菅江真澄和歌

海辺納涼 菅江麻栢「真澄共」云

此まゝに月をもやどせたたびごろもかけて涼しき袖のうらなみ

【二】七月二日見し古筆(※真澄のみ)

雨中梅 真澄

おほぞらは零る色としも見えなくに梅かゞしめる軒の春雨

などほとゞぎすといふ事を 真澄

月にまつ雨にまつ夜はつれなくてなどほとゞぎすやみに鳴くらし

旅宿聞虫 真澄

露ふかき野辺のちぐさを枕にてむしもたびねの袖に鳴なり

(※このうち、「おほぞらは」の同歌は現在、秋田県立図書館蔵及び秋田県立博物館蔵の短冊にあるが、文字遣いから原資料は県立図書館の短冊と考えられる。「露ふかき」の原資料は、文字遣いから現在秋田県立博物館蔵の短冊と考えられる。)

M—16 『筆まかせ』四編

【六】菅江真澄和歌

春恨恋 真澄

花にさへつれなくとはでことぞうき月にとちぎる春夜の空

【十七】菅江真澄和歌

樵路躑躅 真澄

つゝじさく山路の真柴刈りまぜて夕日の色をはこぶますら雄

【二十】菅江真澄和歌

友人大友氏所蔵の菅江真澄翁短冊に

春のなからばかり旭川といふ処に鶯の鳴たり 真澄

花咲ばいかに長閑きあさひ川ながれて匂ふうぐひすのこゑ

【二十四】菅江真澄和歌

菅江真澄翁和歌短冊二枚

白梅 真澄

香に匂ふ影にえならぬ木のもとほそらに霞まぬ月のしら梅

夕立風

遠方に白雨すらし風はやみふり来ぬあめの見えて涼しき

M—17 『筆まかせ』五編

【巻一】(M—17—1)

【一】真澄遊覧記序

小鹿の鈴風「鈴嶋風をいふなり」

おなじとしのさつきばかり、鹿兒田の中路を経て北島の浦にいたり、玄慧法印のふるあとをたづね、しらぬひの筑紫におなじ水嶋の名もゆかしう舟渡りして見て、また潮門シホドの浦に日を経て宮嶋ミヤジマなど見渡りしカタ図あり。是を小鹿の鈴風といふは、平沢の浦に鈴嶋のあるをもて涼風と俗言いふこゝろもて名づけたり。これにすぎて牡鹿の島風といふがふみあり。

簷ノキ迺ノキ金棗ノキ棠

此ひとまきのふみは、やよひのなから神足の里のほとりに在りてさつきの葉盛のためし、山椒粽、龍毛の沢井が物語、鑑川のいはれ、曾譽企のすさびふるきたてふみ、小泉の菱沼、安彦の城山、岩城の村のふるもの語、鈴木の家末の家に残りし横刀のいはれ、補任のひとひら、仁鮎の近となり子掛山の花菱鏡、五十のめなる森明庵の記、やまぶきを折り葺くことのおやしければ、この冊子の名をもて簷迺金棗棠といふごとしかぐ。

文化八とせの春よりおなじ夏かけてかきのすものから久

保田のおしねといふふみにかいうつり侍りぬ。

勝手能雄弓

右三冊菅江真澄著書明治二十二年七月十日從五位佐竹義生侯へ献上セシ也。御目通ニテ此遊覧記ハ元明德館ノ御蔵本ナリシヲ御紛失ニテ久シク見ヘザリシヲ、昨廿一年中故アリテ予ガ手入りタリ。委細ニ言上セシナリ。

鰐田濃刈寝

天明四年甲辰の九月十日出羽の国に入たるよりおなじきしはすの三十日の夜までかいのせ、はぐるやまきさかたのことをしるす。

けふのせばのゝ

天明五年の秋、つがるぢをへて南陪の鹿角郡になりて錦木のむかしを尋ね、岩手郡和賀郡を過て仙台路にかゝり、江刺郡の片岡邑に宿りたるまでかいのせたり。其言葉みじかういひもたらざればけふのせばのゝと名づく。

そとが浜風

天明五年乙巳秋八月三日、みちのおくつがる路にいたりてふたゝびいではの國鰐田のさかひをわけて十二所の関を越て沢尻といふ邑に来て、おなじ葉月廿五日までかいて名をそとが浜風とせり。おなじ廿六日より又みちのおくの南陪可都埜にいたるをべちに記してけふのせば布といふ。

智誌磨濃胆岨 春

寛政四年壬子のむつきよりやよひのすゑまでを記す。

ちしまのいそ 夏

淤遇濃冬隠

寛政七年かなな月のはじめ、石持のかん籬にぬさとり、あるは小赤河の瀧見にいたり、帰来て此県をいでたゝばやとほりしたるを、太雪日ごとによりて寒されいよりもいや増る冬の空にたびごろもおもひたちなば、雪にふぶかれしらぬ野山のみちにかいくれまどひなん。梓弓おして春をまちてと、山田のひたにとどめける人々の（こゝろ〓脱）ざしはとにつもる雪よりもふかければ、しかすがにえいでもたゝでとしこへ、むつきもはつるころとさだめ、田名部の郷に在てせし日記を奥の冬ごもりといふ。

（※このうち、「勝手能雄弓」の後ろにある漢字カタカナ交じり文の文言が、《男鹿の鈴風》《軒の山吹》《勝手の雄弓》を入手した真崎勇助が、明治二十二年、佐竹侯爵家に献納した事実を示している。）

（※「淤遇濃冬隠」の冒頭にある「寛政七年」は、真澄自身による「寛政六年」の誤記と考えられている。）

二 菅江真澄和歌

菅江真澄歌

閏月 真澄

せきの戸もとぎゝぬ御代にあふさかの月にぞこゆる秋のたび人

竹村吉幹ぬしのもとより

波高くいづこを瀬とかわたるべき三河の水のふかき流は

行道のくらきもはれて夜に光る玉ひろひえしこゝちこそすれ

とありけるふたつの歌の返し 真澄

あだ波のよるべの音もはづかしき三河の水の浅きこゝろは

わかぬ浦の玉に交りて磯に寄る露に光も浪の藻くずは

竹村吉幹氏は今の吉則氏の祖父にして、神儒学に通じ歌

道を好めり。天保十一年菅井真澄氏と交を結び親しく

自宅におゐて待遇せしと云ふ(と脱)伝。

石癖云、天保十一年トアルハ疑ラクハ文政十一年ならん

歟。真澄翁は文政十二年七月十九日に終りぬ。

〔十二〕待隣家花 菅江真澄

菅江真澄翁和歌

待隣家花 真澄

となりとは名のみぞへだて待わぶるこゝろはおなじ花のなか

垣

【卷四】(M—17—4)

〔一〕菅江真澄和歌

菅江真澄和歌、明治九年十一月廿一日秋田郡久保村一関吉郎

兵衛宅ニテ写真タルヲ再ビ爰ニ載ス。

鱒田の郡久保ちふ村にすみける一関なにかしの屋戸の翁

は、文化九のとせの春にうつりてことし八十八とその齡

のいやたかけれど、目ははるの霞と晴やかに齒は松の葉

のちりうせ寿、常磐固磐にかはりなう尚此翁のうみの子

のいやつぎくまで榮行て、そがやそのやとせを山口と

して幾もとせも経なん巨度宝喜をおもひて

老の浪寄るや八十瀬の河隅に八千代の椿発と咲ら武

右

菅江真澄(花押)

(※原資料の軸装は五城目町個人蔵で、現在、秋田県立博物

館寄託資料。真澄全集⑫170頁における断簡(68)に同

じ。

【卷五】(M—17—5)

〔十八〕恩荷奴金風

恩荷奴金風

略 伏翼は五色の雲車にやたぐふらんものか。この画の裏書

に 以前表補絵 寛文中に小笠原氏根田治部輔俊興 別当
永禪院法印慧広代 奉表具 寄進 宝永元年甲子八月 願
主 柏氏丹波国 同氏金兵衛通 別当法印有健代とありて、
その匣蓋にかいなしたるは 羽州之西有大嶋名小鹿本山其形
突兀而出海中段岸千尺如双劍倚天瀑布万仞以廬山弄機葉草肥
両勝熊野峰頭仙客成群怪葛城岳嶺可謂扶桑之絶景矣昔年方士
奏之漢武帝幸于此是則赤神権現也今歲癸卯中夏之望予從客遊
彼佳山伏臨于滄溟仰乘于涼風縱一葦之所如至于華嶽之大麓撰
衣踞虎豹進步登虬龍止舍于本坊而奉拝権現之尊影至信有余欲
寄進此神器也經數日而金木漆膠之工終成矣。爰当山三十六世
大阿闍梨法印円明予之俗縁師兄也拝牌文以感慨彌深因茲已忘
固陋賦小律一章而書此器蓋而已 伏乞 照覧

寛文三年「癸卯」十一月吉日小笠原氏とありて根田治部輔
俊興記之とぞありける 略

雄鹿払戸村の辺りより埋れ木出る。

同鮪川といふ村の山なかに灌の頭といふおもしろき処あり。

同じ此辺りに碁盤石といふことをしるせり。

寒風の麓に岩清水あり。此岩のわれたるひまより見ればうち
に蛇のすめり。八螭蛇ミツツロコチといふものによ云々。

成会の村をめてに、ゆみでのかたに遠からず黒岡といふやか
たのあり。その岡辺には石弩のいと多く、柳葉、鬼面、鳥舌
のたぐひをいたすと語る。妻丐山の麓に出るにひとし云々。
略 行々浅内のやかたになりぬ。こゝにも名だたる湖のあり。
へたをめぐりて村々の見ゆ。此あたりは柴折り、つま木伐る
山もなう、賀須といふつちのくれのごときものを掘りあげて
日に乾て是を焚ぬ。

賀喜石といふ村あり。なべての名は浦田とぞいふなる。人の
家の軒近く、路のかたはらに大石のふたつあり。この石の面
にぬかりみちをふみ入たらんやうして、をさなき足形の付た
り。手形もありしかど、石の碎れて、あしがたのみひとつ残
りつといふ。

略 寒風山の麓なる大保田村に、鮭武屋布ヤシキ武墳とてありけ
るもそのゆへもやあらん。此事のもともあやしければ渋谷地ソフバヤチ
てふことなるをなど書て、一言にいひけちて、はとうち笑ふ
人の多かれどあやしといふもさらなり云々。

頑夫云、「恩荷の秋風」といふは菅江真澄翁の日記にし
て先年抄出したるを爰に録す。

(※《男鹿の秋風》からの抄出で、抄出箇所が前後している
ことからここでは全文を翻刻した。抄出箇所は順に、真澄
全集④33頁L6、36頁L2、37頁L4、34頁L3、

41頁L8、41頁後L5、34頁L5、35頁L2から始まる文章で、中には原文を要約しているものもある。()

M—18 『汲古録』

【巻一】(M—18—1)

【二丁ウ二】菅江真澄歌

梅村聞笛 菅江真澄

こゝろあれな梅咲村の花ぞのにちらさじと吹笛しづかなり

【巻六】(M—18—6)

【十四】ふくだのきよいち

(▽真澄全集⑫136頁の裏書・貼紙資料(68)《混雑当座右日鈔》裏にある「ふくだのきよいち」△)

右菅江真澄翁著せし久保田の落穂といふ巻より抄出

(※右にある「右菅江真澄翁著せし久保田の落穂といふ巻より抄出」の文言から完成本である《久保田の落ち穂》(秋田県立博物館蔵)と考えられたが、文言と分量の違いから《混雑当座右日鈔》(真崎文庫本)の裏書からの写しであることが確認できた。大館市立栗盛記念図書館のデジタルデータでは表部分しか撮影されていないが、実資料では

無理なく裏書を見ることが出来る。なお、真澄全集の翻刻において語句の異同が若干あるが、ここでは特に指摘しない。()

【十六】くぼたふだらく

(▽真澄全集⑫136頁の裏書・貼紙資料(68)《混雑当座右日鈔》裏にある「くぼたふだらく」△)

右菅江真澄翁著せし久保田の落穂といふ巻より抄出

(※「十四」にある「ふくだのきよいち」に同じで、《混雑当座右日鈔》の裏書からの写しである。なお、真澄全集の翻刻において語句の異同が若干あるが、ここでは特に指摘しない。)

【巻七】(M—18—7)

【十六】菅江真澄和歌

夜残雪^(マ) 真澄

庭草のいつかもへなむ消やらで春の日をふる雪の寒けさ

(※歌意からも歌題は「庭残雪」の誤り。原資料の軸装は、横手市雄物川町の個人蔵である。)

【巻九】(M—18—9)

【二十四】菅江真澄扇面にしるせし和歌

夕陽映嶋といふことを 真澄

彩れるゆふ日の波のうつすともえやは系しまの筆に及む

(※原資料は所在不明であるが、撮影写真が秋田県立博物館蔵の深澤多市旧蔵資料にある。)

【卷十二】(M-18-12)

【十六】菅江真澄和歌

阿気の田どころに小山田てふ名のありけるをもてみゆるをやまだと此一まきを名付て

御代なれやあげたくぼたもあめつちのめぐみの露にみゆるを

やまだ 真澄

右雪の出羽路六の巻

(※《雪の出羽路平鹿郡六》の冒頭にある歌に同じである。)

【十七】寺嶋良庵山本郡能代ノ産

雪の出羽路 九卷

植田村

熊野権現ノ宮條カタリに

略 (▽真澄全集⑥315頁L3) 倭漢三才図会出羽ノ部
に〜ものにこそあらめ (同頁L10△) 云々。

酔月子考

雪ノ出羽路といふは菅江真澄(白井永治秀雄共云)が當時藩の命をうけ実地に就て書きたるものなり。世人、俗称して総ての著書を真澄遊覧記といふ。

【卷十四】(M-18-14)

【七】菅江真澄和歌

閑居栽萩 真澄

くさの色はらはぬ庭にうゑおきて浅茅ましまに小萩咲也

【卷十五】(M-18-15)

【二】牛若鷹、鈴木宗因

ながつきの十日云々、(▽真澄全集④40頁L1) 老泊オホトマりをへて〜大口といふやかたあり (同頁L11△)、云々。

右恩荷奴金風 菅江真澄著

【十七】菅江真澄翁短冊

○菅江真澄翁短冊、予が所蔵也

名所花 真澄

いとはやも花にしらみて明ぬればさくらにくもるみよしの、
やま

(※真澄全集⑫156頁にある断簡(34)で、原資料は現在、能代市個人蔵。)

【卷十七】(M-18-17)

【十三】井筒一庵来由

(◇真澄全集⑥59頁〜61頁にある《雪の出羽路平鹿郡二》
「井筒一庵来由」の項目△)

右雪能伊伝波道平鹿郡卷二鈔録

【十四】北村市郎右工門由来

(◇真澄全集⑥76にある《雪の出羽路平鹿郡二》「北村市郎右衛門が由来」モノガタリの項目△)

右同書

【十五】大森寺由来

真澄考に、此本郷邑は(◇《雪の出羽路平鹿郡三》真澄全集⑥96頁後L1)「なほたづぬべし(真澄全集⑥97頁L6
△)

右同書

【十六】大森八景

(◇真澄全集⑥99頁にある《雪の出羽路平鹿郡三》の項目△)

【十七】上田氏一事

(◇真澄全集⑥100頁にある《雪の出羽路平鹿郡三》の項目△)

右同書

【卷十八】(M-18-18)

【二】水ノ面影残編 菅江真澄

水ノ面影

出羽国秋田人

菅江真澄誌

コシノオホキミノミマキ
高志王神條

(◇真澄全集⑫139頁下段〜同140頁下段における《混雑当座右日鈔》裏書にある項目△)

(※《混雑当座右日鈔》は真崎文庫にある。真澄全集の翻刻にある不明・蝕字・ママの部分は、本資料でも写されていない。)

酔月子云、真澄翁水面影といふ冊子を著したる事は兼てしりたれど、散逸したるものか。侯爵家にもなし。いまに其書を見ず。のちに同翁の混雑当座右日鈔といふ冊

子、予が許に蔵せしが其紙のうらに式枚斗りニ涉りて水面影の草稿あり。元より断編にして全部を察する能はず。しかれども寺裡村旧蹟を探検するの一助にもならんものと爰に写す。

〔三〕 観音寺由来

(▽)真澄全集⑥124頁〜同126頁における《雪の出羽路平鹿郡三》にある「観音寺由来」と「観音寺」の項目△)

(◇)《雪の出羽路平鹿郡三》図絵〔259〕〜〔262〕△)
右観音寺由来記ハ雪能伊伝波遅平鹿郡三上溝村ノ條ニアリシヲ抄録ス。

雪のいで波地といふ冊子菅江真澄翁著ス。

〔十八〕 菅江真澄和歌

契待恋 真澄

ちぎりにし時こそ過れこよひまたひとり寝よどの鐘や聞かまじ

〔卷十九〕 (M—18—19)

〔四〕 菅江真澄和歌

野夏風 真澄

涼しさは野原の草のはつかにもあき見せてふく風のした萩

花便

初さくらふみにこき入て書送るこれを都の花のたよりと

(※このうち「初さくら」は、真澄全集⑫178頁にある断簡(128)の同歌。)

〔卷二十〕 (M—18—20)

〔十〕 菅江真澄翁和歌

時鳥 一日百詠ノ中

尋郭公 真澄

ほととぎすたづねしかひよ柴人にのこりし花のありかをぞきく

月前郭公

聞人も来てふに似たり月夜よし夜よしとなれも鳴ほととぎす

夕時鳥

それとえも聞こそわかねほととぎすゆふとるぎのものとまぎれに

野時鳥

むざし野の月をやしたふほととぎす草より出て艸に入るこゑ

里時鳥

ほととぎすなが鳴里は月花もよしやよし野の名にしおふらし

船中時鳥

うらふねのうらみはあらじつなで縄くり返しなく波のよるひ
る

馬上時鳥

のる駒も月毛なりせばほとゝぎす雲に入るともかけて聞まし
時鳥稀

水無月もちかき夜がれにほとゝぎす又はつねまつおもひ也け
り

行路夕立

白雨は涼しくはれてたび人の入目をわくるみねのかよひぢ

疎屋夕顔(疎)

賤が家のかきねも軒もゆふがほにかくれの小野をうつしてぞ
さく

竹風夜涼

風渡る庭のむら竹月更てはしぬ涼しく語る夏の夜

水檻風涼

おもふどち涼しくよるの檻に秋の音きく庭のやり水

野草秋近

夏もはや末の腹野の花薄こぬ秋まねて風の涼しき

〔二〕谷文晁神農画 菅江真澄賛

谷文晁神農画ニ菅江真澄ヲ賛

毛母貝差夜千草の露を命にて生る薬や採始にけむ

真澄

右平鹿郡角間川落合正藏家蔵にして衛生展覽会江出品になり
たり。

(※原資料の軸装は盛岡市個人蔵で、現在、秋田県立博物館
寄託資料である。)

〔五〕菅江真澄自画賛

ウツシテハフコトコソキカネタノシサハチヨマツカネニカハル
紆都式弓波於鄧巨贈岐迎年多能斯差幡智譽麻通賀泥迹珂架流
他吉那美

文政四年辛巳四月朔日菅江真澄

右阿曾村鶴吉所蔵也。

(※原資料の軸装は、現在、秋田県立図書館蔵である。)

〔七〕元稲田

神武紀に嚴稻魂女をいつうかめとよめり。元稲田は嚴稻魂女
を字音にいひしを省語とし、それをまた元稲田などの文字に

作ヤサなしつるにや。

〔十二〕 雄勝郡

(▽真澄全集⑤29頁～30頁にある《雪の出羽路雄勝郡一》
「雄勝郡」の項目△)

〔十二〕 八幡村

(▽真澄全集⑤234頁にある《雪の出羽路雄勝郡五》の項
目(同頁後L2まで) △)

〔十三〕 天真院了翁禪師

(▽真澄全集⑤234頁後L1～237頁にある《雪の出羽
路雄勝郡五》の項目△)

(※漢文には捨て仮名が施されている。)

〔十四〕 柳田治兵衛道定墓碑

(▽真澄全集⑤239頁～240頁にある《雪の出羽路雄勝
郡五》の項目△)

(※漢文には捨て仮名が施されている。真澄全集における最
後の一行が写されていない。)

〔十五〕 稲庭村幡江伝右工門

(▽真澄全集⑤106頁～107頁後L2にある《雪の出羽

路雄勝郡二》の項目△)

〔十六〕 山田村 ケタニ

(▽真澄全集⑤250頁～251頁にある《雪の出羽路雄勝
郡五》の項目△)

〔十七〕 小野村 石巻

○宮内村、古堂村にならびてこの村あり。小野とは此処をも
はらいひし事となん。熊野ノ神、西なる杉ノ森に鎮座^{マセリ}。末社
に二柱ノ神おましませり。南を和歌ノ宮とまをして小町ノ詠歌
百首を神と齋ひまつりしみやどころ也。またむかし黄金宮^{コガネノミヤ}
宮といふもありしと聞ケば其宮はいづれを申ととへどさる宮
はなし云々。其幅ノ上へなる旧宮畠を佃^{ツケ}り耕^{ウケ}ば甍^{カマカウ}瓦陶皿やう
ものなり(を||脱) 得る事あり。また石弩てふものありな
どいへり云々。

(※真澄全集⑤160頁にある《雪の出羽路雄勝郡三》「宮
内村」の項目に同義ながら異文である。)

右「十」元稲田ヨリ「十七」込雪能出羽路ト云卷ヨリ鈔
録セシモノナリ。菅江真澄翁著書ニシテ白阪高重氏ノ蔵
ナリ。

(※このうち、「十二」～「十六」は《雪の出羽路雄勝郡》の「江

畑本」という草稿本の記述となっている。

【卷二十三】(M—18—23)

【七】菅江真澄和歌(※真澄のみ)

神無月斗そで山てふ処にいたりて

旅衣袖の山里いと寒くわくる御嶽は雪ぞつもれる

右短冊三枚小林謙吉氏の蔵七月六日写す

(※「右短冊三枚」は、菅江真澄和歌の前に示された「五」義和公御和歌と「六」茂木知教和歌を合わせた数である。右に示した短冊「神無月斗」は、現在、秋田県立博物館蔵。)

【八】菅江真澄和歌

籬瞿麦

なでしこの花のまがきををもる風(に||脱)色吹こぼす露の涼しさ 真澄

【卷二十四】(M—18—24)

【十五】菅江真澄翁和歌

梨花

消えやらで去年ふる雪のちりひぢもつもるや高き山なしの花

右菅江真澄翁短冊の和歌より。東山氏の蔵するもの。

【十八】菅江真栖翁書にて和歌

「大汝小彦」名在「賤窟」幾世経

「大名持少名彦名は在はします賤が岩屋に幾代経ぬらん」字仮名の歌なる由手に入れまし差上云々

右は桜田恒久被訪たる時、菅江翁の書望ニ依リ世話呉様頼み遣候得ば、大正四年五月十日付を以右之通申越されて尤読方は解なければ野夫など読事も不叶とも、幸にして此解によると中々おもしろき次第也。五月十二日誌ス。

【二十三】菅江真澄和歌

雨後苗代

あめもやゝ春の山田の秋しるく水もゆたかにもゆる苗代 真澄

右平鹿郡鍋倉村清水永雄宅にて見るを写す。大正四年八月廿九日。

M—19 『舍惜録』一編

【卷一】(M—19—1)

「一(十五丁ウエ)」芝蘭選(※真澄のみ)

松島にてよめる 真澄「参河白井氏」

ながめ捨て飯らむをしなかくに霧たちこめよまつしまの浦

(※「芝蘭選」は、秋田藩士茂木知利(蕉窓)が東都や諸国の知己を頼つて揮毫してもらつたもので、その跋を曲亭馬琴が書いたものである。参考/井上隆明「曲亭馬琴と『芝蘭選』・早稲田大学国文学会編『国文学研究』五十九・一九七六年六月。)

(※「著作堂雑記抄」(『曲亭遺稿』、明治四十四年、国書刊行会)によると、この歌は曲亭馬琴の『著作堂雑記』に、「松島にて 三河白井真澄 ながめ捨て帰らむをしなかくにきりたちかくせ松島のうら」として掲載された。)

M—20 『舍惜録』二編

【巻七】(M—20—7)

【十】真澄先生和歌六首

海路日暮 菅江真澄 秀雄

くればわたる海のおもかざどり梶のこゑをしるべにつゞく友舟
菅苑に栖る人のもとへみな月斗申つかはしける

ころもでも涼しころもすがくし菅のそのふく風のままに

く

月前雁

こゑ晴てしばしは空にあり明の月のくまなる鳥のひとつら

早春山

あづまちの春とやいはんふじの根の雪より明て霞むおほ空

保止野といふ処に春のころいたりて

春ふかきほどのしられて薄くこきみどりにもゆる小田の苗代

歳暮

暮て行年のをはりや三河路を思ひ出羽に身は老にけり

M—23 『酔月堂雑録』

【巻五】(M—23—5)

【十一丁ウラ】

保止野といふ処に春のころいたりて

真澄菅江

春ふかきほどのしられて薄くこきみどりにもゆる小田の苗代

(※『舍惜録』二編【巻七】(M—20—7)【十】真澄先生和

歌六首にある一首と同歌。)

【巻六】(M—23—6)

〔二二〕梅の花湯乃記 菅江真澄

(◇真澄全集⑫162頁にある断簡(55) △)

(※ただし、最終部の「たはれ歌ひとくさ あつからばうめ
ゆといひてひさぎ女の梅が香盈す鶯のそで」が写されてい
ない。原資料は、真崎文庫である。)

M—24 『囊草』

【巻一】(M—24—1)

【四丁ウ乙】

真澄遊覧記のおがらのたきと云ふ冊子の中に

(◇真澄全集④127頁後L2) 知光院の験者あり(天註
を除く) 多かりけるとなん、所の人語る(同128頁L6
△) 略す。

(◇真澄全集④132頁後L4) こゝに栖める修験者般若院
ゝやがて桜木にゑりけるとなん(同132頁後L3 △)。

(◇同頁にある天註部分「孔雀明王ゝ羽秋田竜峰」△)。

又宇良の笛たきに

略。(◇真澄全集③433頁L6) 野はらに出てかへさのな
がめゝ行袖の涼しうおぼゆる(同433頁後L6 △)。

又おがらのたきといふ冊に

(◇真澄全集④図絵〔676〕の図絵説明文△)

又みかへの鍔に

(◇真澄全集④図絵〔638〕の図絵説明文△)

M—25 『卍卍録』

【巻一】(M—25—1)

【五丁表】

海路日暮 真澄「白井秀雄俗称永治」

くれわたる海のおもかちとり梶のこゑをしるべにつゞく友舟
(※『舍惜録』二編【巻七】(M—20—7)「十」真澄先生和
歌六首にある一首と同歌。)

【巻五】(M—25—5)

【三十丁表】

菅苑に栖る人のもとへみな月斗申つかはしける 真澄

ころもでも涼しころもすがくし昔のそのふく風のまに

く

月前雁

こゑ晴てしばしは空にあり明の月のくまなる雁のひとつら

(※『舍惜録』二編【巻七】(M—20—7)「十」真澄先生和

歌六首にある二首と同歌。(

文政十二己丑七月十九日卒 年七十六七とありき。

(墓碑図略)

文は鳥屋宇助といふ歌人也。

M—1852 『乙丑録』

【巻一】(M—1852—3)

〔八丁表〕

菅江真澄翁は白井英治秀雄ともいふて遊覧記五十冊余り
をかけり。今此書は明德館に蔵せり。世を我藩角館伊勢
堂の神主鎌田某にて終りぬ。墓は府下寺内奇南橋の傍の
山にあり。其銘に云ふ。

友たちあまたして石碑立る時によみてかきつける

三河ノ渥美小国田雲はなれこゝに來をりて夕星のかゆきかく
ゆき年まねく

あそべるはしに

菅江真澄翁墓

かしこきや

殿命の仰言いたゞき持て石上古き名所まぎあるきかけるふみ
をら鏡なす明德館にことづくにさゞげをさめて劔太刀名をも
いさをも万代にきこえあげつるはしきやし菅江(の脱)を
ぢがをくつき処

鳥屋長秋

傍ニ如此彫りてあり。

真澄研究 二十六号

令和四年（二〇二二）三月十一日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二三四

秋田市金足鳩崎字後山五二